

---

# 女装天女！

フィサリア

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

女装天女！

### 【Zコード】

Z5587Y

### 【作者名】

フィサリア

### 【あらすじ】

「女装ヤクザ・幽姫洋一、艶やかに降臨!」

ありえないシチュエーションが織り成す、ハイテンション・スクラップステイックアクションコメディ。

FC2小説に掲載しているものです。

長編ですがサクサク読めるとおもいます。どうか気楽にゆっくじと

お楽しみください。

全身が樂にうつる大きな鏡の前に洋一は立つた。

鏡の中には、何も身に付けていない、生まれたままの自分の姿がある。

洋一の目が、その後ろにあるワードローブへと移動する。

開かれたその扉の中にある、無数の服。多種類のバッグ。  
そしてウイッグ。

それらは全て女物だ。

「クリヒビ」が鳴った。

「…………今なら引き返せる、やめろ、やめるんだ！」

内なる己の声に、洋一の動きが止まった。

「…………なんでヤクザの俺がこんな」と…………

もう一人の自分がため息をつく。

そして洋一は、呼吸をするのも忘れて固まつた。

彼は幽姫洋一 30歳。

この街の暴力団組織、紅椿一家会長の不肖の息子、つまり跡継ぎである。

関西の指定暴力団に所属する紅椿一家は、全国レベルからいえば吹けば飛ぶようなちっぽけな組だが、この地方都市では、商業・工業・政治と、あらゆる分野に根を張る、裏の実力者だった。

その「代田」と言われる洋一は、全身でヤクザを表現している父・義隆とちがって、銀河鉄道の某美人もうつむいて泣き崩れるといわれるくらいい美しい眼と身体をした、母・凜にそっくりだった。

そのせいでやたらとモテた。女性はもううん男にも。

言い寄る女の子たちには愛のキスを。

鼻息を荒げて近寄る男どもには重い拳を、おしみなく与えてきた。そうやって生きているうちに、ヤクザの息子という肩書きも後押しして、いつの間にか立派な次期「代田」と言われるようになっていた。持ち前の美貌とは裏腹な洋一の凶暴性と悪事の際の頭のキレも、これから彼の地位をゆるがないものとしていた。

今夜もこの街で一番のクラブで飲み明かし、お姉さんたちの決しておせいじではない熱い視線に見送られて店を出た洋一は、送るという組の者をムリヤリに帰すと、一人深夜の街を歩き出した。

「二代田、じゃあうさんつス！」  
「おつかれさまっス！」

洋一の姿はどこへ行つても目につくらし。

道行く多種の人々からそんな挨拶が彼に贈られた。

洋一は鷹揚にそれらを受けながら、少し足を早めて通り過ぎてゆく。

盛り場を離れ、シャッターの下りた商店街へと足を踏み入れたところで、洋一は止まってあたりを見回した。

照明に照らされたアーケードの中は、人づきひとづおりあり、まるで墓場のようにシーンと静まり返っている。

洋一のなで肩がガクリと落ち、弱いため息が口から漏れた。

・・・・・ やつと独りになれた・・・・・

さつきまでの辺りを睥睨する目と威圧する足取りは消え、美しい大きな瞳をつるませ、長いまつげをしばたかせて、また歩き出した。  
・・・・・ じつじこつなつちやつたのかなあ・・・・・  
うつむいて歩きながら、独りになるところも考へることをまた心中で繰り返した。

本当の洋一は、その姿形を同じで、とても纖細で華奢な心の持ち主だった。

学問、スポーツともに優秀。華道、茶道、日本舞踊は師範級。  
おまけに絵を描き、詩を作り、歌までうたうという、西洋のルネッサンス人の生まれ変わりのような母に似たのだと洋一は思っている。

むらがる女の子たちに対応していくうちに、無類の女づたらしと尊

されるようになり、いやらしい田で言い寄つてくる男どもの顔面をグーで連打してしりぞけていたら、狂犬と呼ばれるようになつた。全てはふりかかつてくる火の粉を払うための諸行だったのに、やがて誤解はくつがえせないほど深まり、今ではヤクザである。

洋一は、巖を刀で斬りつけてから、それにエロスを塗りたくつたような父のいやらしい顔を思い出して、ブルルと身を震わせた。

-----イヤだ！絶対にあいつみたいになりたくない！  
しかし、彼はヤクザである。

同類、それも組織経営なら親をもしのぐと言っていた。

少しでもヤクザらしくするために坊主に刈つてある髪-----本当は綺麗で細く明るい栗色の髪だった-----をガリガリといた。

次に洋一は、アルフォンス・ミュシャ描く女性に、菩薩の知性と微笑みを足して、神が造りたもうたフィギュアを持つ、母の姿を思い浮かべる。

-----ああ、かあさんはやつぱすこいなあ、カンペキだ-----  
・ なんであいつなんかと結婚したんだりう

ここで彼の為に断つておぐが、洋一はいわゆる世間でこいつマザコンではない。

母である凛は、女性と言ひ偶像を極めた存在ではあつたが、立派な社会人でもあり、己の息子に惑溺などせず、また必要以上に彼を精神的に近づけたりはしなかつた。

だいたい彼女自身がヤクザの娘だったのである。

だから洋一は純粹に、まるで少女が宝塚の男役に憧れるような気持ちでもつて、母のことを敬愛しているだけなのだ。

しかしその母は、洋一が小学校にあがつた年に家を去り、そして成人した年に住んでいたマンションの鍵とあるものを置き土産にして、イタリア人のダーリンと共にフィンランドへと旅立ってしまった。

洋一は世界地図を片手に、そのフィンランドを探したこともある。南米のどこか、たしかコーヒー豆の産地だつたと思つていたその国は、バルト海に面した北欧の寒い国であった。緯度、軽度共にまったくちがつていたし、なによりも日本からは遠すぎた。

洋一は涙を飲んで、母に頼るのをやめ、己で生きなければならぬ。まあ実際の話、生きていくのは楽勝でできるのだが、幸せとは程遠いクラيمな世界でこれからもやつていくのかと考へると、気がどんどん滅入つてくるのだった。

逃げ場はなく、またやりたいこともない。ただ行き詰まり感だけがあつた。

かといって、盗んだバイクで走り出すようなことはとつぐの昔に済ませてあるし、だいたい30でヤクザの自分がまたそれをするわけにはゆかない。

-----どうしてこうなつちゃつたかなあ-----  
結局、この問い合わせつてくるという無限ループの中、洋一が切ないため息をついたとき、アーケードの脇の暗がりから、とつぜん人が飛び出してきた。

いつもの洋一なら母ゆずりの運動神経でヒラリとかわすのだが、落ち込んでため息をついている最中だったのでもともとぶつかってしまった。

急に自分の懷に飛び込んできた人物は、黒いヒラヒラの布で出来たメイド服っぽいもの着ていた。女の子のようだった。

突つ込まれたわき腹が痛かつたが、ヤクザモードでなこときの彼は優しい。

どなりもせず、彼女の肩をそつとつかむと、「大丈夫ですか？」と声をかけた。

「「めんなさい、すみません！」

彼女はうつむいたままでそういうと、するりと洋一から逃れて、アーケードの中を駆け去つていった。

あまりの早業に洋一はしばし、ぼうぜんとしていたが、彼のするどい頭脳はすでにうき始めていた。

あれ・・・なんか声低くなかったか？ それに肩もえらぐがっしりとしてたよくな・・・・・

5秒で答えは出た。

・ - - - あつ！ 男！？

正解である。

どうも最近、水面下で秘かに増えてきてるという、女装の男、女装子というのに当たつたらしい。

夜のドキドキお散歩を愉しんでいる最中に偶然、洋一にぶつかってしまったようだ。

めざりしこものを見た氣分で、また歩き出そうとしたとき、洋一の胸・・・・・いや、正確には恥骨の奥あたりがピクリと震えた。

- - - - なんだ？

思わず足を止めてしまつと、今度は脳内で何かがドクドクと溢れ出してきたのを感じる。

それに同期するように、心臓がコトコトと音をたてはじめた。

- - - - び、どうしたってこりゃんだ、俺！？

訳がわからず田を見開いて立ち尽くした洋一の胸ポケットの中で、存在を誇示するよつにチャラッとキーが音をたてた。

それは、母が洋一に残してくれたマンションの部屋のキーだった。

午前3時。

洋一は震える手でキーを取り出すと、ガラスドアを開けて母のマンションのコンドレインスに足を踏み入れた。

エレベーターで35階へと上ると、扉を開けて部屋に入る。

玄関は暗く冷えていた。

すぐそばにあるスイッチを押して明かりをつける。

短い廊下が、彼をいやなうようにぱつとあらわれた。

誰もいないのに、洋一はそつと足を忍ばせて進んでゆく。

2LDKのどこでもある小洒落た部屋だった。

これまでここへ何度もやってきていた。

別に母を偲ぶわけではなく、組や彼女たちに知られていない、独りつきりになれる場所だったからだ。

また壁際にあるスイッチを押して照明をつけると、人が住んでいないことが不思議なくらい物がそろつた寝室が映し出された。母・凜はすべてを置いて、この部屋を出て行ったのだった。

理由は知らない。

実は大雑把で豪快なところがある凜なので、面倒で身一つで去ったのかもしれない。

そしてここで洋一は、全裸になつて鏡の前に立つてしまつたのだった。

長い回想は終わり、現在の洋一である。

自分がなんの目的でこんなことをしているのか、彼はわからなかつた。

あの女装子に突き当たつてから、憑かれたようにここへやってきて脱いでしまつたからだ。

ただ自分が今から何をしようとしているのかは、はつきりとわかつていた。

とまどつてしているのは、それを認めたくないだけなのだ。

その証拠に洋一の身体はまた動いて、ワードローブの下にある引き出しを開けている。

す一つと音も無く開かれたそこは、下着が咲き乱れるお花畠だった。

洋一の脳内に流れ込んでくる、妙な液の分泌量がグンッと跳ね上がった。

そして視線が己の股間へと向けられる。

そこにあるよう洋一自身 - - - - 彼はそれを「暴れ坊主」と呼んでいた - - - - は、こんなにもドキドキしているのに、なぜかおとなしかつた。

- - - - なんだ？ 僕は心の病なのか！？

そうでもあるし、ないともいえよう。

とまじう心とは別に手は着々とまたうき始めて、黒いセクシーなランジェリー、俗に言う「ひもパン」を指がつかんで履いてしまう。そして絶対に合ひ訳がないと思っていた、母のブラが己の胸にピタリとおさまったとき、その動きは、もはや止めることは不可能なほど加速した。

無意識に田は、さきほどの女装子が着ていたようなメイド服を探している。

しかもあるはずがないそれが、なぜかあった。

・ - - - - か、かあさん・ - - - あなたつていう人は・ - - - -

息子の将来を見通していたかのようなチョイスであった。

遠いフィンランドのある方角を洋一は思わず見上げてしまつたが、それはまったくの方向違ひだった。

フレアなスカートをはき、「入るかな？」と思いながら、そつとブラウスに手を通す。

なんなくそれは体にフィットした。

悪魔のしわざかと思うくらいの偶然だったが、親子なんだから他人より体型が近いのは当たり前なので、実は偶然でもなんでもない。ただ洋一は、それを神のしわざだと思った。

何種類も吊るされているウイッグの中から、長いストレートな黒髪のものを選んでかぶる。

完成した己の姿を洋一は、張り裂けそなぐら鼓動している脳を押えながら、鏡に映してみた。

ない自分が中に見えて、洋一はおどろいた。

学生時代は剣道で鍛えぬき、今でも素振りをかかさない身体だったが、なぜか筋肉質に見えず、あくまで見た目は華奢でか細いことがこの現象に利を生んでいた。

この身体と顔のせいであらゆる精神的災害を被つてきたのに、皮肉にも今はこんなに自分の胸をときめかせている。

原因と結果である今とのギャップに、洋一は頭がクラクラした。

じぱりくそつして自分の姿を見ていたが、ふと今までの緊張がゆるみ、田を鏡からそらせた。

すると、その先にドレッサーが見えた。

とこりうか、すでに語尾が女性化している。

高校時代に、ビジュアルバンドのボーカルを、その時の彼女にムリヤリやらせていたので、化粧方法がわかつていたのがまた不幸だった。

母は仕込んだように化粧品もしつかり残していくつてくれていたので、あつという間に顔ができるが。

「あつ！」

自分の顔を見て、洋一は声をあげてしまった。

双子とはちょっとと言ひすぎだが、年の離れた姉妹くらい母に似た姿が鏡の中に見えたからだ。

さつきまであつた、ウイッグや服とのズレがかなりなくなつてきてる。

これは凶悪さをだすために細く剃りあげている眉の効果も大きかった。

洋一は、ヤクザになつて初めて、己の職業に感謝した。

適当にファンデーションをたたき、まつ毛をビューラーではねあげ、マスカラを塗つてアイライナーを引いただけなのに、目はぱっちりと大きく広がつて見え、つけまつ毛など必要ない。

しかもなぜかびしょびしょに濡れている瞳が妖艶なものを発散しており、アイシャドーすらいらないくらいだ。

元々細いフェイスラインがファンデでさらに引き締まり、顔を構成するパーティーフーつ一つをうまく演出している。

とどめの唇は、小さな薔薇が咲いているよつこ、輝きを放つていた。

「あ・・・・・・」

ついに洋一は、あまりに変貌をとげた己の姿に気を失つてあおむけに倒れこんだ。

精神と肉体のコペルニクス的転換に耐え切れなくなつたようだつた。だが数秒でガバッと起き上がり、またドレッサーの方へと駆け寄ると、完成した自分の姿を見始めた。

いつしか窓の外には朝日が昇り、チュンチュンと雀の鳴く声がしていたが、洋一は夢中で気がつかなかつた。

「おはよおひるやれこめすー。」

「いへんへんへんっスー。」

事務所にはいると、洋一の効いた声や妙に甲高い声の合図が洋一を迎えた。

無言で挨拶を受けながら、個室となつている自分の執務室のドアを開けて中に入ると、どっかとドスクに陣取った。

結局あのあと、ゴミ回収車の夕焼け小焼けのメロディが聞こえてくるまで、女装して遊んでしまった。

そしてベッドに倒れこんでわいつまで寝ていたのだが、身体がまだだるい。

一晩で五回戦連続でエッチしたようなけだるさである。

一日一回は事務所に顔を出す決まりなのでしかたなくやつてきたが、すべに帰るつもりだった。

一時間ほどいじりで時間をつぶしてから出でたかったりで、また恥骨の辺りがソワソワしまじめた。

うつと思わずつめき声が出て、洋一はあわてて口元をやる。

・・・・・一晩だけって約束だったのに・・・・・なんでもまたあそこへこじりつとしてるんだ、俺？

いつたい誰にそんな約束事をしたといつのだろ。わ。

しかもこのセリフの40%ぐらいは、すでに女性化している。

洋一の額を脂汗があおつたとき、ドアがゴンゴンと控えめにノックされた。

瞬時に極道モードへと移行して、低い声で応える。

「おう、はいれ！」

「失礼します」

組事務所に似合わぬ上品な声がして、男がひとり入ってきた。

洋一の付き人兼ボディガードの見習い組員・冴島さくじま 心しんだつた。

「兄貴、お茶をお持ちいたしました」

そういうつて冴島は、馥郁な香り漂うカップを、首も立てずに洋一の目の前に置いた。

「おっ、ありがとよ」

こう答えてカップに手をのばすと、綺麗な夕日の色をした液体を口にした。

「うまい・・・・・ やつぱシンの淹れてくれた紅茶は一味ちがう

目を閉じてそう洋一は思った。

シン。

二人だけの時、彼は冴島をそう呼ぶ。

そして冴島も洋一のことを「兄貴」と呼ぶ。

急いでまた断つておかねばならないが、この二人の間にその道の関係はない。

今までの洋一を見ているから「兄貴」という単語が妖しく聞こえてくるだけで、どちらもノーマルである。いくら言つてもみんな自分のことを「一代目」と呼ぶし、そしていくら頼んでも今までの付き人は紅茶を口く淹没してくれなかつたが、シンは違つ。

それに言葉遣いも丁寧で優しく、不必要に語尾のあたりに、ツとかスをつけないところも気に入つてゐる。

つまり洋一にはピッタリなのだが、ヤクザにはまったく向いていな  
い男。

それがシンだった。

ちらりと横目で見ると、シンはお盆を小脇にかかえ、執事のよつてに謹厳な表情で、洋一の邪魔にならない位置に立つてゐる。そこは、彼が何かを言いつけようとしたとき、サッとすぐこ一歩で前に出てこれるという絶妙なポジションだ。

近いのに主の田の妨げにならない、あくまで影として立てる位置。いつたいこの男はどうじで、こんな技術を学んだといつのだろひ。

洋一がカップをソーサーに戻すと、すつと新聞が置かれる。

左手を動かすとすぐに煙草が手渡される。

だが、シンは火をつけはしない。

洋一が自分でつけることを好むからだ。

新聞から田を離さずに灰をポンポンしても、床を汚すことは決して無い。

そこには必ず灰皿があるからだ。

おまえはドラえもんか、と突つ込みたくなるほど、すぐに望みをかなえてくれる男。

そう、それが沢島 心であつた。

「シン、おまえうちに入つて何年になつた?」  
「今日も満足して、洋一は優しくそういうた。

「三年になります、兄貴」

はつきりとはしているが、ドスを控えた慄懾な声でシンがこたえる。  
「やうか・・・・・ ずいぶんともつ見習いも長いな  
シンが少しうつむく。

その恥じ入る表情を見て、洋一の胸がチクッと痛んだ。

債権の取立てにいかせれば、相手に同情して自分の有り金を全部投げてくる。

博打を経営させれば、まつといつなギャンブルにしてしまって、利益が上がらない。

かといって女をだますことなどできつてないから、スケコマシでも食べていけない。

唯一シンができるヤクザらしことことこえび、ずっとやつとやつてきた少林寺拳法でのゴロまきだが、自分から仕掛けるといつことができるない自衛隊のような専守防衛・局地戦闘タイプなので、やつぱりボディガードどまりだ。

まだ21だから今はいいとしても、これから先はヤクザではなくても生きていけない、そう洋一は考えている。

ゆくゆくは足を洗わせてカタギにしてしまおつ、そう彼は決めていたが、シンがいなくなつた後のことを思つて、つい決心が鈍くなるのだった。

洋一の考えを見透かしたように、シンが心のこもつた声でいう。

「私は、兄貴のお世話をずっとこのままさせていただければ、うれしいです」

洋一の目がシンを見た。マジ顔だった。

「・・・・・すまんな」

「いえ、それが本心ですか・・・・・」

ええやつちやなあワレ、と一セ関西弁で洋一が心中、感動の嵐に包まれている中、シンは、はにかんだ笑みを浮かべて一礼して部屋を出て行つた。

ふ一つと鼻から息を抜くと、洋一はデスクの上に新聞を投げた。

「なんだかんだいってもヤクザだもんなあ。シンには似合わないよ

な・・・・・「

小さくつぶやくと、背中を椅子にあずけた。

本皮を張った椅子が、キュッと小気味よい音をたてて、彼を包み込

んだ。

## 彼女たち

ジリリリリーンー・ジリリリリーンー！

事務所をでたところで、洋一のケータイが古風な黒電話の着信音を奏で出した。

でると、彼女たちの一人である真子の声が聞こえてきた。

「洋ちゃんーん、今夜ヒマあ？」

「おお、あ・・・・・」

空いていると直すおつとしたとき、ちりつと母の部屋が脳裏をかすめ、ロゴもある。

「あーあああ・・・・・ あかんわ、仕事やねん」

「ちょっと！ その、あーの間と関西弁はなんなのよ」

甘つたるかつた真子の声のオクターブが下がる。

「いや、さつきテレビで観た芸人のしゃべりがうつうぢやつて

「・・・・・なんかあやしいね。洋ちゃんテレビきうじやん」

もつと声が低くなつた。

バカで能天気なキャバ嬢なのに、いつもカソはなぜすぐ働くのか、と洋一は舌打ちしたくなる。

「ほかの女人とかじやないでしようね？」

「バツカ、ちげーよ。なんでそつなるわけ？」

「だつて、今日の洋ちゃんなんかいつもとちがう。かわつた気がする」

「だから、なにそれ？」

「カン。でもなんかゼッタイかわつた！ 好きな子できたの？」

意味はまったく違うのだが、変わつたといつうところは的を得ている。洋一自身は決して認めないだろ？

「…………今から洋子さんの部屋いく。帰るまでずっと待ってるか

「…………今から洋子さんの部屋いく。帰るまでずっと待ってるか

う、とつめき声がでそうになつて、洋一はあわててケータイを遠ざけた。

顔と身体は超一流だが、頭の中がお花畠の真子は、とても嫉妬深く、一度うたがいをもつたことは全て明らかにしなければ、延々とそれを言い続けるのである。

なので、ゼヒとも今は会いたくなかった。

…………や、ヤバい！ 部屋に帰れないとなると、あの部屋にずっといなきゃいけなくなる

そうなると、もうこひら側へは一度と戻つてこれない気がして、洋一はやべりとした。

それにつまでもシンの送迎を断るわけにこかないから、マンションの存在も組にバレてしまう。まだ初秋だというのに、まるでサウナに入つてこむよつに汗がドップと吹き出てシャツを張り付かせた。

「あははは。まったくなにいつてんだよ、おまえ。ひざーつてば力なく笑いながら、洋一は考えた。

とりあえず今夜は部屋に帰つて真子の誤解をとこうか。

しかし、妙にカンだけはいいあの娘は、自分の変化の理由を察知してしまふかもしない。

そうなると破滅だ。

「わ、わかった！ ちょい仕事まで時間あつから、今から会おうが

「…………」

「なんだよ、まだうたがつてんの？ じょうがねえなあ……じゅ、じゅ、

「…………今から洋子さんの部屋いく。帰るまでずっと待ってるか

「…………今から洋子さんの部屋いく。帰るまでずっと待ってるか

「ひ

これから信じられるようにしてやるよ」「ねえ

これから……の後に続くセリフに艶をもたせて、洋一はケータイに吹き込んだ。

力技で行く気だ。

真子は野生児だけにエッチが好きだった。

「あ……じゃあいまからいつものホテルのラウンジいくね」「真子の声が一瞬で甘いものに戻った。

成功である。

洋一はニヤリと笑うとガッツポーズを決めた。

「おお、早くここよ。あと、シャワーは浴びず、な

「イヤーン、洋ちゃんのエッチ！」

エッチはてめえだろうが、と心中で突っ込んでおいてから、洋一は一言二言はなしてパチンとケータイを閉じた。

「兄貴、お車出しましょつか？」

急に耳元でシンの声がして、さすがの洋一もびっくりして、ヒックと悲鳴をあげて飛びのいた。

「申し訳ありません……おどろかせてしまって」

「し、シン……おまえ気配消しそぎだつて！」

「失礼しました。お電話の邪魔かと思つて控えておりましたので」シンはそういうて軽く頭をさげた。どことなくいつもより懇懃無礼な感じがした。

その仕草をみて洋一はハツとした。

……こいつ、電話の相手が真子つてことも、その内容もわかつてやがる！

そう気がつくと、わすがに気味が悪くなつた。

「車を回してきますから、少しあ待ちください」

くるりと優雅にターンして、足早に去つてゆくシンの背中を見つめながら洋一は、「きっとシンは忍者の末裔かなんかに違いない」そう真剣に思つのだった。

洋一のテクニックをもってしても、真子を納得させるのに3時間もかかるつてしまつた。

セックスは嫌いではなかつたが、同年代の男より数多くこなしてきてし、また様々なシチュエーションもお試し済みなので、最近ではあまり高かぶらなくなつていた。

疲れた顔でホテルを出た洋一は、シンの運転するジャガーに乗り込むと、ふうーっと息を天井へと吹きあげた。

「兄貴、どちらまで？」

ハンドルを握つて、まつすぐに背を伸ばして座つていたシンが、そつたずねてくる。

洋一は考えた。

息も絶え絶えで、ベッドに横になつたまま真子が言つたセリフがよみがえる。

「今夜、洋ちゃんとい泊まる。しばらく部屋にいるから」

彼女がそう言つたといつことば、洋一の作戦はミッションコンプとはいつていないらし。

今夜部屋に戻らなかつたら、真子は更に疑いをつのらせるだらう。

彼女一筋、と言つわけではまつたくない洋一だが、長年染み付いたクセで、女性を泣かせるのは嫌いだつた。

まあ、本人は気がついていないだけで、河原の石の数ほど泣かせきてしているのだが。

いつも悪氣の無い加害者と言つてのタチのよくな男は、さうに考

える。

・・・・・ そもそもなんで俺は、自分の部屋に帰りたくないって  
イライラしてんだ?

答えはすでにでている。

目をそらせたい事実ではあったが、母の部屋に行きたいのだ。  
もう一つ突っ込んで言えば、女装して遊びたいのだ。

そこまで考えて、恥ずかしさで顔がボワンと赤くなり、また恥骨の  
あたりもムズムズとしてきはじめた。

洋一はうつむくと、爪を噛んでそれに耐えた。

「・・・・・ 兄貴? どうかなさいましたか?」

ずっと無言でいる洋一を心配したシンが声をかけるが、耳には全然  
とどいてはいない。

行きたい。だけど行けない。

出でている一つの結論の狭間で、洋一の心は揺れにゆれている。

・・・・・ 兄貴、真子さんとにかくあったのですが・・・・・

あんなに苦しそうなお顔になってしまわれて

洋一の揺れがシンにも乗り移ったのか、兄貴の事ならなんでもわかる、そう強く思っていた心が揺らぎ始めて、彼も苦渋に満ちた顔になる。

シンはあるいは真子以上に洋一にたずねたかったが、いらぬことを  
聞いて兄貴を苦しめてはならぬと、じつと耐えて待つた。

この男は昭和以前に、しかも女性として生まれてくれれば良き妻、そ  
して良き母として立派であつただる。だが現実は、男でヤクザ見習いなのだ。

そんなシンの存在などすっかり忘れて、じりじりと洋一は考え込んでいたが、やがて理性が勝つて、毅然と顔を上げて命令した。

「シン、部屋に帰る。車を出せ」

「わかりました」

車体を沈みこませず、するりとジャガーはすべり出すと、ホテルのエントランスから車道へと走り出していった。

「兄貴、降りずにしばらくお待ちください」

洋一の住むマンションの駐車場でジャガーが止まり、外へ出ようとしたら、シンがそういった。

「なんだ、妙な野郎でもいるのか？」

ドンパチなど数年に一度あるかないかの、平和な街の暴力団だ。ヒットマンなどいるはずもなかつたが、いちおう職業柄そういうてみた。

だが本当は、少しヤクザらしいことを口にしてみたかっただけである。

シンは何もこたえず、自分の脣に人差し指を立てて洋一に黙つているようにジースチュアすると、さつとジャガーを降りて猫のように階段へと消えてしまった。

いぶかしく思いながら煙草をふかしていると、すぐに帰つて洋一にさせやいた。

「真子さんと綾乃ねえさんが部屋の前で言い争つてます。どうやら鉢合わせしてしまつたようで。いま上がられると不測の事態になるかと思いますので、いじは離れましょ」

「

この街一番の高級クラブ「セブンシーズ」のNO1ホステス綾乃の名前を聞いて、洋一がひるむ。

「あいつは物分りはいいが、浮氣は許さないやつだ。血の雨が降る……」

「どうしましょう。水音さまのところでもまいりましょうか?」大学の講師をしている水音の名前に洋一は、今度は首を横に振る。「いや、あいつは今イグアナの研究で忙しいはずだ。邪魔しちゃならねえ」

「…………たすがです、兄貴」

彼女同士を激突させておいて、たすがもなにもないはずなのに、シンはそういって洋一をほめた。

「それではビニカ部屋でもとつましょうか?」

そういって洋一の顔を見たシンが、あつとおどろいた。

「…………あ、兄貴が笑つてらつしゃる!」

洋一自身も気がついていなかつたし、またシン以外の者ではわからないくらいだつたが、微妙に彼は笑っていた。あの部屋に行く理由ができた喜びが、隠し切れないものとなつて出てしまつたのだ。

おどろきを表情に出さぬよつて苦心しながら、シンは洋一の言葉を待つた。

「おまえはビニカで帰れ」

「はつ?」

「俺を降ろして帰れ」

「兄貴…………」

逃げずに一人の誤解を解こうとしている、そう思ったシンは、やつ

ぱり兄貴は立派なお人だと感動する。

「それではどうかご無事で。何かありましたらすぐに連絡をください。事後処理用の道具を用意して事務所で待機していますから」「洋一のことになるとおかしくなるこの男は、物騒なことをさらりと言つと、きつちりゅうの礼をしてからジャガーに乗つて去つていった。

車が完全に視界から消えた後、さらに10分待つてから通りに出て確認して、洋一は足早に自分のマンションから立ち去つた。

その夜、母のマンションに来た洋一は、昨日とは別のメイド服を着て鏡の前に立っていた。

昨夜は黒。

そして今夜は黒を基調に白いコプロンが強調された、本格英國風ハウスメイドであった。

「…………母さん…………なぜあなたはこんな物を持つてたんですか？」

10年前といえば、東京は秋葉原でよしやくメイドブームが隆盛し始めた頃だらう。

なのに凛はこの地方都市に住みながら、何ゆえこんな代物を、またどうで手に入れたといふのだらう。

自分の知らなかつた母の一面に洋一は、マリワナ海溝をダイブしてのぞいたような戦慄を感じて身を震わせた。

だが、何者も恐れる必要の無いヤグザの彼を、それ以上にビビりさせていたのは、内なる自分からのメッセージであった。

「…………出でやえ…………そのままの格好でお外を散歩しちゃえつ！」

内なる者は、彼の脳内にダイレクトにそう語りかける。  
あの日から自分の中に魔性が宿つてしまつた、そう洋一は感じていた。

そいつが耳をふさごとも、目をつぶつても、ずっとそれをかけてくるのだ。

…………絶対にバレないつてつ。夜だし、コスもメイクもカン

ペキだし！

なぜか内なる魔性の声は、つい若い女性の声であった。

それはさておき。

あくまで自分基準だつたが、割とよく似合つているのもまた事実。それに、なにより外へ出たいという欲望は、檻から出された獣のように凶暴で押しとじめようが無い。

理性と言うか細い手綱が切れるのは、もはや時間の問題であった。洋一はなんとか気を静めようと、キッチンにあるバー・カウンターから無造作に酒瓶を選んでつかみ取ると、そのまま口をつけ一気に飲んだ。

そしてその瞬間に豪快に吐き出した。

洋一の口は、まるで農家のスプリンクラーによる、アルコールを霧と化して部屋中に撒き散らす。

「ゴホ、グホ、ゲホ、グハハハッ」

あらゆる擬音を並べながら、咳き込んで、床に膝をついて苦しむ。手放されて転がった酒瓶のラベルには、「スピリタス」と書いてある。

それはアルコール度数9.6。と言つウォッカであった。

もはや酒ではないと思われるそれを、吐き出したとは言え、ボトル半分は一度胃の中に納めてしまっている。

おまけに今日は、シンの淹れてくれた紅茶以外の物は何一つ口にしてはいない。

すぐに強烈な酔いが全身に回ってきた。

洋一は腰が抜けてしまい、そのまま床にへたりこんだ。

「あ・・・あはははははは」

女装の快感にアルコールの多幸感が加わって、彼はへラへラと笑い出す。

お出かけストップ作戦はこれで成功かと思われた。

-----この調子で酔いつぶれてしまえ！

メイド洋一は、あらゆる酒を棚から出してきてグラスに注ぐと、とつかえひつかえ飲み始めた。

バー・ボン、ラム、ウイスキー。焼酎に泡盛、紹興酒。凜のアル・コール・ギャラリーは、場末のバーなら軽くしのいでしまうくらいのラインナップだった。

そういうある内に、やがてアイライナーでパキッと決まっていた目がどう一ひと緩み、シャドウを塗ったまぶたが下がつてくる。

そうなると、今まで涼しげだった瞳が、なんだかエロティックなものへと変化してきたように洋一には思えてきた。

なんとこの男は、小さな手鏡を手に、己の顔を肴に酒を飲んでいるのである。

わずか一日という短い期間で、洋一は完全無欠の変態さんと化してしまっていた。

「う・・うふふふ・・・・あははは」

よかれと思つてやつたアル・コールで撃沈作戦は、別の効果を表し始めていた。

ドキドキを落ち着けはしたが、同時に理性をも眠らせてしまつたのだ。

なぜなら、笑い声がすでに女性化してきている。

「行つちやえーつ！」

心中でつぶやいたつもりが声に出ていた。  
もう完全に染まってしまっている。

「行つちやえーつ！」

内なる魔性の声も、言葉となつて口から出た。

洋一はフラフラと立ち上がると、揺れながら玄関へと歩き、豪奢な彫刻の施されたシューズボックスを開いた。

すらりと並ぶ靴の中から、茶色い編み上げブーツを取り出して足に突っ込んだ。

お約束のようにそれはピタリと彼の足に収まる。

もう縛るものなどどこにも無い。

洋一はドアを勢いよく開けると、羽ばたくような足取りで、部屋を出て行ってしまった。

午前2時の夜の街。

繁華街から少しだけ離れた通りを、ぼくぼくと行くメイドさんが一人。

左手にシェリーの瓶を持ち、楽しげにハミングしながら、満面の笑顔で歩いている。

夜もふけたとはいえ、そこは街の中心地。人っ子一人いないわけではない。

薄暗いネオンの下を、大手を振つて行進するメイドの姿は人目を惹いた。

ある者はヒューッと口笛を吹いて感嘆し、またある人はおおつと酒臭いため息をついた、

そんな人々の視線などお構いなしで、かつぽかつぽとブーツを鳴らして、紅椿一家の二代目・メイド洋一が行く。

「うふふ、楽しいわあ、愉快だわあ、幸せだわあ」

まったく客觀性のない感想を口にしながら、にこにこと笑い続けて

いる。

そつやつて裏通りを歩くうち、ふと脇を見ると、震えながら店の残りの酒を探している、老いたホームレスの姿が目に映った。

「おじいさん、これを差し上げましょつ」  
笑顔で洋一は手に持つていたショリーを押し付けると、おじいく老人を後にしてまた歩き出す。

すると今度は、小さな居酒屋の店先で、数人の若者が一人のおじさんをボコっている光景が見えた。

「ダメですよー、そんなに大勢で蹴つたりしちゃ。加減しなさい、かげん」

「あア？ なんだよねえちゃん。ヤつちまうぞコラフー」

凄む男の顔面に綺麗な前蹴りが入り、何かが碎けるイヤな音がした。

「うわあ！ なにこいつ！ ？」「ああ・・・見えた、黒いの・・・

残つていた二人にも、それぞれ回し蹴りと裏拳がご馳走された。

「う、早い！ ・・・」「おおつ！ 今度はヒラヒラが・・・

その言葉を最後に、二人は崩れ落ちた。

ボコられて丸まつていた会社員Aさん（45歳・課長）は、笑顔で三人を秒殺してしまったメイドさんを畳然とした顔で見ていたが、彼女がくるりとこちらを向いたので、本能のままに逃走した。

「メリメリつていつたねー、あの子の顔・・・うふふ

恐い事を可愛くいつてからまた歩き出す。

今度は妖しいネオンが点るバーの前に、原型がわからなくなるくらいまで化粧をした少女たちがいた。

職業上のクセで、じーっと目を見ながら通り過ぎようとした洋一の背中に、剣呑な声が降りかかった。

「ちょい待てよおまえ！ なにジロジロ見てんだよ」

振り返つて蹴りの軸足を決めたところで、彼の足が止まった。

「セフヒミーストな性格がよみがえって、女性に蹴りを入れる」とを阻止したらしい。

少し考えてから、ひょいと服の両袖をつまんだ。

一瞬の内に、闇にキラリと光る細長い刃物が一本あらわれた。それを見てひるむ少女たちの前で、小さく洋一の左手が動いた。並んで立つ少女たちの間を縫つて、真後ろにあつたバーのサインホールに刃物が突き立つ。

「こ、こいつなんかヤバい！」

笑顔で超絶テクを見せたメイドに恐れをなし、彼女たちはワーッと逃げ出した。

可愛く手を振つてそれを見送つてから、サインポールに刺さつた刃物を抜いて袖の中にしまつと、洋一はまた歩き出した。

「フンフンフーン あははは」

楽しくつて笑いが止まらない。こんな気分を味わうのは初めてのことだ。

危険なメイドの洋一は、そう思しながら手を振つてトコトコと歩いてゆく。

その後姿を、路地裏を横切つていた黒い猫が、不思議そうな目で見ていた。

いつの間にか裏通りを出て、車の走る国道脇の歩道を洋一は歩いていた。

走る車のライトで照らされて、さつきよりその姿がよく見える。

ひたすら破滅への道を行く彼の頭の中には、今の自分に対する違和

感や見られる」とへの恐怖は微塵も無い。

そうやって歩いている内に、後ろの方からハデなバイクや車に乗つた、地方にしか生息しない人たちが現れた。

ゆっくりと蛇行しながら走る彼らの内の一人が、洋一の姿を田に捉えた。

「あ、メイドがいるー」「うひょーーー！ロードバイクのやねりつー」「おねーさーん！俺らと遊んでー」

欲望丸出しのセリフに、洋一が笑顔で手を振つて答える。

その仕草が、彼らの中に暗いものを沸き起させた。

キーッとブレー キ音を響かせてバイクと車が止まり、全員が洋一の方へと輪を作つてやつてくる。

「メイドさーん、ダメだよ、こんな夜中にそんなかつこいつで歩いてちやー

「やうそ、へんな」とわれちまつよー

おまえらが今からやるんだらうが、と突つ込みたくななくらい分かりやすいセリフだ。

なのに、なんのことだかわからないといつ顔でしばらく洋一は考えていたが、やがて大きくなづくと、サッと男たちの間を駆け抜けた。

「あ、逃がすな！」

振り返つて追いかけようとした男たちの前で洋一は立ち止まると、道に止めてあつたバイクや車のキーを片つ端から抜いて、「えいつ！」と叫んでビルの谷間へと放り投げた。

男たちは、えつ？という顔をしていたが、やがてそれぞれキレた顔つきになつて飛びかかってきた。

右手で一発、左手で連續一発で三人を沈めると、ぐるりと身をひるがえして洋一は逃げだす。

長年の経験で、多勢を相手にするやり方を、忠実に身体は実行していた。

- - - - 残りは6人ねつ

だが心中のセリフは女性のままだ。

初めて履いたヒールの高いブーツにもかかわらず、洋一の足は軽く男たちを引き離す。

ちらつと振り返つて、少し彼らがバラけてきたのを確認すると、すればやくターンして、先頭の男のみぞおちに手のひらを叩き込んだ。次の男は木刀を持っていた。

上から襲つてきたそれをステップでかわし、ブーツで踏んづけてから膝蹴りを頸にお見舞いする。

木刀があればもう無敵だった。

「あつはははは！」

甲高い声で笑いながら洋一が、うつと手を動かすたびに、男たちは一人づつ倒れてゆき、誰も自分に近づけない。

恥骨の奥の痺れに熱い何かが加わり、そこから背筋へと駆け上がりてくる、電流のような気持よさに脳が痺痺した。

アドレナリンと女性ホルモンが全身を駆けめぐり、不思議なエクスタシーをもたらして洋一を震えさせた。

歩道には、いつの間にか何人もの野次馬が集まり、口々に何かを言い交わしながら自分を見ている。

ドックン。

大きな音をたてて何かが流れ込んでくるのを感じた。

それは、眩暈がしそうなほどの快感の液体。

- - - - あ・・ なんかきそつ、これ・・・・・

その時、辺りに無粋な男の声が響いた。

「コラーッ！ うちの事務所の前でなにをわいどんじや！」  
叫び声がした後ろのビルの中から、数人の男が駆け下りてくるのが  
見えた。

「あつ、シン！」

その中の一人を見て、洋一は正気に戻った。  
逃げ回っている内に、どうやら自分の組の前で暴れていたらしい。  
木刀を投げ捨てるど、洋一はダーッと走つて野次馬の中に突っ込んだ。

「すっげえ！ メイドさん、カッコイイ！」「おねえちゃんやるなあ」「顔見せて！」

見物人の中をうつむいて駆ける彼の背中に、そんな様々な声が降りかかる。

「すっかり戻つて深く後悔したが、すでに遅い。男にすっかり

スカートをひるがえして夜の街を駆け去る洋一は知らなかつたが、  
今夜、彼は伝説の扉を開けてしまつていたのだつた。

どこかで電話が鳴つてゐる。

…………うるせー、誰か出ろよ早くー！

眠りの中を浮上しながら、洋一はそう思つてつなるが、電話の音は止まらない。

…………誰もいないのか？ 真子、綾乃、水音、出でくれ。 .  
…………シン。おいシン、出ろー！ .

そこで飛び起きた。身体中が痛い。

どうやら床の上で寝てしまつたらしかつた。

座り込んでぼんやりと首を回した先に鏡があつて、その中をのぞいた時、洋一はカツと目を見開いた。

長い黒髪に薔薇色のリップ。

昨日の記憶が音をたてて流れ込んでくる。

起き抜けだつたが、頭はすばやく事態を把握していた。

ケータイを探し出すと、ボタンを押して耳に当てる。

「兄貴、おはようございます。今どちらですか？」

爽やかなシンの声が鼓膜に流れ込み、昨夜の彼とのニアミスがまざまざとよみがえつてきて、洋一は顔を真つ赤にした。

「…………兄貴？ 具合でも悪いんですか？ すぐに迎えに行きますから、今いる場所を…………」

「大丈夫だ、くるなー！」

思わずそう叫んでしまつてから、うつと言葉に詰まる。

いらぬことを口走つてしまつたと、死ぬほど後悔したがもう遅い。はたしてシンは、己の兄貴の異変を的確に察知して、声をひそめて聞いてくる。

「…………わかりました。大丈夫です、誰にも言こませんから。で、新しい彼女のところですか？」

「ま、まあ そんなとこだ」

「では秘密にしておきますので場所を……」

「それはダメだ！」

「えつ？」

「あ、いや…………この人はカタギの娘さんでな、ヤクザの俺が迷惑をかけるわけにはいかねえんだ」

「…………兄貴。真子さんや綾乃姉さんも一応カタギですよ。水音さんなんか大学の先生ですし」

「バカヤロウ！事情があるんだよ、事情が」

「ですが、二代目の居場所も知らないでは、組に顔向けできません」

「そう言われてもこっちも困る。」

墓穴掘りまくりだったが、なんとか誤魔化そつと洋一は必死になつた。

だが、シンの執事的とも言えるカンの方が早かつた。

「兄貴…………彼女とかではなくて、何か妙なことになつてるんじやないですか？」

彼が重要な事をたずねてくる時の、控えてはいるがうむを言わせない強い口調である。

「え、妙なことって？」

「病気とか」

おしい。半分くらい当たつている。だがその言葉に洋一は蒼ざめた。なんと鋭い男なんだと舌を巻くが、ここは認めるわけには行かない。

「いや、元気元気。ちょっと二日酔いだけど

「何か心配事でもあるんじゃないですか？」

「ないつてそれ。ほら、仕事も順調でトラブルとかもないし」

「そうじゃなくって。プライベートとかで」

「充実してるよ。それ、なんていうの、リア充ってやつ? あれだし」

「それにしては声が微妙に震えておられますか?」

「おまえは刑事か、と叫びたいくらいのカンと追及だつたが、じつと洋一は耐えた。

シンには使いたくなかったが……しかたがねえ、  
一代田パワーで行くしかない

ドスの効いた声で言った。

「おう、シン。てめえ一代田の言ひ方いうたがつてんのか? 四の五のいわすに言ひこと聞けや!」

「……申し訳ありません」

「今から事務所に行く。おまえはそこで待つて」

わかりました、と悲しそうな声でこたえたシンに胸がチクリと痛んだが、こればっかりはしかたがない。

洋一はケータイを切ると、バスルームに飛び込んでメイクを落としてシャワーを浴び、出かける支度をしてマンションを後にした。

すっかり落ちてしまった太陽に背を照らされながら、洋一が事務所に入つていったのは午後5時だった。  
シンと顔を合わせるのは気まずかつたが、そこは彼も付き人。  
しかも超一流なので、表面上はいつもと変わらずに洋一に対して接してくれる。

今の肩書きである組長代行として、一、二、三の案件の報告を受けて指示を出し終えると、もう洋一の仕事はなくなってしまった。責任はあるが、はつきり言つてメチャクチャ樂勝のお仕事内容である。

まあこのポジションに上がるまでが大変なのが、親の七光りでスポンとなんの苦労も無くそこに収まった洋一は、そのありがたみにまったく気づいていない。

普通はそこからでも所属している広域組織での上を目指すので、何かと政治的な気苦労が絶えないのだが、上昇志向皆無でまたその必要性も理解していないから、今のところ遊んでいるようなものであった。

しかし彼はその生活に満足していなかつた。

前も、そしてあの時まで、ずっと。

だが女装子とぶつかってしまった、あの夜からちがいはじめた。

本皮のデスクシアに深く身を沈め、あいに手をあてて、アンニコイな表情で洋一は考え出した。

-----まさかあんな世界があつたとは、まったく知らなかつたぜ

男である時とはまったく違う、見られることでの快感。

女性の物を身に付けることでの開放感。

そして、女装した自分と暴力との不思議な一致感。

今までは置かれた状況の為にしかたなく、どちらかと言えば嫌々暴力をふるつていたのだが、昨夜は違つた。

躊躇い無く放つた前蹴りで碎いた鼻骨の感触を思い出し、洋一はうつとりとした。

また恥骨の奥がピクリピクリと震え始め、その快感によだれが出そうになつて、はつと口を閉じる。

変態を音速で通り越して、異常者として覚醒してしまったのだろうか、この男は。

その一方で洋一のクレバーな部分が、自分を冷静に分析する。

-----でも、ついに女装で外に出てしまった。てことは、次は誰かとその姿で会いたくなるんじゃ・・・・・・

恐怖が身体を突きぬけ、うわっと叫び声になつて口を手で押える。心臓が16ペースで踊り始めた。

そう、この欲望はエスカレートしてゆく定めなのだ。

一般人なら茨の道くらいだらうが、極道稼業の洋一にとって、それは破滅への階段である。

しかもその段数は、絞首台へと上がる13階段より短いと思われた。じんわりと嫌な汗が脇の下を伝づ。

しかしその一方で、ビビればビビるほど、女装に対する欲望と快感を求める声が高まってくる。

内なる魔性がふわりとささやきかけた。

-----仕事もう終わったんでしょう？ 行こうよこれから。ほら、すぐに。まだ暗くなつてないからドッキドキもんだよー！ 洋一の表情が、上半分がヤクザフェイス、下半分が笑顔という、複雑怪奇なものへと変化した。

-----はああああ、もあたまんないっ！  
がっくりと首を垂れた。

やはり普通ではなくなつていたのだろう。

自分をじつと見つめている視線に、洋一はまったく気がついていない。

二代目の影としてひつそりと壁の花と化しながら、シンはずつといふ兄貴のことを観察していた。

----- 兄貴には絶対に何か困っていることがある！

忠実な付き人は今、そう確信した。

シンの心の中にある、エキセントリックスイッチがパチンと入る。今の洋一と同等、いや、それ以上に危険かもしれない男が、ついに起動してしまったのだった。

その日、玲は通つてゐる女子高で奇妙な噂を耳にした。

放課後、帰り支度をして、自分が記事を書いているタウン誌のネタ集めに街へとでようと考えていたら、まだ居残つておしゃべりしていたクラスメイトの話が聞こえてきた。

また彼氏とかの話だらうとは思つたが、新聞部平部員……玲の記者本能がつが実は部長を影であやつる真の支配者……玲の記者本能がつい発動して、聞き耳をたてた。

「あたし昨夜、すんごいの見ちゃつたあ」

「なによ、またしようもないことでしょ？」

「ちがうつてば。あのね、戦闘メイド見たの、あたし

「はあ？ それってアニメかなんかの話？」

「だーかーら、ちがうつて！ リアルのお話。あたしメイコたちと夜中までカラオケいつて、そんで2時くらいだつたかなあ、アーケードの裏を通つて帰つてたわけ。そしたら西商業のヤン姉たちがいてさ。うわヤバって思つてたら、先に絡まれてる人がいて。それがメイドさんだつたんだけどね。まきこまれんのイヤだつたから、あたしかくれて観てたの。そしてらなにやつたのかわかんないんだけど、西商のヤツらワーッて逃げ出していなくなつちゃつたの」

「それって、メイドさんがなんかやつたわけ？」

「うーん、そこまではわかんない。でね、あたしなんかおもしろそうつて思つて、そのメイドさんの後をつけたの。そしたらその子が国道に出たところで、ハルオさんとのチームが走つてきて

「うわっ、あのタチ悪い人！」

「そそつ。たぶんあれはあの子さうつてなんかする氣だつたんじやないかなあ。みんなバイク止めておりてきて、メイドさんかこまれちゃつたの」

聞かせている子は、鼻息も荒く顔を近づけて、話の続きをせがんだ。

「そしたらメイドさんが暴れだして大乱闘！めぢやくぢや 強いんだつて、それが。たぶん空手か拳法だねあれば。で、ハルオさんたち秒殺！」

「なにそれ、ほんとに女の子なの？」

「うん。女装子であれだけきれいな子はいないとおもうから、女の子だと思つ。で、全員やつつけちゃつて、そのうちヤツちゃんまで出てきて大騒ぎよ」

「え、ヤクザも返り討ち？」

「ううん、さすがにそれはないよ。ヤツちゃん出でたとこでメイドさん逃げちゃつておしまい」

「ふーん・・・まあ作り話にしては面白かったわ。漫画に描いたらまた見せて」

話を聞いていた子は、ニヤニヤと笑つて立上がりると、教室の出口の方へと歩き出した。

「なによー、それ！ちがうつて、マジ話なんだつてばー！」

しゃべっていた子も、怒りながらそれについてゆく。

肩越しに顔をむけて一人を見送つて、玲は考えた。

「ほんとかな？ たしかあの子、漫画描いてるつていつてたからネタなのかも。でもダメ元で今夜さぐつてみるかなつ机の上に置いていたスポーツバッグを拾い上げると、玲は軽い足取りで教室を後にした。

午後10時。

自宅を出た玲は、タウン誌のスポンサーになつてゐる店や、顔見知りの店へ挨拶がてら入つていつては、ネタになりそつなものを作色した。

高校に入つてすぐ、遊んでいたところでタウン誌の記者と知り合つて、雑誌作りの真似事をするよになつた。

そして高校三年の今、玲はすでにタウン誌の有力助つ入ライターとして、編集長の覚えも高かつた。この仕事を手伝いだして知り合つた人たちも、活潑で妙に人懐っこいこの娘のことを、子ども扱いせずにかまつてやり、たさいな街の情報でも教えたりした。

行動的乙女である玲の夜は短い。肩までの明るい茶色の髪を夜風に流しながら、玲はきびきびと足取りでその健康的な身体を運んでゆく。

あちこちに顔を出す内に、あつといふ間に日付が変わつて、玲は少しあわてた。

-----やばっ！ そろそろアーケードの方にいかなきや

広告を出してくれると約束してくれた居酒屋の大将にお礼を言つと、玲は急いで表に出た。

アーケードへと早足で歩きながら、さつきスポーツバーのマスターに聞いた話を思い出していた。

そこマスターが、野次馬としてメイドさんを日撃したと言つたのだ。

「いやあ、凄かつたよ玲ちゃん、あれ。華奢な子でね。外人かハーフかと思つたくらい綺麗な顔してんのに、木刀持つて男をメッタメタにしちやつてさあ。あれつて絶対に剣道の有段者だよ。どこのイ

メプレの店に勤めてるのかなあ。行つてみたいなあ、俺  
思い出す内に、玲の瞳が段々と光を帯びてきた。  
- - - - 空手に拳法。おまけに剣道ねえ・・・・・ おもしろ  
いじゃ ないつ !

この平和な地方都市では、10年に一度あるかないかというネタだ。  
話がもし本当なら、今それをタウン誌で取り上げれば、何か新しい  
波を起こせるかもしれない。

自分が、すごく大きなものの鍵を握っているような気分になつて、  
玲は背中がゾクゾクとしてくるのを感じた。

肩から下げるバッグの中に、デジカメとボイスレコーダーが入つて  
いるのを確認してから、玲は足に力を込めて急いで歩き始めた。

午前1時。

人気の絶えた地下街に、コツコツとピンヒールの音が響き渡る。

ホームレスの辰さんは、その夜めぼしい得物にありつけず、空腹を抱えてダンボールハウスの中で寝ていた。

「あ、せめて酒が見つかってりや、ちつとは飢えもしのげるつていうのによオ・・・・・・」

茶色から黒へと変色しかかっている毛布を巻きつけて、辰さんがブルッと身を震わせたその時、前を通り過ぎよつとしていた足音が止まつた。

すわつホームレス狩りの若者かと身構えると、ガバッと入り口のダンボールが剥ぎ取られ、何かがそこから投げ入れられた。

「うわあ！」と声をあげて頭を抱える辰さんの身体に、何やら軽い物がポコポコと当たつて下に落ちる。

次に、ガチャンとガラスの触れ合づ音をたてて、大きなビニール袋が床に置かれた。

「寒くなつてきましたね。皆さんでこれ分けて召し上がってください。少しさは温まると思います。どうか気を落とさず。きっと楽しいことがありますよ・・・・・・」

地下街の照明が邪魔して姿は判らないが、そんな女性の声がした。

まだ固まつている辰さんの耳に、またピンヒールが道を叩く音が聞こえ始め、遠ざかってゆく。

そつと目を開けて、自分の身体に当たつた物を手にとつてみると、

それはあたりめの袋。

暗闇で見えなかつたが周りには、乾物屋かと言いたいくらい、乾き糸おつまみの袋が散乱しており、入り口には酒瓶が詰まつた袋があつたのだ。

なんだかわけがわからなかつたが、危険は無いと語った辰さんが、おつかなびっくりダンボールハウスから顔を出して外をのぞく。

煌々とした光に照らされながら、背筋を伸ばして去つて行く、派手な後姿が見えた。

真紅のシルク生地に、鮮やかな刺繡で大きな龍が描かれた、全身をタイトに包むチャイナドレス。

左手には、ロンリコ・ラムの瓶が握られている。

そう、言わずと知れた、洋一の姿であった。

やっぱり女装して街へと出てきてしまったのだ。

彼は始め、己の足を殴つてあの部屋に行へのを止めようとした。だが、ただ痛かつただけで、足は普通に母のマンショングアをくぐつていた。

今度は、手を押えて女装を止めようとした。

しかし、気が抜けて鼻をほじつた瞬間に、女装が始まつてしまつた。せめて部屋の中で我慢しようと試みたが、鏡に映る自分の姿に満足して、ついつかり傍にあつた酒を飲んでしまつて、全ては終わつた。

----- そうだ！ホームレスのおじさんたちにプレゼントを持つていいてあげよつ！

そんなムチャムチャな理由をつけて、洋一はそのままの姿で外へと飛び出したのだった。

差し入れが、あたりめや酒だったのと、かけらほど残っていた男と

しての本能がチョイスさせたものかもしれない。

アルコールで解放された魔性によつて、洋一は地下道を通り、地上へと続く階段を登り始めた。

その足取りに、ためらいや戸惑いは微塵も無い。

女装お散歩を開始してまだ二夜目だといつのに、ピンヒールを危うげなく履きこなし、声まで女性化していくこの男はいったいなんなのだ。

正体不明の曲をハミングしながら大手を振つて - - - - 今夜はスリットの深いチャイナなので足取りは静々とだつたが - - - 中華乙女・洋一は地上へと舞い降りた。

白檀の扇子を取り出し、パタパタと顔をあおぐ。

どこへ行こうかと考えているようだ。

正面はアーケードの西の入り口。

左は飲み屋街へと続く道で、右は繁華街を取り巻いている国道だ。やがて行く道が決まつたのか、優雅に扇子を仕舞つと、洋一は右に足を向けた。

艶めかしく揺れる腰と、スリットから見え隠れする白い足が、暗闇の中へと消えていった。

玲はアーケード北口にいた。

ダンスの練習や弾き語りでうたう人々が両脇に並ぶ中を、彼女は左右に目を配りながら歩いてゆく。

キヤツチの黒服をかわし、横に並んで道をふさぐ酔っ払いの大学生を睨み倒しながら、玲はどんどん南へと進んでいった。

やがて信号が現れて、一番人通りに多いアーケードが終わった。

信号待ちをしながら考える。

やつぱ人の少ないアーケード方かな？それともこの周りの裏通りかな？

考えている内にパッとシグナルが青に変わった。

くるつとり。ターンすると、玲は右へと足を向ける。

繁華街を取り囲む国道と平行して通っているアーケードの方ではなく、さきほど歩いてきた周辺をまた探るつもりのようだ。

タクシーが縦列駐車するのを脇に眺めながら、玲は肩にかけたバッグを揺すりあげると足を早めた。

洋一は国道脇の歩道を悠々と進んでいた。

この国道は、さきほど玲が渡らなかつた交差点から、彼が初めて出てきた地下道へと続いて通るアーケードと平行してはしつていて。昨夜、洋一が暴れた国道とつながつていて、今はちょうど真逆の位置を彼は歩いていた。

この辺りはデパートなどの大型店が立ち並ぶ区画で、深夜の人通りは少ない。

それでも彼の姿は人目を惹き、醉客から好奇の視線がそそがれた。

自分を見つめる者に、嫣然とした微笑で洋一はこたえている。

その笑顔を見て、ある男は鼻を伸ばし、ある若者は実らぬ恋に落ち、あるおとうさんは、恍惚のあまり家族土産の寿司の折り詰めを道におっこじしてばら撒いた。

それを見て、洋一の快感ボルテージはどんどんと上がつてゆく。

- - - - - きつもちいしい - - - - -

まさか自分を探している不図き者がいるとは夢にも思わない彼は、こみ上げてくる心地よさを隠しきれずに、甘い吐息をつきながらゆっくりと歩いてゆく。

だから、普段の洋一ならすぐに感づいていたはずの視線を察知しそこなつっていた。

ちょうど彼の100メートル後方。

奇しくも洋一の組が経営する高利回り金融の看板の陰から、熱い視線でこちらをうかがつている男がいた。

「まさか兄貴がこんなことになつていたとは・・・・・・」  
頬を赤らめながら洋一の背中を見ていたのは、口調が示すとおり、忠実な付き人、冴島 心であつた。

シンの尾行は、洋一が事務所を出たところからもう始まつていた。彼の追跡がまつたくバレていなければ、洋一の脳容量の99%を女装が占めている証である。

シンは始め、知らないマンションへと入つてゆく洋一を見て、やはり新しい彼女のところだったかと思ったが、やがて出てきた兄貴の姿を見て、何事にも動じない彼が持つていたカフュラテのカップをボトリと取り落とした。

ちなみにシンは酒も好きだったが、甘い物はもっと好きだった。ドクドクと流れ出す甘つたるい香りに囲まれながら、シンは己の目

を疑い、何度も何度もこすつて確認した。そのために田が真っ赤になつた。

----- 間違いない、兄貴だ・・・・ 姿形が変わつても、俺が兄貴を見まちがつはずがない

そう確認すると共に、あまりに恐ろしい現実に、シンは身体が震えてくるのを感じた。

だが、全てはちゃんと見廻けてからと考え直し、ヒタヒタと洋一の後をつけってきたのだつた。

そうやつてついてゆく内に、シンは自分の身体の異常を感じてふと考えた。

----- おや、まだ身体が震えている。もう落ち着いているはずなのになぜ？

そういえば心臓もまだドキドキしていた。頬もなんだか熱い。

しばらく変調を不審に思つていたが、今は兄貴のことと、また意識を前に向けたとき、洋一の行く手を数人の影がふさいだのが目に入つた。

「いた！こいつよハルちゃん、あたしらおどしたの」

ある国の原住民をおもわせるマイクをした、やたらと薄着の女の子が洋一を指差して叫んだ。

「牛島さん、こいつス！俺ら襲つてきた女は」

ハルちゃんと呼ばれた男が、かたわらに立つ大柄な男にそつわわやいた。

街灯の明かりからはずれていて、その男の姿はよく見えない。

脅してきたのは彼女の方だし、襲ってきたのは「」いつだったが、あの夜のことは快感とシンの顔以外よく覚えていない洋一は、小首をかしげて考え込んだ。

が、やっぱり思い出せないので、ロンリコをぐいっと一口飲む。そんな彼の後方では、危険を察知したシンがいつでも飛び出せるよう身構えている。

牛島という男が、のそりと暗がりから姿を現した。

身長168cmの洋一より頭一つ、いや一つ半は高い。

短く刈った髪をツンツンに立たせて、四角くえらの張った顔にはいかつい髪がたくわえてあった。

「」つい身体と相まつて、見るからに腕力に自信あり、といった風だ。

どうやら昨日、洋一がやってしまったチームのボスキャラらしい。凄むわけではないが、やる気満々という空氣を漂わせて牛島は洋一をにらんだ。

だが彼は、薄笑いを頬に浮かべながら、扇子を使って涼しげな顔をしている。

辺りを不穏な気が取り囲み、暴力の予感がひしひしと高まってきた時、とつぜん牛島の殺気が消えた。

よく見ると、目は厳しままだが大きく見開かれていて、口が〇の字を作っている。

おどろいている表情だった。

そのうち、「」つい身体がブルブルと震え始めた。

手下のハルちゃんとその彼女も牛島の異変に気づき、「なんでもやってしまわないの？」といつ非難の目をむける。

むふーんと荒く鼻息を噴いて、牛島が口を開いた。

声は渋いバリトンであった。

「か、かわいい」

「えつ？」

ハルちゃんと原住民女子が、同時に疑問の声をあげる。

「つ、つきあつてください、ぼくと」

「マジ?」

また一人が同時に声をあげた。

彼らの思惑と180°。違う展開についてゆけなことうだ。

「ひとめ惚れなんです、お願ひしますー」

もう一人は何も言わない。だがこのセリフには上機嫌でいた洋一もシリフに戻った。

野獣のような男にいきなりカミングアウトされても-----たとえイケメンだったとしても同じだらうが-----気持ち悪いだけでコメントしようがない。

牛島が一步前に出る。さすがの洋一には半歩トがらずをえない。

「ど、ドライブにきませんか?」

「・・・・・・イヤ」

「じゃ、飲みにでも」

「・・・・・・ムリ」

「それではちよこつとだけお茶でも」

「・・・・・・てかウザい」

洋一の精神攻撃にも屈せず、牛島は前へ前へとつめてくる。

殴り飛ばすわけにもゆかずに下がる洋一。

だがその均衡も、牛島の熱愛がついに臨界に達して俄に破れた。彼は猛然と洋一に飛び掛った。

牛島はその時見た。

チヤイガナレスのスリットが壊れ、細く美しい脚線を描く足が高々と上へとあがられるのと、その足の奥にある物を。

牛島の顔に喜びがよぎった刹那、彼の右頬にビンヒールがめり込んだ。

直綫から鋭く真横に飛び必殺の回し蹴りだ  
あわれ牛島くんもアスファルトに接吻かと思

彼はやはり体格通りの猛者であった。

٦١

牛島の手が、まるで愛おしいものに触れるようにそっと足首を捕ら

その感触に、ヒツと洋一が悲鳴をあげる。

なんだかよくわからないが兄貴のピンチと、シンが歩道へと駆け出

掴まれた足を支点にして躍り上がると、空いていた片足から牛島の

「変形真空飛び膝蹴り！」

おもわず技の名を口にして立ち止まるシン。  
モロに決まつた膝に牛島が鼻血を噴出すると、その隙に掴まれた足を  
はずして洋一は駆け出す。

「牛島さん大丈夫っスか！」

そう言って近寄ってきたハルちゃんをなぜか裏拳で殴り飛ばして、  
牛島は叫んだ。

「逃がさん！ おまえは俺の女だあ！」

その言葉にかつとなつたシンが、牛島に走り寄ると思いつきり拳を  
顎にたたきつけた。

これにはたまらず、牛島は仰向けに倒れたが、そいつにはもうかま  
わず、シンはマイ兄貴の後を追つて走る。  
だがすでに洋一の姿は消えており、シンはあせつて闇雲に路地裏へ  
と踏み込んでいった。

ポツンとそこに残された原住民風女子は、ぶつ倒れている彼氏と牛  
島を見下ろしながら、何が起つたのか理解できずに呆然とするの  
だった。

洋一は闇雲に夜の街中を駆けた。

その左手には、あれだけの事態の後なのに、まだロンリコ・ラムの酒瓶が握られている。

どれほど走つただろう。

もう追つてはこれないだろうと立ち止まるが、荒い息を整えつつ、れいきの出来事をファイードバックした。

「うはあ、久々に男に迫られてビビッたあ！ でも会つて10秒で好きではないよねえ、歌の文句やマンガじゃないんだじ

幼少期から青年期までに自分に言ひ寄つてきた男どもと牛島がオーバーラップして、洋一はうづうと顔をしかめた。

それ以上おもいだすのは辞めこして、ロンリコを「じへじへ」と飲み干す。

煙草が吸いたくなつてきた。

だが全て部屋に置いてきてしまつていたし、さすがにロンビニへ買ひに行くのは、わずかに残つてゐる理性が止めてと言つてゐる。

「明日からはバッグ持つて出よつと」

この男、もうためらひ無く女装お出かけを口課にしようとしている。人生のがけつぶちに爪先立ちしてゐることを、洋一はすつかり忘れてしまつていた。

しかたがない。煙草もないし、今夜はもう帰るかと彼は歩き出した。すぐにタクシーがたくさん並んでゐる、アーケード同士をつなぐ交差点へと出た。

この道をまつすぐ西へ行けば、左手にさつと出てきた地下街の入り

口がある。

洋一は空になつた酒瓶を信号脇にあるコンビニのダストポットに投げ込むと、カツカツとヒールを鳴らして西へとまた歩き出した。

その時・・・・・

「みつけたあ！」

野太い声に振り返ると、顔面を血に染めた牛島くんが、ハアハア肩で息をしながらこちらを指差しているのが見えた。

恋する男のアンテナは、捕捉不可能と思われた追跡をやり遂げさせてしまつたらしい。

絶句する洋一に、牛島はゆっくりと近づいてくる。

道行く車のライトに照らされて、怪しい光を帯びた彼の瞳が見て取れた。

口を横にイーッと広げて洋一は固まつていたが、牛島が間合いに入つたのを見てさつと車道に飛び出ると、走る車の間を抜けて通りを渡り、北の方角へと逃走を開始する。

「絶対に逃がさん！」

牛島も巨体を車道へと躍らせて追跡してきた。

突然飛び出してきた大男に、走っていた車が急ブレーキを踏む音が辺りに響き渡る。

洋一にはとにかく駆けた。

いつもの彼なら、相手が何者であろうと降りかかってきた火の粉はためらわずに実力行使で払いのけるのだが、なぜか女性化している時は、敵意を持つ者以外への暴力には抑止力がかかるらしい。ホームレスへの差し入れと合わさつて、これは女装状態での一現象と言えるだろう。

追跡を確認しようと洋一が一瞬うしろを振り向いた時、横合いから

ひょこつと女の子が出てきて、モロに一人がぶつかる。

ヒールを軸に洋一はかかしのように回って吹っ飛び、女の子はどうしんと尻餅をついた。

「痛つ！」

「ごめんなさい！」

シネマの早回しのように素早く洋一は立ち上がり、女の子の出てきた方へと身をひるがえして走り去る。こつちもなにか言おうとしたが、相手がいなくなってしまったので、女の子がデニムのスカートのすそを払いながら立ち上がった時、大男が目の前にあらわれ、ビクッとすくみあがつた。

男はフンゴフンゴと息を吐きながら叫ぶ。

「どつちいった？ チヤイナの人どつちいった？」

「あ、あつち・・・・・・」

その迫力に負けて、つい女の子が去つていった方向を指差すと、スチームのような鼻息を吐いて、大男はそつちにむかって駆け出した。数秒、女の子は唖然としていたが、すぐに目が輝きを帯びたかともうつと、大男の後を追つて走り出した。

・・・・・ いつもメイドとは限らない。さつきのが噂の人だ！

記者のカンがそう告げている。

カモシカのようにしなやかな動きで大男に追いつこうとしている女の子。

もうおわかりの通り、女子高生ライターの玲であった。

薄暗い路地裏。

アスファルトの上に、規則正しく鳴り渡るピンヒールの音。それにつづく荒い男の息と、軽いスニーカーの足音。頭上で輝く様々な原色の見本市のようなネオンサインが、走る真紅のチャイナドレスをストロボで映し出す。

次に熊、そして少女。もとい、洋一、牛島、玲だ。三人の姿は、まるでスクラップステイックな映画のシーンのようだ。

チャイナドレスの背中に牛島が叫ぶ。

「お、お名前を！」「イヤッ！」「じゃ、住んでるとこを」「もつ」とイヤッ！

コメディを演じながら駆ける一人の後ろでは、真剣な表情をしてバツグに手を差し入れる玲の姿がある。

「あつ」

突然、洋一の姿が闇に沈んだかとおもつと、アスファルトの上を転がつた。

彼の俊足に耐え切れず、ヒールが折れてバランスを崩したのだ。肩を押えて立ち上がった洋一の目の前に、両手を上げて牛島が立ちふさがる。

「さあ行きましょう・・・・・今すぐ・・・・・・・・・

あらぬ妄想を鼻から噴出しながら、牛島は歩み寄つてくる。

その姿に、洋一の防御センサーが彼を敵と認識した。ふたたび高まるバイオレンスの予感。

だが、その緊迫を打ち破る声が牛島の背後でした。

「そここの男じいてー、影になつてて『らうないー』

「えつ」

玲の叫びに牛島がおもわず振り返った時、洋一の身体が路面ストレス  
しまで沈んだかとおもふと、弾のように前へと突進した。

玲の目には洋一の姿が消えたように見えた。  
だが洋一は、瞬時に牛島の懷に飛び込むと、みぞおちに強烈な掌底  
突きを放つたのだ。

拳での打撃と違つて、掌はインパクトを広く深く内臓へと波及する。  
牛島の目がくるりと裏返ると、ズーンと音をたてて沈み、洋一の姿  
が玲の前にあらわになつた。

----- チヤンスッ！

構えていたデジカメのシャッターが切られ、フラッシュが辺りを白  
く染める。

しかし、カメラが捉えたのは、真紅の背中だけだった。

シャッターより早く、鮮やかターンで身をひるがえして駆け出す、  
チヤイナの女。

玲は1チャンス1ヒットに失敗して、強く唇をかみ締めてその姿を  
見送る。

そんな彼女の背後10メートルの位置で、壁に身を隠して一部始終  
を見ていたシンがつぶやく。

「玲・・・・なんでおまえが・・・・・・」

湿りを感じる路地裏で、残された三人はそれぞれの姿で、影となつ  
て動きを止めたのだった。



牛島騒動からじばりくたつたある日。

いつも通りに事務所にやつてきた洋一は、デスクに陣取つてゆつたりとシンの淹れてくれた紅茶を楽しんでいた。

あの騒動の翌日、持病の痔が急に悪化した父・義隆の代参として神戸に行つていた洋一は、ひさしひりに女装ができるとワクワクしている。

ひさしひりといつてもわずか一週間なのだが。

----- 今夜はなに着よつかなあ。メイド、チャイナときてるから、次も定番の和服？ いやでも、和服は髪をアップにしなきや決まんないし・・・・・・

そんなことを考へてゐる田の前で、お盆を片手に、シンが沈鬱な表情でたたずんでいる。

「おうシン、どした。なんか話でもあんのか？」

「いえ・・・・・別にありません。失礼します」

表情を消してシンは、いつもの丁寧な礼をして部屋を出て行つた。

「なんだあいつ・・・・・妙な顔してたな」

そういうぶかしがる洋一が、ティータイムを再開しようとカップに目を向けたとき、デスクの先、ちょうど入り口との間の床に紙が一枚落ちているのが見えた。

何気なく立ちあがつて手にとつてみると、それは毎週この街で発行されているタウン情報誌だつた。

シンが落としていたのかと思い、興味がでて中に田を通してみると、ほとんどが店舗のPRやクーポン券で占められてゐる、どこにでもあるパンフレット風の冊子であつた。

紅茶を口に運びながら、何の気なしに後のページの占いなどを見ていたが、つまらないのでもう一度パラパラとめくつて捨てようとしたとき、大きなおり文句とスナップ写真が田に留まり広げてみた。

その途端、洋一の口から、ダラダラと紅茶がこぼれだした。

「WANTED！

ワルと戦う 戰闘コスプレお

姉様！

大きなゴシック体でそう書かれた下には、スリットから白い足を覗かせて駆け去る、真紅のチャイナドレス姿の自分がいた。

そのまた下に小さな活字で、洋一がこれまでに起こしてきた事柄が克明に記事として書いてあり、末尾の言葉はこう結ばれていた。

「「」の女性の情報を編集部では求めています。それでなうわさでもOK！電話・FAX・メール等でお送りください」

ジノリのティーカップを持つ手が震えてこるのを感じながら、洋一は口中の紅茶を全部吐き出してそこに立ち去った。

「玲ちゃんす、ごよ反響が！こんなになるとは思わなかつたな俺」「ねつ、あたしの言った通りでしょ？ 絶対にこれ当たるつて」

送られてきたお姉様情報のメールの数を見て、玲は得意そうに胸をそらせると、タウン情報の記者にそういった。

彼女の口論見どおり、平和な街の退屈に飽きていた人々から、たくさんの戦闘お姉様に対する有象無象の情報が送られてきた。その内容はどれも玲の集めた情報の域を出ないものだつたが、自分の記事が大きな反響を呼んで、彼女の心はワクワクとはずんでいた。

「続報も頼むよ、玲ちゃん」

記者は笑顔でそういうと、またかかつてきたお姉様情報の電話へと対応しはじめた。

「はい、まかせといて！」

そう元気よくこたえたとき、ポケットの中でケータイが振動した。見ると兄からの着信である。

ピッピボタンを押してた。

「兄ちゃんめずらしいね、自分からかけてくるなんて」

「・・・玲、ひさしぶりだな」

彼女の耳に爽やかなアルトの声が聞こえてきた。

「どしたの、なんかあつた？」

「いや、これから会えないか？」

「うん、いいけど・・・どしたの？兄ちゃんから電話で会おうなんて、なんか不思議

「会つたときに話す。今どこにいる？」

「タウン情報の編集部。兄ちゃんには言つてなかつたけど、あたしライターやつてんだよ。さつきもさあ・・・」

「知つてる。じゃあ今からいとこりで待つてるから」

玲の言葉を途中でさえぎると、兄は編集部近くにある喫茶店の場所を彼女に伝えてから電話を切つた。

いつもと違う兄の態度に玲は首をかしげたが、まあ会えばわかるよ

ねと、編集部の入つてゐるビルを出ると、軽い足取りで歩き出した。

待ち合わせの店へと行きながら、兄にも戦闘お姉様のことを聞いてみようと考えていたとき、ふと気がついた。

-----あれ？ あたしがライターやってるの知ってるっていってたけど、なんでかな？

玲の親でも知らないことを、家を出でいる兄が知つていたというのがおかしかつたが、人大つぴらに言えない職業だからどこができるのかもと軽く思いなおして、早足で歩道を歩き出した。

その夜、洋一は母のマンションでうなだれて考え込んでいた。

・・・・・ どう考へてもマズいよね、また女装で街に出るのは・・・

ため息を一つついて、テキーラのグラスを傾ける。  
だが、今夜も彼はバツチリ女装していた。

青と白を基調に、胸元に豪華にフリルをあしらつたブラウス。パンツで大きく膨らませたフレアースカート。

首には艶脂色のリボンタイを締めて、不思議の国のアリス風メイドであった。

だがそれだけではない。

今夜の彼の頭の上には、なんとネコ耳カチューシャが装着されていたのだ。

そのなんとも言えぬ困った空気を醸し出している姿は、もはや女装などと簡単にくくれないほど複雑怪奇で、まさに「変態!」としか形容しようがない。

トドメはそばに置かれてある、手持ちの小さなトートバッグだった。中味は煙草とケータイ。

「出る気満々やないかい、ワレ!」と読者諸兄は突っ込まれるだろうが、まずは彼の言い訳も聞いてやつて欲しい。

心の病だかなんだかわからないが、ここで女装お出かけを辞めてしまつと、ストレスで稼業の方にも影響が出てきて、きっととんでもないヘマをやらかしてしまうだろ?。

とこうか、そもそもまず出てゆくことを止めるのが不可能に近い。

しかしこれもまた不思議だが、なぜか俺はタウン誌にマークされている。

だから目立つ格好でのお出かけはもう辞めよ。」

地味な〇しがホステスっぽい格好でならマークもかわせると思つから、これからはそれで我慢する」とじよつ。

「メント不能なムチャクチャな理論だったが、いちおつ結論りしきものが出て、洋一は立ち上がるときッと顔を上げて叫んだ。

「よし、だから今夜は最後のメイドナイトだ！」

バッグを手にすると、洋一は玄関へと小走りで駆け、用意しておいた黒い厚底のシューズに足を通して、ドアを勢いよく開けて外へと飛び出していく。

まるつきつ正常な判断ができなくなっている洋一から少し時間を戻そつ。

太陽が沈みかけ、街が紫色に染まる夕刻。

待ち合わせの喫茶店へと着いた玲は、目立たない奥まつたボックス席に座っている兄の姿を見つけて手を振った。

軽くうなづいて答える兄。

もつね氣づきかとおもうが、それは紅椿一家一交代付きのシンだつた。

「わあ、兄ちゃんの顔みんのひさしぶりだあ。元気だつた？」

にこやかに笑いながら玲はシンの前の席に座ると、注文をとりにきたボーキにミルクティーをオーダーする。

「ああ元気だ。すまないな、急に呼び出したりして」

「ううん、別にいいけど。それよりどしたの？あたしに話なんて初めてじやん」

無邪気に話しかけてくる妹から目をはずすと、シンは言ひよじんで黙り込む。

静寂が訪れ、しばらくは店内を流れる小粋なジャズだけが、二人の間に漂っていた。

ミルクティーが届くまでたつぷりと黙り込んだあと、おもむろにシンは切り出した。

「今週のタウン誌の記事を書いたのは玲か？」

なぜ知っているのかと玲はいぶかしながら、「べりと一口ミルクティーを飲むと、軽くうなづいた。

「うん、そうだけど。なんで兄ちゃん知つてんの？」

「あの記事に載つていた人をこれからも探すのか？」

質問に質問が返ってきた。

いつもの兄とは違つ、性急な物言いにとまどいながら玲が答える。  
「うん。さつきも編集部に顔出したらすんごい反響でね、電話やメールもバンバン来てて。記者の人にも続きよろしくって言われちやつてさ……」

「それ、やめてくれないか？」

言葉をさえぎられて、おどろいて玲はシンの顔を見つめる。

玲に対して優しい笑みを絶やさなかつたシンが、真剣な目をして自分を見ている。

その表情で気がついた。

「あの人つて兄ちゃんの知つてる人なんだ……」

今度はシンがおどろいた顔になり、息を飲んで皿を手に取る。

「兄ちゃんの彼女が好きな人なの？」

玲の問いかけに、兄の肩が小さく揺れた。

「やっぱそうなんだ。それで……」

「ちがう! あの人はそんなのじゃない」

おさえた声音だったが、玲がビクンとしてしまったほど強烈に否定の声だった。

またうつむいてしまった兄の姿を見つめながら、玲は思つ。

「ふーん……でも兄ちゃん。ちがうっていつでも

その仕草じゃバレバレだよ

まあその辺はあまり刺激しないようにじつと冷静な判断を下すと、玲は話を進めだした。

「それはいいとして。知ってる人なのはほんとでしょ? で、なにか事情があつて正体がバレると困る人」

そういうたとき、一瞬だけれどシンの口元がイーッとゆがんだのを玲は見逃さなかつた。

片手をつぶつて、少し上目遣いに兄を観察しながら、カップに口をつける。

「兄ちゃん言いたくないんだろうけど、その事情を話してくれないとこいつも困るわけ。これでもちゃんとお金もらって記事書いてるの、あたし。だから高校生だからといっていかげんな仕事はできないの。兄ちゃんやつちゃんだから、仕事のケジメつてよくわかつてるよね?」

理詰めできた妹の言葉に、シンは額に汗が浮かんでくるのを感じた。  
「…………」「、こればっかりは言えない…………でも話さない」と、この強情な妹は絶対に兄責を追うのを止めないだろう  
パラドクスな問題に、シンは苦渋に満ちた顔をした。

そんな兄の姿を、玲はまるで実験を見守る科学者のような目で見ながら、また話し始める。

「それにライターとして聞くわけだから、秘守義務ははちゃんと守るし、もちろん興味本位とかはいっさいなしよ。その人の生活に影響が出そしたら、記者の人に話して止めることもできるし」

はつとシンが顔をあげる。

その目に希望の光を見て取つて、あと一押しと、玲は一気にたたみかけた。

「それに・・・・・・」

「そ、それに？」

「兄ちゃんあたしが信用できないわけ？兄ちゃんヤクザになつてあたしやみんなに迷惑かけたけど、あたしが兄ちゃんに迷惑かけたことある？」

「ない・・・・・・」

「なら話しなさい一悪こよひでひましないから」

肉親の情と兄の罪に訴えた、本職のヤクザも顔負けの、アメとムチの使い分けが絶妙な交渉であつた。

シンより妹の方がその道にむいているのかもしれない。

証拠の凶器を田の前に置かれた容疑者のよつこ、がつくつとシンは肩を落としてうなだれた。

玲が田でもう一度うながすと、兄は一袋田の女装のことをぽつぽつと語り始めたのだった。



そして時はまた戻つて……

マンションのエントランスから出てきた洋一を見て、シンはうつとうめいた。

「あ、兄貴！ それはいつたいどんなお姿で……！？」  
「アリス風メイドね。よっぽど自信ないと決まんない服だからあんまし一般的じゃないけど。てか、あのネコ耳が意味不明」

「そうじやなくて！ なんであんなお姿に……それにちやんとあの冊子を落として警告したのになぜ」

「知らないよそんなの。好きだからでしょ、れつと。ああいつのは自分じや止めらんないもんなの！ それより兄ちゃん、いくよ」  
すっかり兄妹の立場が逆転していたが、そのことに気づかぬシンは、玲の後について洋一の追跡を開始した。

あの後、洗いざらい打ち明けた兄に妹は言った。

「ふーん、そういう事情ならこっちも考えるけど……で  
も兄ちゃん。あたしが記事にしなくつても、このままあの人があの格好で出歩いてたら、絶対に噂はおつきくなるよ。もう火はついたやつてるわけだし。その二代目だっけ？ その人にちゃんと話して辞めさせる方が先じやない？」

「それはできない！ つらい稼業の息抜きで楽しんでらっしゃる行為を舎弟に見られて説教されたなんてことになつたら、もう兄貴のメ

ンツは丸つぶれ。俺も組に、いやあの人のおそばにいられなくなつてしまふ」

「へえ、いろいろとめんぢいのねえ、ヤっちゃんも「火をつけたのは自分なのに、まるつきり同情していない口調で玲はそういうて、冷えてしまつたミルクティーをまずそつに飲む。

そして、うーんと顔を上にあげて考え出した。

「こつちから言えないとなると…………そだ！あたしがある人に言つてのはどう？」

「えつ」

「もう、にぶいなあ！だから、あたしがあの人の決定的な瞬間を捉えてから、出てつてはなすわけ。それならあの人も兄ちゃんもダメージ少ないつしょ？だつてあたし赤の他人だし」

「そ、そうかなあ？」

「じゃ、ほかにいい方法ある？」

黙り込んだシンを見て、玲は言つたのだ。

「決まりね。今夜から兄ちゃんとあたしであの人を尾行よつ。今度は必ずチャンスつかんでやる！」

「おい。それなんか意味ちがつてないか？」

兄の言葉はもう妹には届いていなかつた。

そして兄妹は今夜、洋一の後をつけているのだ。

「また街に出て行かれるのだろうか」

「うーん、そだとしたらそつと一キテるわね、あの人」

そう話す二人の前、100メートルほど先で、チラリチラリと青白いスカートが揺れている。

その光景に「クツ」とつばを飲み込むシンを見て、玲は目をイヤそうに細めていった。

「てか兄ちゃん。ほんとはあの人のこと好きなんじゃないんでしょうね？」

「バカ！ 兄貴は男だぞ」

「ただけど・・・・なんか兄ちゃんの反応がおかしいから」

「俺はノーマルだ。その気はない」

玲は、ふーんとまだ納得せずうなりをあげていたが、洋一の姿が角を曲がつて消えたので、いそいで闇を詰めて走った。

ぼくぼくとアリスマメイド洋一は夜道を歩いてゆく。

その足は繁華街とは別の方へと進んでいて、少しだけシンは安心した。

やがて洋一は、街の中心から少しはずれた市民公園へとたどり着いた。入り口の逆の字の標のあいだを通りて、彼の姿は闇の中へと消えてゆく。

深夜の公園なので人影はない。

ここでは騒動など起るはずがないとシンが胸をなでおろしたとき、洋一の目の前にバッと黒い影が現れたのが見えた。

何か一言二言はなす声が聞こえてきて、シンが前に出ようとしたら、

影がものすごい勢いで真横に吹っ飛んで倒れた。

それを見て唖然としたが、当の洋一は、もう後ろも見ずに鼻歌をうたいながら歩き出している。

二人にはよく見えなかつたのだが、黒い影は痴漢で、隠れて獲物を待つていたところ、おいしそうなメイドさんが現れたのでこれはラッキーと飛びついて、したたかに洋一に殴られたのだつた。

凶器は、左手に持つたテキーラの瓶であつた。

なんだかよくわからないが、シンはなぜか用意していたロープで男を縛り上げて転がし、玲が手帳に「この人変質者でーす！」と書いたページを破つて背中に貼り付けた。

その作業を一分とかけずに終わらせて、また尾行を開始する。

アリス洋一が公園を出てゆくまでの一時間の間にその被害者は三人にもおび、深夜の公園でのコスプレ姿がいかに危険であるかを知らしめた。

どいつも一撃で仕留められていたので、玲が出てゆく暇も無かつた。

洋一は公園を後にすると、トコトコと歩いて、24時間営業の大きなリカーショップへと入つていつた。

どうやら酒が切れたらしい。

面が割れているシンは出入り口の影に待機して、玲が中に入った。

彼女は大胆にも、たくさんの酒が並ぶ棚を一つ一つ吟味している洋一の後ろまで近寄つていつて観察した。

-----メイクがイマイチね。明かりの真下でよく見たら、男つてわかっちゃうかも

しかしども30男でしかもヤクザには見えないな、などと思ひながら、ゆっくりと後ろを通り過ぎた。

チラッとカウンターの方を見ると、レジに立っている男が、好色そ  
うな顔をほこりばせてメイドさんを見ているのがわかり、ムツとす  
る。

----- なんでかわいい女の子のあたじじやなくて、女装男の  
方を見るかな、もう！ メイド服に騙されちゃって・・・・こ  
れだから男はバカね

世の男性にはあまりに酷い感想をつぶやくと、玲はまた洋一の方を  
見た。

彼はバー・ボンの銘酒・ブッカーズを手にしてレジへむかっていた。  
そして支払いを済ませて店を出てゆく。  
店員の顔は最後までほころんだままで、まったく洋一の正体には気  
がついていないようだった。

外に出た洋一は、店の駐車所の奥の暗がりまで歩き、フーンスにもたれかかると、ブッカーズの封を切つてグビリと一口あおつた。そして酒瓶を下に置き、バッグから煙草を取り出し火をつけた。

口から吐き出された白い煙が、漂うそばからすぐ消えてゆく。なにやら納得がいかないといった表情をしていた。

- - - - いーん・・・ やつぱ公園とか店はつまんないな

煙草を口に運びながら洋一は考える。

そして、やはり街を歩きたい、そう思った。

洋一は、盛り場のあの猥雑な空気が好きだった。

そこにはたくさん種類の店があり、またそれ以上に様々な人々がいる。

その一つが醸し出す妙にウキウキとした、けれどもどこか少しやうげな香りがする、夜の街が彼は好きだった。

だが、そこへこの姿でゆくことはもうできない。

そこまで思つて寂しそひつむいた時、洋一の頭の中で魔性の声がした。

- - - - またお酒買ってホームレスの人たちに持つていってあげよう。それだけやって帰ればきっと大丈夫だつて甘い甘い誘惑の声であった。

じんわりと快感がこみ上げてきて、洋一は自分の身体を抱いた。もうダメだった。

しばらくせうして震えていたが、やがて店へと取つて返して大量の酒とツマミをかい込むと、洋一は地下街への道を颯爽と歩き始めたのだった。

地下街に天使が舞い降りた。

ふいにやつてきた美しいメイドに、そこに住む人たちはおどろいたが、彼女が前に酒とあたりめを投げ込んで消え去つたチャイナの女だと気づいた辰さんが、仲間にそう説明したので、みんな警戒をといて集まってきた。

冷たい夜風に震える人々に惜しみなくアルコールを配り、嫌がることなく輪の中に入つて話を聞くメイドさんに、彼らは神性を感じた。

「こないだはありがとよ、お姉ちゃん。今夜もこんなに差し入れ持つてきてくれて」

「ねえちゃん色が白くって彫が深いけどハーフかなんかか？」

「いける口だねえ、ほらドンドン飲んで」

突然はじまつた深夜の宴の中、人々は口々にメイドさんに話しかけ、彼女もまたそれに笑顔でこたえた。

口数が少なく、その正体もわからないけれど、事情があつてここに住む自分たちにちゃんと接してくれるメイドさんと、みな好意を抱いている様子だった。

冷たい世間の風もその周りを避けてゆくような温かい宴はずつと続くかにみえたが、終わりも突然やつてきた。

「おお・つー今夜はメイドさんがいるよオ

あざけるような声が宴の輪の外でした。

声のした方を見ると、5人の若者が手にバットや木刀といった物騒な物をさげて、じゅらじゅらを向いてニヤニヤと笑っていた。

先頭に立っている長い金髪の男が、手のひらに特殊警棒をピタピタと叩きつけながらいった。

「かわいいねーメイドさん。俺らといつしょにこの臭いのいじめて遊ばない?」

男たちの発する臭の空氣におびえて、ホームレスたちは後ずさりしながら固まつてゆく。

「街のおそうじ屋さんさ、俺らは。こいつやつて!汚いのを! かたづけてさ!」

シャーツと音をたてて警棒を伸ばすと、男はゆがんだ笑い声をあげながら、ダンボールハウスを一つづつ潰してゆく。

「うわああー!」

一人のホームレスが恐怖に耐え切れなくなり逃げ出した。

木刀を持った男がすばやく走り、地上へと続く階段に逃げたその影に斬りかかる。

鈍い音がして、悲鳴が暗い闇から響いてきた。

警棒の先をメイドの顔にむけて、金髪がいう。

「それともなに？ あんたも偽善者でこいつら守る方なわけ？」

男がうつむいたメイドの顔をあげようとした時、冷えた声がした。

「・・・臭いねえ」

「あア？ そりや臭いさ、ここは」

そう答えた男をあざける高い笑い声がメイドの口から飛び出す。そしてよく光る田で男を見据えて言つた。

「いくら香水振りまいて隠しても、消せないくらいバカなガキの匂いがして臭いっていつてんのさ」

彼女の押し殺した声に、男たちの笑いが止まる。

メイドはゆっくつと立ち上がつた。

「ハツ！おもしろい」と叫うね、おねーさん。じゃ、おじさんたちの後で遊んだげるよ。俺、気が強い女が泣くとこ見んの好きなんだあ」

鼻で笑いながら言った金髪の言葉に、後ろの男たちがククッと笑つた時、メイドの左手に光るもののが現れたかとおもうと鋭く横になぎ払われ、同時に右手が閃いた。

金髪のズボンの股間が切り裂かれ、バットを持っていた男の顔面に焼酎の瓶が突き刺さる。

次の瞬間にはもうメイドの身体は金髪の懷へと飛び込み、人差し指と中指を「」の字に曲げた拳が鼻下の急所に炸裂した。

吹っ飛んで倒れた一人にかまわず、木刀男が走りこんできて、メイドの頭を狙つて上段から打ち下ろす。

逆らわず、かえつて進んでそれをかわして相手のみぞおちを狙う彼女に、手元に鞭のように引き寄せられた木刀が、鋭い突きとなつてまた襲いかかる。

あきらかに剣の心得があり、しかも暴力に慣れた動きだ。首だけでそれを避けて、さつとメイドは後ろへ飛んだ。

さつきまで彼女がいた空間に、チエーンが叩きつけられる。連携のとれた動きに、残る男たちもかなりの手練れだと思われた。

木刀が正面を、チエーンが右後ろ斜め。そして真後ろをナイフの男が固めてメイドの動きを封じる。

どの男の顔も人をいたぶる悦びに歪み、そして醜い笑いを張り付かせていた。

不穏な空気がまた高まつてくる。

三人が一斉に仕掛けた。

わずかにナイフの動きの方が早いと見たメイドが左へと飛んだ時、そこへ木刀が待っていたように振り下ろされ、それをかわす少しの動きの間に、彼女の右手にチエーンが絡みついた。かろうじて後ろのナイフを蹴り上げてかわす。

左を開けておいたのも、三人の攻撃のズレもすべて罠だつた。

鉄でできたチーンはどう仕組みなのか、メイドの腕に絡み付いて離れない。

「ちょっと！ 服汚したツケ、高いわよ、動きを封じられてもなお、メイドは不敵にそう叫ぶ。囲む男たちはニヤニヤと笑っているだけだ。誰も口をきかないところが、かえって隙がない」とを感じさせて不気味だ。

「兄ちゃん、これヤバいって！」

階段で木刀に襲われた男を介抱しながら下を見ていた玲が、隣のシンの腕を引いてそういった。

出てゆこうか迷っていたシンが、もはやこれまでと足を踏み出した時、また三人が動いた。

チーンが強く引かれ、腰を落として耐えたところへナイフと木刀が斬りかかる。

どちらかが動きのとれない彼女に当たると、玲は目をつぶった。

その刹那、メイドの左手が一度光った。

斬りかかる寸前でナイフと木刀の動きが止まり、フリーズしたような一秒の間の後、二人がどつとその場に崩れ落ちる。気絶した二人の顔のそばには、細長く光る短刀のような物が落ちていた。

「兄貴の小柄術だつ。初めて見た・・・・・・」  
「唖然としてシンがつぶやいた。



「さあて、あんたには服のお返ししなきやねー。」  
肉食獣の瞳がチョーンの方へとむけられ、睨まれた男がビクッとする。

メイドがグイッとチョーンを引いた。

釣られて男が固く握り締めた時、白い網ストッキングに包まれた足が高く上がり、まず真横、そしてしなるよつに正面蹴りへと変わって、男のわき腹と顎に決まった。

テコンドーぱりの一一段蹴りに、男の身体が吹っ飛ぶ。  
が、握ったチエーンに絡まってまた前へ帰ってきたといひで頭がかえられて、重い膝蹴りが入った。

鼻骨が碎ける鈍い音が階段の上まで聞こえてきて、顔をしかめて玲がつぶやく。

「・・・・・痛つたそつ」

四人を完全に鎮圧してしまったメイドさんに、わーっとホームレスたちが駆け寄った。

「すげえ！あんた強いなあ」

「こいつらに仲間が何人もやられてんだ」

「よかつた・・・・これでしばらくなつくり寝らるよ」

賛辞と喜びの声が寄せられる中、メイドさんがはにかんだ笑みで彼らに答えていたとき、地下街の照明とは別のまばゆい閃光が辺りを照らした。

はつとメイドさんが光の方を向いたときに、もつとフラッシュ。そしてすぐ、少し鼻にかかる声が響き渡る。

「そこまでー、バツチリ撮つたからね、あなたっ」トントンと軽い足取りで階段を駆け下りながら、頭上に高く「ジカメを掲げて見得を切つた女の子に、メイドさんの顔が凍りついた。

「ありやあ、タウン誌のおじょつかやんじゃねえか」「ひせしづりおじさん。元気だった? セッキやられた人はあたしが手当してもう大丈夫だから。」おどりいた顔でホームレスの一人がそいつたのに笑顔でこたえながら、ゆっくりと玲はメイドに近づいてゆく。

口と皿を二二四四のように並めて笑う女の子に、メイドさんが震えだす。

「あの子は大丈夫だよ、おねえちゃん。記者だからついでに記事にしてもらえ。街の有名になれるぞ」あれほど強かつた彼女がなぜこんな少女を恐れるのか不思議だったけれど、ホームレスの辰さんは氣をきかせてそつこつた。が、その言葉に、ダーシとメイドさんの顔に黒いすだれが下りてしまつ。

「ダメだ・・・・・終わつた・・・・・俺の人生・・・・・・・・・

小さくそつとふやく洋一の姿を見て、階段の上にいたシンがうなだれる。

「・・・・・すみません兄貴。でもこうするしかあなたを守ることはできないんです・・・・・許してください」

こうして洋一と玲は出会った。  
ボーイ・ミーツ・ガールならぬ、ヤクザ・ミーツ・JKであった。

「うわあー、なにこの数と種類！？ しかもオーダーメイドっぽい服ばっかじゃん！ これって全部あんたが集めたわけ？」

「いや、俺の母親ので・・・」

「うう、見たことない高っかそうなブランドのバッグがいっぱい！ あなたの母さんってお金持ち？」

「うん。かあさんは関西の本部筋の組の娘だから・・・」

洋一の女装姿をカメラに収めて、半ば脅迫氣味にやつてきた彼の母のマシンション・・・・・いや、すでにこの名は適切ではなく女装ルームと言つた方がよかろう・・・・・で、そのコレクションを見た玲は、ど胆を抜かれたというかあきれたというか、表情に苦労して、ふーっとため息をついた。

----- 意外とこの男の女装壁つて母親の影響じやないかな？ するどいカンであつた。

リビングに戻つてソファーにびっかりと座ると、うなだれて立つているアリストメイドの男をじろりと見た。

「・・・・・マイク落としてきて」「え？」「早くー」「あ、はい・・・

小走りにバスルームへと駆け去る洋一の背中を見送つて、ふんと意地悪そうに鼻を鳴らす。

「ほんとにあれでヤクザなわけ？ 信じらんない

バスルームからもれる水音を聞きながら、あらためて部屋を見渡してみる。

普段人が住んでいないとはとても思えないほどきちんと清掃され、また整理されていた。

赤い一人掛けのソファーや、明るく柔らかい色のカーテン。壁に掛けられた絵や数々のインテリアを見て、玲は洋一の母親の趣味の良さを感じた。

「…………でも息子がアレじやあねえ」

またふーっとため息をついていたら、バスタオルを肩にかけた洋一が戻ってきた。

「…………落としてきた」

「じゃ、そこに座つて」

ちよこんと向かいのソファーに腰をおろした洋一を、じりつと見る。完全に男に戻っているが、一いちらをビクビクとした目で見上げる仕草がまだオンナだ。

そんな男があそぶあそぶ口を開いた。

「あの…………写真なんだけど」

「ちよつと待つて！ まずはこいつなつた経緯から話して。それから考えるから」

「…………」

ぴしゃりとさえぎられてまた洋一はうなだれたが、尻尾を完全に掴まれて観念したのか、ぽつぽつと女装へと至った道を語り始めた。

ヤクザの息子といふ立場で育つてきた自分と本性との葛藤。

そしてヤクザ渡世に対する不安と不満。

あの夜の女装子との出会い。

女装による快感と解放感。

とつとつと語る洋一の告白に耳を傾けながら玲は、特殊な環境で育つてきたこの男の人生を想像して、なにやら感慨深いものを感じた。やがてそれは彼女の中であることへと変換され、熱く大きくなつていいく。

うつむく洋一を見つめる玲の瞳に、いつしか力強い輝きが宿つていた。

「……わかつた。あんたがやむをえず女装に走つたその気持ち、あたしにもわかる」

すべてを話しありて大きく息を吐く洋一に、玲は優しくそう言った。その言葉に、はつと彼は顔を上げる。

玲と洋一の視線が空中で絡み合い、彼は彼女の目の奥に、自分に対する自愛を感じて顔を輝かせた。

「…………ああ、この子はわかつてくれる。この誰にも言えない苦しみと立場を…………この子なりきつとあたしを悪いようにはしないはず

突然あらわれた理解者に、恋の予感にも似た歓喜を感じながら、ドキドキする胸を押えていった。

「じゃあ写真は……」

「これからもバンバン女装しなさい！あたしがサポートしたげるつ」

この娘は女神かと本気で思い、感動に心はむせび泣く。洋一は目を輝かせながら、両手を組んでいった。

「や、それじゃあ写真は……」

「メイクや今風の格好も教えてあげるー！」のままじゃ昼間とか違和感あるし」

「あ、ありがとう。それで写真を……」

「そうね。メイドをベースにもつとコスプレ要素を加えて……」

で、街に巢食う悪党と戦う・・・・・

さすがに話がかみ合つてないことに洋一は気づいて不安になつたが、毒を食らわば皿までとおもつてまたいた。

「あの、それで写真は？」

「戦闘乙女？いや、違う・・・・・ 天使？これも違うわね。てかエンジールって年じやないし」

「なにいってんの？それより写真はどうなるの？」

「うつせいーちょいだまつて」

「・・・・・」

数秒考えてから玲はガバッと立ち上がると、指を洋一に突きつけて叫んだ。

「天女！ そうよ戦闘天女！ あんたはこれから、人々に愛と平和をあまねく与える天女として生き、そして伝説をつくるのよつ！」顔を上に上げて、狂つたように高笑いしばじめた玲を見て、洋一の顔が蒼ざめる。

「おい、なんだよそれ！ おまえ魔法少女物の見すぎだろそれ！」ソファから飛び上がって立つと、声を男に戻してヤクザアイで睨みつける。

だがこの娘は、その鋭い視線をかゆいとも感じてはいない。舌打ちするといった。

「チツ、ほんとうつせいわね。男のくせに細かいことをウジウジと

「細かくねえ！ おまえ普通じゃないぞそれ。言つてゐ」とムチャクチャじやねーか！」

「女装コスプレのヤクザにいわれても、なーんにも感じないよーだぐつと言葉に詰まる洋一に、ニヤリと気味の悪い笑みを浮かべると、

玲はゆっくりとポケットから腕を引き抜いて、握っていた手を彼の鼻先で広げた。

手のひらにちよこんとのつていたのは、小さなボイスレコーダー。それを見た洋一が、瞬時にガマガエルのように汗を噴出させる。

「ふふうん。 セツキの告白もちやーんと録音させていただきまし  
たあ。 でもあたし脅迫とか好きじやないから、 自発的に協力してほ  
しいんだけど・・・・・・」

「メソチヤ賣してんじゃねーか！ てめえ本職賣してどうなるかわかつてんだろうなー！」

「うん！ あたしからう」がなるべことほ、あんたもそなうなるてことでしょ？ つまりあたしたちはペア・・・チームつてわけよね。あ、ちなみに写真はデジカメからSDチップでケータイに移し変えてメールであたしの部屋のパソコンに飛ばしてあるから。玲になんかあつたらこれを公表してくださーい！ って書いてねっ」

「ね、どっちがいい?」

「うわあ神戸に来ました」

ぐうとうなると、洋一は床に膝をついた。

その肩にポンと玲が手を置く

「やだあ。そんなに心配しないでよ、悪いようにはしないって。それにこんなただのお遊びじゃん。ね、ねじせん? きっと楽し

軽く微笑んでそういう玲のことを、キレた田つきで睨む。

悪こよひにや、なんこいわつて絶対に悪こよひにや  
るんだつてー。

さすが本職、的確な読みだ。

奥歯をかみ締めて心中でそう叫んだが、事態は口の手を離れてこの娘に握られている。

従うしかないのだ。

そう思つたとたんに、鬼のようだつた洋一の顔がだらしなく歪み、咽喉から嗚咽がこみ上げてきた。

「えつとね、あしたまでに綿密なプランたててくるから、メアドとケーブルおしえといて。あ、そうそうー、あしたはあたしがメイクしたげるから。もつとつまく化けるよ、楽しみねつ」

男泣きになく洋一の前で、玲は自分の世界に入り込んでペラペラとしゃべつている。

彼女の目にはすでに彼の姿は映つておらず、爆発するように湧き出すこれからプランをまとめるのに夢中になるのだった。



「いたぞ、こつちだ！」

男の声があがり、数人が自分の方へと駆け寄つてくる。ヤバいと身をひるがえして逃げ出す背中に、フラッシュの風が襲い掛かった。

「あんな娘の言つことなんか真に受けなきゃよかつた！」

その夜も玲の指示通りに女装して街へ出た洋一は、待ち構えていたギャラリーにたちまち捕捉され、逃げ回っていた。

だが、走つても走つても、物陰や店から黒い人影が湧いてきて、必ず見つかってしまうのだ。

「わっ！」

足をひねつて転倒した。

痛みに顔をしかめて足元を見ると、靴のかかとが折れている。

洋一はハイヒールを脱ぎ捨ててまた駆け出した。

だが数メートルもゆかぬうちに、コンクリートで囲まれた袋小路に入り込んで、立ち止まってしまう。

咽喉の奥でうなりをあげる間に、ものすごい数の人を取り囲まれて、目もくらむようなストロボがたかれた。

「やめろー！写真を撮るなつ、カンベンしてくれ」

顔を手でふさぎ、うつむいても、眩しい白い閃光は止まない。

やがて自分を囲んだ人々の中から、たくさんの手が伸びてきて・・・

「・・・・・若、若」

「つづり、ゆるして・・・・」

「若つー、どうしたんです若ー。」

「ぐわあああああ！」

はっと目覚めると、そこは組事務所の中にある自分のデスク。白髪の男が正面から、シンがすぐ横から困った表情で自分を見ている。

「ああ・・・・夢・・・・だつたのか

動悸うつ心臓を静めながら、洋一は額の汗を指でぬぐつた。

「若。どこか身体でも悪いんで?」

白髪の男が野太い声でそつたずねてくる。

中肉中背だが、ダークスーツの上からでもそつとわかる、鍛えた身体をした初老の男である。

浅黒い顔に、白目が勝った三白眼と左頬の赤黒い刀傷が見え、それがこの男もヤクザであることを示していた。

二代目の相談役。つまり洋一の極道渡世指導教官兼、お目付けの真ま  
渦うず 雄五郎おうじやう 60歳であった。

「医者の手配をしましょ」

そういうつて雄五郎はシンに目配せをする。うむを言わさず病院へと連れてゆく氣だ。

洋一がうなされていた原因に、なんとなく心当たりがあるシンは、  
そういうわれてとまどつ。

「いや大丈夫だ。ちょっと昨夜のみすぎちまつてな

「一度医者に見てもらいましょう。一代目に何かあつたら、俺が工  
ン口飛ばしたくらいじゃおつきませんから」

重々しくやう告げる雄五郎の顔を睨み付けながら、小さく叫ぶ。

「俺がいいつて言つてんだ。ヤクザがいちいち身体がビリのつて騒  
ぐんじやねえ！それこそかつこがつかねえだろうがつ」

「・・・・さすが若。見事な渡世の心意氣です。これも日々の任侠  
道の賜物ですな」

暗に自分の指導のおかげ、といつ部分を濃厚に匂わせて雄五郎がつ  
ぶやく。

舌打ちしたいのをこらえて、洋一はそっぽをむいて煙草をくわえた。  
彼はこの雄五郎が煙たくつてしかたないのだ。

思い起こせば、まだ自分が幼少の頃からこの男はすでにそばにいて、  
事ある」とに極道として生きることとその精神を強要してきた張本  
人の一人だった。

ヤクザの道に疑問を抱いていた洋一は、ことじとく雄五郎に逆らつ  
てきたのだが、この脳が極道という厳で出来てる男は、彼をなだめ  
もすかしもせずに直球、上段から心を打ち据え、真直ぐに渡世へと  
引っ張つてきたのだった。

こういう人物に少々の手管は通用しない。

なので洋一は、父・義隆以上にこの男が苦手なのであつた。

煙草に火をつけて、煙を天井へと吹き上げながらたずねる。

「で、なんか用か?」

「はい。組外の義理事の件です」

「言つてみろ」

「会長の指示で、これまでできるだけ若に義理掛けに行つてもうりつておりましたが、どうも若是積極的に他の組との友誼を深めてくれません。今日はそのことを一つ申し上げに参上しました」

ようするに、お小言をこにきたのだった。

洋一の田の前で雄五郎は、とうとうと極道同士の付き合い、つまり義理事の必要性を語つて止まない。

その小姑のような口調と態度が嫌いな彼は、顔をしかめて煙草を吹かす。

だが一一代田オーラをそよ風とも感じぬこの老極道にはかなわず、ただ聞いているしかない。

お説教は小一時間に渡り、洋一の精神を痛めた続けた。

「このままでは示しがつきませんので、若をどいかの組織に一時預かりしてもうりつて、一から渡世のことを学んでいただこうと・・・・。」  
「ちよい待て!そりやおまえが言つてんのか?」

話を途中でさえざると、洋一は剣呑な声をあげた。

「こえ、会長です

「チツ！」

「うえあれず舌打ちしてしまつ。

-----あのエロヤクザが！てめえは一ダースの妻とよりしくやつてんのに、まだ俺を檻に閉じ込める氣かよつ

好色で銭金にがめつゝ、息子であつても心を許さないといつ、ヤクザになる為に生まれてきたような義隆の顔が脳裏をよぎつて、その不快感に身震いしてしまつ。

あの美意識のかけらもない男を洋一は呪つていた。

その分だけ、真逆である母を慕つてきたといつていい。

考え込む洋一に最後に雄五郎は告げた。

「とにかく。このままでは会長の指示通りに行儀預かりにせざるをえません。相談役として申し上げます。もつと身を入れて極道渡世、ひいては義理に精を出してくださー」

そう言い終え、びしりと一礼すると、老極道は部屋を出て行つた。

バタンとドアが閉まつてから、煙草をひねり潰して洋一が罵る。

「なーにが相談役だつ。口を開けば渡世渡世つて、おまえはアザラシかつての！」

「兄貴・・・・・それを言つならオットセイです」

「お、そうか？」

氣の毒そうな目で自分を見つめているシンに、強いて明るくいう。

「ちやーんとやつますよ。これまで以上にきつちりキリキリつて、このシラ見せて回つてやるわー！」

おどける兄貴にシンが引きつった笑みを浮かべる。

実は彼の心配事の全ては、一代田の女装癖にあるのだが、そんなこと

は知らない洋一は、無理に笑顔を繕い、変な声で笑い続けた。

## メイク

そして太陽が沈み、やがて月がのぼつて夜になる。

午後10時。

母のマンション改めここ女装ルームで、玲と洋一の初女装ミーティングが開かれていた。

何を強要されるのかとおどおどする洋一だったが、まずはメイク講座といふことで、ほっと安心した。

「いい？ まず女装前に大事なこと。それは髭、ヒゲの処理ね。あんた、自分はヒゲが薄いから大丈夫とか思ってるんだろうけど、全然ダメ！ 照明あたればバレバレよ。剃つてもね、隠し切れないの。毛穴のポツポツとかも女の子じゃないしね。 で、まずは抜く！」

そういうて銀色に輝く毛抜きを出してみると、ぎょっとする洋一の耳をしつかと掴んで、情け容赦なくヒゲを抜き始めた。

「いたい、痛いって！ せめてタオルで温めてから・・・・」「うつむきーあんたヤクザでしょ？ こんぐらー我慢しなきよ、ほら修行だと思つてさ」

「そんな修行あるか！」

聞く耳を持たず玲は毛抜きを使い続け、やがて全てのヒゲといふヒゲが抜かれて、洋一の顎は血だらけになつた。

「これでよしぃと。後はあたしが持つて来たSAPコンシーラで毛穴

を隠せばOK。あとあんたね、アイラインの引き方がヘタ・シャドウのぼかしひかも。昭和のオカマじゃないんだから、ベッタリ塗ればいいってもんじやないの。いい? 鏡見てなさい」

洋一の顔を鏡の正面に向けると、自分は彼の膝の間に座り込んで、チユーブから褐色の液を手の甲に少しづつ出して塗り始めた。

見る見るうちに顎が平らになつてゆき、やがて完全に毛穴と青い部分が消えてしまつて洋一はおどろいた。

「これ舞台用の強力なやつだからね、市販品よりいいよ、高いけど。あ、領収書もらつてきてるから後でお金おねがい!」

ヤクザに領収書つて、と鼻白んだが、彼女はそんなことにほかまわらず、今度はアイビューラーとリキッド状のライナーを出してきて、まずまつ毛をグリーングリンに上へと跳ね上げてから、慎重な手つきでアイライナーを引き始める。

「まつ毛のね、根本をちゃんとつけてついつく感じでまづは埋めていくの。あんたいきなりベタツつていつてたでしょ?」

うんうんとうなづくと、頭をはたかれた。

人生初の頭はたきに唖然とする彼に玲がどなる。

「うーくなーズしてへんになるじやない、もう。リキッドのライナーは決まると田がパツチリだけど、その分むずかしいんだからねつ」

玲は、ものすく真剣なまなざしをして、二重まぶたの下、まつ毛のギリギリのラインを縁取つてゆく。

「よつしー。次はシャドウね。お水とかならパープルでもいいけど、今夜はまつちよいナチュラルにラメとかも控えめでいくね」

たくさんの色が並んだパレットに、シャドウスティックをはたはたとつけ、ポンポンとまぶたの上あたりにはたくようにつけてから、

わざと指で広げてゆく。

やがて出来上がった自分の皿を見て、洋一は驚嘆の声をあげた。

「わあ！ すん」「パキつとした、皿が

「でしょ？ じゃ、落としてきて」

「え？」

「え、じゃないわよ。次は自分で最初つからやるのー覚えらんない  
つしょ、やらないと」

「・・・・・あい」

それからも玲のメイク指導は、若干いじわる氣味にて一時間に渡つて  
続いた。

「まあはじめはこんなとこかなあ。あとは回数かさねて慣れだから  
ね」

なんとかお許しのでた顔を、改めてじっくりと見た。

「たしかに今までとは全然違う・・・・・。ですが本職  
だ！」

胸が高鳴つてくるのを感じる。

そして頬を喜びでほころばせていると、また玲のきびきびとした声  
が飛んできた。

「次、ウイッグ付けて！ 髪のセット教えるか？」

「はい！」

なぜか女子高生に顎で使われて、喜んで従つて居ることに彼は気づいていない。

多種類のブラシや櫛の使い方、服やイメージによる髪型の整え方など、一から彼女は教えてゆく。

「女装でも普通のお化粧でも、なんでもイメージなの。それを綺麗に描いてその通りに演出する・・・・・つまり皿皿自演の自分を絵に描くみたいな感じ？だからこれからは女性誌とか見てもっとイメージをふくらませなさい。ほら、買つて恥ずかしいだろうと思つて持つてきてあげた」

そういうつて玲はスポーツバッグからたくさんのファッション系雑誌を取り出すと、洋一の鼻先に突きつけた。

ついでに領収書を渡すのも忘れてはいけない。

それでもまだミーティングは終わらない。

服の着付け、またその種類や見た目にに対する印象など、日付が変わつても指導は続く。

「で、今夜はどんなかっこしたいわけ？」

「…………ナース」

顔を真っ赤にしてうつむけた洋一が、消え入りそうな声でつぶやく。

「はア？この真性のヘンタイがっ！そんなのあるわけ……あれ？あるじゃん。なにこれ…？　あんたのお母さんっていったい…………」

その先を言おうとしたが、あまりに洋一が恥ずかしそうにしているので止めておいて、玲はなぜかワードローブにかかつていたピンクのナースセットを取り出すと、さも嫌そうな顔をして前に突き出した。

「自分で着て！　ヘンタイコスはあたしの範囲外だから」

「…………」

しかたなく洋一は一人でそれを着た。

玲はふてくされた顔でそっぽを向いていたが、要所ではちらりと見て短く指導する。

やがてナースへと変身を完了した洋一に彼女はいった。

「まずそこに座つて！」

「はい」

なぜかフローリングの床の上に正座したので玲はおどろいたが、ソファーに座れといい直すのも面倒だったので、そのままにした。

「これから言つのが一番大事なことね。まずは戦闘天女のコンセプトです」

「すみません…………その名称は確定ですか？」

控えめに言つた質問は無視された。

「いい？きのうあんたがホームレスの人たちに差し入れしてるので見て思ついたの。天女はまず、街の弱者に喜びを運ぶ役目をします

「それってどうしたこと?」

「ええっとね。差し入れとかはもうひん続けても「ひりがひ、ひりか  
かって」と、変な男に絡まれてる女の子を助けるとか、道いつぱ  
いに広がって通行の邪魔になつてゐる奴を指導するとか、そんなトラ  
ブルシユーターみたいな感じかなあ、たぶん」

「こつ本当は思つてきで言つてやがる、そつ洋一は感づて玲をこ  
らんだが、彼女がこつちをむくと笑顔になつてこつた。

「えつと、じやあこままでみたいに不良をやつつかむひりかでい  
い?」

「うーん・・・・・・ ほんとはもつと慈善的な」としてもひりたい  
んだけど・・・・・・ まあそれはまた考へとへー。」

「・・・・・・・・

「なによ? ちやーんとあんたが大っぴらに女装できぬよ! に考へ  
てあげてんのになによ、その田は?」

「いえ・・・・・ なんでもないです」

嫌な目つきで玲は洋一を見ていたが、やがてふんと鼻を鳴らすと話  
しに戻る。

「でね。あんたのその活躍をあたしが記事にして、やがてそれは街  
の伝説に・・・・・」

「ちよい待つた! それ話がちがつし。バラさなこつてあんた言つた  
つしょー!」

「はあ・・・・・・ 言葉遣いも指導しなきやだわ。それは置いと  
いて。うん、あんたの正体はバレないよ! こりゃんとするよ。その  
ために完璧なメイクも教えたんだし」

「でも写真でバレバレだろ! しかも記事なんかになつて大勢が見に  
きたりしたら・・・・・・」

昼間に見た悪夢を思い出して身震にする洋一に、こともなげにあつ

さりと玲はいつ。

「だーいじょうぶだつてば。もつ一回鏡みてみなさい。その顔とボーズ頭でヤクザ顔のあんたを結び付ける人なんていやしないって。それでも心配なら、昼間はもつと恐そうな顔してることね」

「・・・・・・」

「それに、他の手も打つてあるし」

「なにそれ？」

洋一の質問にはこたえず、腰に手を当てると、玲は高らかに宣言した。

「さあ、天女さまの初仕事よ！ きあい入れてこーっ

黙つて上田遣いで自分を見上げている洋一を玲が叱りつける。

「ほひ、もつと楽しそうな顔しなさいよ！」

先行き不安でとても楽しめそうにはなれなかつたけれど、今はこの娘のいうことを聞かなくてはならない。

拳を突き上げて気合を入れている玲に従い、洋一はアイライナーで書いた目尻を上げて、小さな声で「おーっ」といつて手をあげた。

マンション前に止めたありふれた紺色のワゴン車の中でシンせつぶやいた。

思わず皿を飛ばしてしまひ。

大きなため息を吐き出してから、気を取り直して車を降りると、気がつかれないように一人の後をつけ始める。

そう、彼こそが玲のいた他の手、なのであつた。

彼女の指示や機転では力ハリしきれない出来事 - - - - 本職や警察の介入 - - - - といった事態が起つたとき、シンがこつそりと、あくまで洋一に気づかれないように処理する。

それと、自分たち以外の第三者が、洋一をスケーラーとした場合の妨害。

暗闇から街灯の下へ。

そこで明かりの中にナース姿が浮かび上がるたび、シンはため息をつく。

「玲のやつ、兄貴をどうしようつていうんだ。もし少しでも迷惑をかけるなら、いくら可愛い妹でも、ケジメはつけなくては……」

そう一人こちるが、今のシンに玲の指示以上のことなどできそうにな  
い。

だから不本意ながら、じつして影で見守つているのだ。

「しかし、兄貴は女の姿になつてもカツコイイ……」  
うつとりと洋一の後姿を追いながら、シンは初めて彼と出会つた時のこと思い出していた。

目標のない大学生活にいやけがさしていた時、街でしつこいキヤッ  
チに捕まつて往生していたサラリーマンを助けて、地回りのヤクザ  
ともめてしまつた。

五人を返り討ちにしてしまい、残る一人が懐に飲んでいたドスを抜  
いて自分へとむかつてきた時、洋一は現れた。

「バカヤロウ！ カタギに光りもんむけて、それでもてめえ渡世人  
かつ」

その一喝でドスを納めさせ、次に輝く白い歯を見せながら洋一は自  
分に笑いかけた。

「兄さん。とんだ行き違いですまないが、ちょいと訳をあつちで聞  
かせてもらえませんか？」

そう誘われて入つた静かなバー。

ここで何か無理難題をふつかけられる、そう緊張したが、洋一は氣  
を使って店の奥に隠すように自分を座らせてから、ちゃんと話を聞  
いてくれた。

始めに突っかかってきたのは向こうの、ばかりは非を出したから謝ったこと。

だが自分の指摘した非で、相手が激昂して殴りかかってきたことなどを、正直にシンは話した。

彼の性格なのが、まちがつたことが嫌いで、それゆえに大学でもプライベートでも孤立していた。

誰も自分の相手をしてくれず、言えない言葉ばかりが胸の内に貯まつてゆく毎日だった。

シンの話を洋一は真剣に聞き、また地回りとキャッチの関係や立場も語ってくれた。

「たしかにやつてゐる」とはひどいことです。あたしも少しはマシン稼業になればとおもつてやつてはいるのですが、まだ若輩の身で、なかなかつまといません……それで街の皆さんや兄さんここまで迷惑をかけてすまないと思つてます」

そういうつてから、かなり立場は上だと思われる男は、自分に頭を下げて謝つた。

その素直な態度にかえつてシンの方が恥縮してしまって、こちも塗我をさせてすまないと謝る。

話が収まつたところで洋一は、はははと涼やかな声で笑うと、まるで子供のような顔になつていつた。

「それでも兄さん強いねえ。あいつひつひつの中でも腕つぱしじやかなり上方なんだぜ」

がらりとくだけた口調になつた洋一は、いつしかシンは心をまだされていた。

手打ちだといつてその場で酒を酌み交わす内に、いつの間にかシンは、日頃かかえている鬱屈した思いまで語ってしまったのだった。

全てを話し終えた後、恥ずかしさで赤面してしまった自分に、優しそうな目をむけて洋一はいった。

「シン・・・・って呼ばせてもらつていいか？ おまえ、いい奴だな。俺はこの通りのヤクザなんだが、カタギの連れもほしこつもおもつてたんだ。嫌でなけりや、たまに会つて話を聞かせてくれないか？ もしおまえに迷惑がかかるなら、すっぱり目の前から消えるから

始めは目をみながらぶつきあらまうにしゃべっていたが、言い終えると少しばにかんだ表情になつて、洋一は顔をそらせた。

シンはその時、洋一が見せたわずかな揺らぎの中に、自分と同じ孤独を感じ取つた。

-----この人は助けを求めている

そう思つた瞬間、おもわず言つてしまつていた。

「あなたの元で働かせてください。おねがいします！」

洋一は笑つてその言葉を取り上げなかつたが、日々日参するシンを持て余して、半年後ついに受け入れてくれたのだった。

こうしてヤクザとなつてしまつた今思い出せば、それは稼業としての人集めの一環だつたろうとおもつ。

だがシンは、あの時の洋一の顔と口調の裏に感じたものに間違いはなかつた、いまでもそう思つてゐる。

日々接する兄貴との時間の中で、その思いは色々な形で段々と硬く強くなつていった。

『兄貴を助けられるのは俺だけだ』

その想いが今のシンの全てを支えていた。

懐かしくも切ない回想が終わり、シンの目がふたたび己が兄貴の姿をとらえる。

・・・・・ 兄貴・・・・・ あなたのお背中はこの汎島 心が必ず守つてみせますつ  
心中そう叫んだシンの視界に、桃色につゝめく艶めかしい腰が揺れている。

「あ、兄貴つ。でもその服はあまりに短すぎではないですか！？」

そう。

洋一の着用しているピンクのワンピース風ナース服は、膝上15cmのタイトなミニであった。

自分の発した言葉が、男に対するものではまったくないことに、この忠実な付き人は気づいていない。

ため息をついたり顔を赤らめたりと、忙しい両面相をしながら、あくまでこつそりとシンは一代目をつけ回すのだった。

悲しい事実ではあったが、その姿は平成の世では、「ストーカー」と呼ばれる。



「ねえ。あんたってめつちや強いけど、武道かなんかやってたわけ?」

お惣菜コーナーで、あつたけのお弁当を買つて物かごに投げ入れながら玲がたずねた。

「ん~っ、剣道と空手は学生の時にちょっとやつたけど……

あ、あと母さんに教えてもらつたのとかもか。…………てかちょっとーーその「あんた」ってこのやめてくんない?なんか感じ悪いから

棚に並んだ酒瓶を押してこるパンの中に呂を落しながら洋一がこたえる。

「ああそうね」と初めて気がついたような顔をして、玲はうーんとうなつて考え始めた。

「せめて苗字で呼んでもよなつ」と洋一はプリプリしながらパンを押すと、今度はおつまみコーナーにある物をカゴくと落としだした。

「あーー、ペンネームじゃないけど、女装のときだけ女の子の名前にするってのどう?」

「声でけーつて!」

シーツと人差し指を口に当て、あわてて注意する。

だが玲はまったく気に留めず、自分の思いつきに没頭していた。

本当にシンと同じ遺伝子を持つて生まれたのかと疑いたくなるくらい、玲は血口中心的に洋一にふるまつていた。

洋一で玲のために断つておくが、じつこう態度は洋一に対してもみ

であり、高校生なのに半ば社会活動をしている彼女は、必要な場面ではいくらでもお淑やかに、そして女らしくふるまえるのだ。ただし、本性は今、なのだろう。

「あ、じじみの干物！」

洋一が喜んで見つけた獲物を手にしたといひで、玲がすつとんきょうな奇声をあげた。

「凛花・・・・・ そつコンカにしょー 女装の時の人たちは凛花ね、きまつーつー！」

「だから声でけーつてばー！」

「リンカネー シヨンからひらめいたのよ。あ、そつこつてもバカなあんたにはわかんないよな、凛花？」

そういうわれてもどう答えていいかわかりはしない。

ただものすごくバカにされているのだけは感じて、頬を膨らませてそっぽを向いた。

「あーっ、なんか急に親しみ湧いてきちゃつたあ。ねつ、凛花っていいネーミングだと思わない？」

自分の後ろにまわって、肩にあいをのせてくる玲を適当にあしらしながら、洋一は考える。

「- - - - - 凛花かあ・・・・・ 母さんの凛つて字がはいってるなあ

もつ一度訂正しておくが、彼は世に言つマザコンではない。もつとも、違ったケースではあるかもしねりないが。

いつの間にか考える洋一の胸元に潜り込んだ玲が、ナース服に付いたネームプレートに「凛花」とペンで書いているのに気がつき、その頭をはたいた。

にらむ彼女の頬をネイルを施した爪で弾いて、洋……これからは女装時は凛花と呼んでやろう……は微笑んだ。

凛花の顔をじろーんとした目で下から見上げながら玲がいった。

「ねえ……凛花って男の子ともエッチできるの？」

ポツと凛花の顔が赤くなる。

いつたい何を言うのかと思つて玲をよくよく見ると、なんだかこの子の顔もほんのり赤い。

「あっ！　あんたお酒のんでもるー？」

「うふふふう～　あつたりい！」

くきくきと凛花の髪を撫でながら、玲が笑顔でそうこたえる。

実は、女装ルームで彼がメイクを落としにバスルームへ出たり入ったりを繰り返しているとき、退屈した彼女は、凛の酒コレクションに目をつけて、それらをちょびちょびと味見していたのだ。しかもセレクトされた酒は、ことじとくアルコール成分の高い蒸留酒であった。

「あはははは、酔つてこんな感じなんだ。なんかきつもちいいつ！」

「ね、ねえ大丈夫なのあんた？」

「もつち、いけるわよー！」

凛花の目にはとてもそうは見えなかつたが、玲は元気よくそつ答える。

そういうわれると主導権を握られているし、女装名・凛花とまで贈られた手前、やからうことができない。

「とりあえず出ましょ」  
シブイ顔になつてレジへむかうと、支払いを済ませてスーパーを後にした。

両手に大きな袋を提げて、颯爽と歩く桃色ナースと少女のペアは、深夜と言えどもかなりの注目度であつた。

ヤバいなあ。高校生といつしょじやポリとか職質かけてきそう・・・・・。 ハラハラする凜花の気も知らず、彼女は上機嫌で鼻歌をうたいながら、大手を振つてついてくる。

警戒のため、切れ長の鋭い目を辺りに配つていると、玲が持つている袋の中に手を突つ込んで、ヴェフィータジンの瓶を引っ張り出した。  
あつと思つたが、すでにこの娘はオヤジのようにラップ飲みして、「ふつはあ～つ」とかやつている。

「ちょっとあんた！高校生なのに飲みすぎだつてば」  
自分は中学の時から飲んでいたことを棚に上げて叱る凛花を横目で  
じろりと睨んで玲はいう。

「うひー、凛花ー」その「あんた」ってのやめてよね。玲つてちやーんとした名前があるんだから。だいじょひぶだつて。うちの家系はお酒強いんだから」

「ふつは～あ。　お酒つて味ないけどなんかたのしいね。てかさつ  
きの話のつづきなんだけど、あの夜にさ、ナイフ投げてやつづけて

たでしょ。あれも武術かなんかなの？」

「ああ、あれはナイフじゃなくつて小柄ね。」こね 剣の武士とかが使つてた、日本刀を小さくしたようなやつ」

「へえ、じゃ、あれは剣術かなんかなんだあ」

「うーん・・・・まあそんな感じ？ 母さんの家が代々受け継いでる古武術ね」

急に玲の目が輝きを帯びた。

「おおっ！ ジャ忍者かなんかの末裔とか？ 凜花のお母さんつ家つて」

「忍者つて・・・・映画じゃないんだから。やつじゃなくて、室内で戦う為の術つて言つてた。母さんは一度に十本あやつれるけど、あたしはまだ五本がせいぜいだけだね」

「わあ！ ジャあじやあ今夜もなんかあつたらまた見れる？」

「だーめ。あれはほんとはあんまし人に見せちゃいけないものなのでか玲。あんた騒ぎになるの喜んでない？」

きつい目になつて睨む凛花に、ふるふると玲は首を横に振つてみせる。

そんなことを話してこるつり、地下街の入り口が見えてきた。

重い袋をよいしょとゆすりあげて、一人が階段のところまで来た時、横合いから和服の女がすっと姿をあらわした。

ぶつかりそうになつたのを双方で避けると、女は小腰をかがめて会釈した。

その顔を見て凛花がうつとうめぐ。

-----あ、綾乃！

おもわず口にしそうになつて、あわてて手でふさぐ。

そう、彼女は洋一の愛のハーレムを構成している一人。  
この街ノ。1の夜の蝶、綾乃であつた。

年は29歳と少々高めだが、抜群の肢体と静かな知性を併せ持つ、  
女帝といったオーラをまとう女人である。

「可愛い綺麗は当たり前」のこの世界で、男はもちろん何人もの女性から「姉さん」と慕われ尊敬されている彼女には、洋一だけなくシンも一目置いていた。

目の前でフリーズしているナースに、綾乃は少し不審な目をしたが、そこは夜の嗜みですぐに温和な笑顔に戻ると、もう一度丁寧な会釈をして歩き出す。

そんな二人を交互に見ていた玲は、去つて行く綾乃を見ながらささやいた。

「知つてる人なの？」

「あ、ああ・・・・・まあな」

言ひよどんでいるし、男言葉に戻つてもいたので、これは彼女かなんかだと察した玲が、ふーんとうなる。

「まつ、バレなくつてよかつたじゃん。あたしの言つたとおりつしよ？その姿なら誰もヤグザだつてわかんないつて」

「しーつ、声でけーつて！」

小声で注意してから、凛花が早く立ち去りつと階段に足をかけた時、  
背後で

「あの・・・・ちょっと失礼」と涼やかな声がした。

ぞくりと立ち止まる背中に、とべりとしたおだやかな口調の言葉が降りかかる。

「どうかでお会いしますよね？ ちゃんと」と挨拶もせず、じつも失礼しました」

「や、ヤベえ！ 声を出したら綾乃は絶対に俺だと見破るだろ？ じ、じつしよ…？」

脂汗を流す凜花に、道を引き返してきた綾乃がゆりへりと歩み寄つてくる。

「お召し物でわからなかつたのですが、お店以外でお会いしますよね。すみません、お顔をもつ一度…」

『いえ、あなたのお部屋で何度も』と凜花はおもつたが、そんなことは言えるはずがない。

もはや絶体絶命かと思われた瞬間、いきなり横からヴィィフィータジンの瓶が突き出されて、凜花のわき腹に深く埋まつた。

『…？』

なんとかうめき声はけらえたが、痛みに身体がくの字に曲がる。

「…な、なにすんの玲…？」

かがみ「もつとした彼女の腕を荒くつかむと、玲は大きな声で叫びだした。

「このインランお姉！ よくもあたしの彼氏に手えだしたなつ。毎回毎回、人の男に色田ばつか使いやがつて、このエロ女！」

眉を吊り上げて突然怒り出した彼女に凜花は一瞬とまどつたが、すぐここにはこの場をまかすための演技だと悟り、とりあえず「この娘に任せることにした。

綾乃から顔をそむけて「わき、恥じ入るような悲しげのような表情を作つてみせる。

容赦の無い一撃による痛みも、この両脚に一役買つていた。

「あたしがちょっと部屋を空けた隙に、彼氏とあんなこんな桃色三昧！うーん、ゆるせん！ あれだけやつといてあたしが気がつかないとも思った？どうせまたそのエロいコスで誘惑したんだしょ。ちよつとこいつちきなさい！ 今日この決着つけようじやないの！」言い終わると玲はぐるりと綾乃の方へと向きなおり、

「とにかくと、どこのどなたかご存知ありませんが、あたしたちは取り込み中ですので、これで失礼します」

そう一方的にまくしたてた後、ペニツトお辞儀すると、凛花の腕を引っ張つて足早に歩き出した。

「このバカ姉！コスプレ好きのヘンタイ！それからえつと……尻軽女！」

思いつく限りの罵詈雑言を口にしながら、風のようになつて行く玲と凛花の背中を見送つて、綾乃はその場に立ち去つていた。しばらくそうしてポカーンとしていたが、やがて我に帰ると、「あらあらまあまあ」などとつぶやきながら動き始めた。

数歩行つたところで一度足が止まり、うつむと笑つたような気配がしたが、それも一瞬のこと。

綾乃はまたいつも優雅な足取りに戻つて、店への道を歩み始めた。



結局その夜はそれから何事も起ららず、中央公園の一角に住んでいた人たちのところを訪れて酒や食べ物でねぎらうと、そのあと大宴会となり終わった。

翌日の中後まで眠つてから、洋一はこつものようにタタ方に組事務所に顔を出した。

自分のオフィスへと行こうと足を進めていたら、せつと横合からシンが出てきて耳打ちする。

「おはようございます兄貴。……綾乃姉さんがお見えになつてます」

「え？」

「お部屋の方にお通ししますので」

「…………」

なんの用だ、とは思わなかつた。

「…………このタイミングでやつてきたといつては…………」

ダラダラと洋一の顔に黒い幕が下りてきた。

その顔を、昨夜の一部始終を見ていたシンが、痛ましそうな目をして見つめている。

「…………兄貴…………お可哀想に。玲の奴、もつといまい誤魔化し方はなかつたのかつ

「…………」が妹を恨んではみたが、綾乃と洋一の双方に顔を知られていいので出るに出られず、物陰で一人やきもきしていた自分にその資格は無いと悟つて、口を強くつぐんだ。

がちゃりとドアを開けると、デスク前のソファーに腰掛けた綾乃がこちらをむいた。

昨夜とは違つて、落ち着いた菖蒲柄の和服をじでけなく着ていた。すばやくいつもの爽やかな笑顔を作つて声をかける。

「おひ、綾乃、めずらしこな、事務所に来るなんてよ」

「おひさしふりね、洋ちゃん。ずいぶんとじ黙沙汰だつたから、ちよつとのぞきにきたの」

とろりとした声と笑みを浮かべて彼女が答える。だが言葉の影には、ちくつヒトゲがあった。

「…………なーんだ。最近連絡してなかつたから、いやみ言ひにきただけかも

少し明るい気分になつて、洋一は彼女の向かいに座ると、煙草に火をつけた。

『あれ、そういうえばシンガいないな』と思つてみると、綾乃の声がした。

「……のところとも顔を見せてくれないから、てつきりあの真子とかいう子のところかと思つてたけど…………」

顔を何かチクチクとしたものが刺してきたが、百戦錬磨の彼はいつもに動じず、さてなんと言い訳しようかと余裕をもつて考えていたところ、すう一つと幽霊のように次の言葉がきた。

「まさかあんないたして遊んでたなんて…………」

煙草を口にしようとしていた手が止まる。

そんな彼の変化を楽しそうな表情で眺めながら、おつとりとした口調で綾乃はつづける。

「眞づいてないと思つた?」

「え、なんのはなし?」

「あらあらおとぼけ?おつまみます」

口に手を当て、上品に彼女は笑つ。

「かわいく化けてたわよねえ。こつしょにいたあの娘の仕業かしら? でもこの綾乃の皿をあんまり安く見てもらひちゃ困ります」

「・・・・・」

「何度もこの肌で感じてきた、洋ちゃんの顔と身体ですもの、すぐにつかつたわ」

そつこつて白い指を和服の袂に揃えてみせる。

やがて固まつてゐる洋一の腕へと手を伸ばすと、煙草を奪つて自分の口に含み、うなづいて皿を細めて煙を吐き出した。

「まあ、他の子のところひじやなかつたから安心したけど・・・・・・」  
「あ、とああいつことなつた事情を聞きたくつてこいつして顔を出しました」

にこじと妖艶な笑みを浮かべて足を組む。  
裾から美しい足がこぼれて、それがさらに凄まじい色氣を醸し出した。

「話してもらいましょうか・・・・・」

柔らかいが拒否は許さぬ口調だった。

洋一から奪つた煙草を吸い終えた綾乃是、西陣織の巾着からセーラムのメンソールを取り出すと、しなやかな指で一本つまみあげて火をつけた。

爽やかなミントの煙が二人の間をゆっくりと漂い始める。

5分、10分

洋一は『シンが現れないか』とか『電話が入つてこないか』とか期待していたが、一向にその気配は無い。

「えつと、ちよつとこれから仕事が……」

「今日の予定はシンちゃんから全部聞いてます。急ぎの仕事が無いつてこともね」

言葉を途中でわえぎつて、綾乃是さらりとそういった。

15分、20分。

一人の周りはまるで時が止まっているかのように、物音一つ聞こえてこない。

「そだ！ コーヒーでも飲みながら……」

「大丈夫です。話が終わるまで誰もこの部屋に入らない……。電話も取り次がないように頼んでおきました。あ、そりそり。携帯は切つておいてね、洋ちゃん」

「……」

25分、30分。

じれる洋一とは対照的に、どんどんと綾乃の腰はすわってゆく。

事がはつきりとするまでこの女は千年でもここにこうして座つていそうだ、そう錯覚してしまうほど、堂に入った居座り、ぶりであった。

そして一時間が経過した。

洋一は自分の煙草を吸いきつてしまい、灰皿に皿を落とす。そこにセーラムの吸殻は2本しかなかつた。

フィルターに口紅の跡を残さない、たしなみのある吸い方に感心しつつ、テーブルに置いてあつた彼女の煙草の箱にそろりと手を伸ばしたら、華奢な指が箱を上から押えた。

おもわず見上げると、そこにはにこにこと微笑む綾乃の顔。

「話が終わつてから・・・・ねつ？」

洋一はまたがつくりと顔をうつむけた。

ふうーつと息を吐いて、彼女は困つたような顔で、最後の追い討ちをかけた。

「それとも・・・・雄五郎さんに聞いた方が早いから」

なぜか自分と仲の良い老極道の名を口ずさんで、くすりと笑う。

完敗であつた。

かくして洋一は誠に不本意ながら、己の女装癖を綾乃に白状することになった。

他の彼女たちならいざ知らず、綾乃にはどんな言い訳や色仕掛けも通用しないことを、彼はよく承知していた。

この街ノ〇一の称号は伊達ではないのだ。

全てを聞き終えた綾乃は、へんな大汗をかきながらつむく洋一を前に、「ほほほ」と楽しげに笑つた。

「洋一ちゃんはいすれこんなことになるんじゃないかって思つてたけど・・・まあゲイとかバイージゃなくつてよかつたわ」そして今度はいたずらっ子の目になると、

「アリーニーとなら、この綾乃も協力させてもらいます。今度はもつとつまぐれ、もつと綺麗に化けさせてあげるわ。おーっほほほほほほ」

そつ高らかに宣言すると、手の甲を口に近づけ、甲高い声で笑い出した。

えつという顔をする洋一を見つめながらまたいふ。

「なかなかうまく化けてたけど、まだまだよ。やつぱり高校生くらいのキャリアじゃ、まだあのくらいのもんよねえ。でも大丈夫。今度はこの綾乃がお手伝いするから。本当の女つてものを魅せてあげるわっ！」

また口に手を当てて笑い始めた彼女を見ながら、『ここ、本当は玲に対抗心燃やしてるんじゃないか？』と疑つ。

しかしぬつから次へと自分の秘密を知る者が増え、そしてその人物たちがことごとくその秘密を大きくしていっているような気がしてきて、洋一は身震いした。

玲といい綾乃といい、彼の女装癖を叱責せず、かえつて煽るようこそに参加しようとしているこの一人。

実は彼女たちも普通ではなかつたのだが、またやつてきた新しい厄災に怯えるこの男には、それがわからないのであつた。



それから綾乃に半ば拉致され、女装ルームへと行かされた洋一は、やがてやつてきた玲と彼女を引き合わせた。

なんとなくこの一人は合わないだらうなと思つていたが、案の定、玲と綾乃是すぐに角を付き合わせ始め、洋一を氣まずい空氣の中に叩き込んだ。

ナチュラルで可愛い路線を主張する玲と、艶やかで色氣のある大人を演出しようとする綾乃が真っ向から対立して、田の前で争つている。

「ああ、もーつ！」これだからお水の人はダメなんだから。凛花は元の顔がケバいんだから、もつとかわいい感じにしなきゃいけないんです！」

それに対して綾乃是、洋一と同じくらいの上背から、田を細めて玲のことを見下ろしてこたえる。

「ほほほっ、世間なれしてるとつでも玲ちゃんはまだわかつてないのよねえ。いい？洋ちゃんの濃い色を逆にもつと引き出して妖艶な風にしないと。だつてその方が話題性も高くなつて、あなたも記事にしやすいでしょ？」

「元に笑みを浮かべたままおつとつとした声で話す彼女に  
「おい、それマズイつて」

と洋一は突つ込んだが、綾乃是それを一瞥だにしなかつた。黙り込んで考え出した玲に、勝ち誇った女帝はさらこ疊み掛ける。

「『コンセプトは天女さまなんでしょ？ だつたら可愛いだけじゃだめです。もつとこいつ、きらびやかで気高くないと」

「・・・・・そもそも女装好きのヘンタイで、世間のつまはじきのヤクザに気高さを求めるのがまちがつてると感づつた」

「あらあら、それじゃあコンセプト自体の変更を考えなきゃね」

ふてくされた玲の言葉に、綾乃是形の良いあごに指を当て、真剣に考えはじめた。

どうも基本設定から自分が考えて、一気に主導権を握りてしまつとこつもくろみらし」

すぐにそれを察知した玲が、わざとらしく壁にかかつた大きなっぽの古時計に手をやつづぶやく。

「まひ、綾乃さん。もう仕事の時間ですよ。」こつはあたしにまかせて安心してお店にいってね」

コンマ3秒、綾乃の眼がギラリと剣呑な光を帯びたのに、洋一だけが気づいた。

「あらあらまあまあ、それじゃあ今日のところは玲ちゃんにおまかせするとして、私はちょっと行つてきますね」

口調は相変わらずとろつとしていたが、言葉に鋭いトゲを残して、彼女は微笑みながらソファーの脇に置いてあつたバッグを取り上げようとした。

身体を傾けて拾い上げる瞬間、そこに座っていた洋一にだけ聞こえる声で早口にひたすら。

「いいこと？ この娘の言ひなりにならやだめよ。もしさうなつたら・・・・・わかつてるわよねえ？」

剣刀を首に当てられたようにビクツと背筋を伸ばした洋一にかまわず、綾乃是口に手を当てて「ではではまた」などと言つて部屋を出

て行つた。

キツと玲が怒つた顔を洋一に向ける。

「ちょっとあの人なんなのよ、もー！横から急に口はさんできて、  
言いたい放題の狼藉三昧！ 腹たつな」

「…………こないだから思つてたんだけど、おまえってちょい時  
代劇はいつてるよな、しゃべりが」

「うつせー！好きなのよあの言い回しがつ。女子高生が時代劇ファ  
ンで悪いの？」

「悪かないけど…………」

「そうじゃなくって、あの人なんとかして！」

「ムリそれ。だつてバレちゃつてるから、そんなことじつどし  
たら綾乃の奴は速攻で組中、いや街中にバラして回つやつし。そ  
うなつたら俺アウトだし」

「チツ、ヤクザのくせにだらしないわね！」

同じことで洋一を脅迫しているくせに、それを棚に上げておいて玲  
は舌打ちするとにらんできた。

それを無視して、洋一は煙草を取り出して火をつけると、プカーッ  
と煙を吐きながらたずねる。

「で、今夜はどうすんだ？」

「あんたはどうしたいのよ？」

その言葉を聞いて、ジーンと恥骨にあの甘い痛みが走つた。

「は、うーん…………」

おもわず変な声がもれて、あわてて洋一は玲から顔を背ける。

・・・・・ あの夜から恥骨の奥がおかしい・・・・・ てかなん  
なんだよこの感じは！？ 段々ひどくなつていつてる気がするし  
拳動不審な男に、玲が投げやりな口調でまたたずねてきた。

「でー、凛花さんほびひしたいの一、今夜は」

玲にはまだ、これはバレていらないらしい。

己の変化におののきながらも、洋一は恥骨の疼きから眼をそらすよう、今夜のチョイスを考え始めた。

実はその身体の変調は、ある意味でとても重要な変化の兆しだったのだが、今の彼にはそれに気づく余裕はなかった。

その頃、同じく自分の変化ことまじつている者がいた。

男は暗いワゴン車の運転席に深く身を沈め、険しい顔をフロントガラスに映している。

その鋭い眼は虚空へとそそがれていたが、外を見ているわけでは無く、己の内側へとむけられていた。

「ふう・・・・・・」

細く息を吐いて、ドリンクホルダーに置いてあつたおじる「コドリンク」の缶に手を伸ばし、一口する。

脳が溶けるようなこの甘さが男は好きだった。

だが『甘い』とこ「う単語が、男がわざきまで考えていたことを呼び覚ます。

目がちらりと助手席へとむけられた。

暗がりなのでよくは見えないが、何かスナップ写真のようなものがシートの上に重ねられている。

男は見てはいけない物に視線を走らせたことを恥じるよう、元気、あわててまた前を見た。

だが数分すると、またとなりを見てしまつ。

どれほどそれを繰り返しただろう。

やがて絶えかねたように、そつと左手がナビシートへと伸びはじめ、上にある物をつまみあげた。

汚さぬよしに慎重に自分の前へともうつてくる。

ハンドル周りにわずかに差し込んだ月明かりに照らされて、男が見てくるものがやはり写真であることがわかった。

そして、それを持つ手が震えていることも。

写真には、おどろいた顔でこちらをみている美女の姿が写っていた。

男の指が無意識に写真の美女の顔へ伸びる。

そこでハツと気がつき、伸ばそうとしていた指を拳に握つて何かに耐えた。

やがて食いしばっていた口から、聞き取れないほど小さく声がもれだした。

「メイド・・・猫耳・・・ナース・・・・・・ それは反則です

兄貴つ

そう、もつとおわからることだろう。男はシンであった。

そして写真の女人も予想通り、ネコ耳アリス、桃色ナースと女性化している洋一 凜花の姿だった。

なぜ自分がこの写真を見たくなるのか、シンにはわからなかつた。妹からこれを預かつた時までは、そういうことはなかつたと思つ。

「兄貴の女装お出かけの出待ち」という、普通の人なら情けなさで首をくくつたくなる状況の中、手持ち無沙汰で写真をながめているうちに、段々とそれはシンの心を浸してきたのだった。

そう思い起こしていくと、また写真をうつとつと見てくることだら

づいてシンは固まった。

そろりとバックミラーに手をむけると、そこには自分に一番似合わぬ顔があった。

ミラーに映っていたのは、だらしなく口元を緩めて微笑む卑猥な男の顔。

叫びたくなるような自己嫌悪に襲われて、きつく目を閉じる。やがて眼尻に浮かんでくる涙。

シンは泣いていた。

あまりに浅ましい今の己の顔を恥じて。

だが口は彼の本心を吐露した。

「凛花さん、かわいいつーーー！」

一人の男が甘い闇へと落ちた瞬間であった。

凛花と化した洋一のその夜のお出かけ服は、ハリウッド映画のスクリーンから抜けってきたような、海賊女王だった。

マンショントのエントランスに彼女が姿を見せたとき、シンは頭をハンドルに打ち付けてクラクションを鳴らしそうになつた。

頭にでっかいドクロマークの三角帽、そして足首まであるロングコートを太いバックルの皮ベルトでキリリと締めたいかめしい後ろ姿を見て、「カツコイ」としびれる一方で少し安堵した気分になる。微妙に頬を赤く染めながら、またドリンクホルダーに手を伸ばして微笑んだ。

「今夜は色氣のある格好じゃないんですね、凛花さん」

その口調はまるで、露出ファッショニ好きの彼女をもつてやきもきしている彼氏のようだったが、当然シンは気がついてはいない。だが、くるりと凛花が自分の方へ身体をむけた時、ぶほおーっとしる「ドリンクを吐き出した。

大胆に大きく前が開かれたコートからのぞいていたのは、膝上20cm以上は優にあると思われる、白いタイトなミニスカートだったのだ。

犯罪的なその短さは、ある意味、ネコ耳や桃色ナースより危険なエロティシズムを醸し出していた。シンの手の中で、罪の無いしる「ドリンクの缶がグキリと潰れる音をたてる。

「や、それは・・・・・ それは短すぎだよ凛花さんッ！」

わなわなしながら叫んてしまつた自分の台詞に、すでに女装時の洋一を兄貴ではなく一人の女性として認識し始めていることを感じて、シンは己の変化に驚きめた。

なぜなら言葉にも口調にも、田上の者に対する遠慮の部分がまったく無い。

赤くなつたり青くなつたりしながらも、とりあえず一人を追つべくワゴン車から降りた。

敏捷で動きもしなやかな彼が、ドアを開けるとき転がり落ちそうになつて車外へ飛び出したのは内緒である。

「ねえ玲。 よくもまあこんな服もつてたわね」

手をひょいと上にあげて、自分の着ているパイレーツクイーンの衣装をながめながら、半ばあきれた声で凜花がいう。

そう、今夜のチョイスは玲プロデュースだったのだ。

本当はボンデージファッショնに挑戦してみたかったのだが - - - しかもそれが凜コレクションの中に当然のようにあつた - - - わずかに恥ずかしくて言い出せず、その他の服をあれこれと選んで迷つていた時に、玲が自分のさげてきた紙袋から取り出してきたのが、いま着ているレディパイレーツだったのだ。

「学祭の舞台で演劇部が使つた衣装でよそうなの選んで持つてきつてあげたの。ほかにも軽音がライブで着た服とかもあるし」

くすりと笑つて玲がそうこたえる

造りはさすがに母の物と比べると雑でチープだったが、これはこれでなかなか新鮮だと凜花は思った。

「それと裁縫オタクが友達にいてね。凜花のことは内緒にしてこつそり聞いてみたら、費用と時間をくれて好きなイメージを描いてもつてくれたら、なんでも服をつくってくれるって」

「なんでもー?」

おもわずおつきな声をあげてしまつて、あわてて彼女はグロスで照かる唇に手をやつた。

-----なんでもって・・・・・・じゃあ、あんなのとかこんななのとかも!? うわっ、さすがにこれは大胆すぎかなあ

いつたいどんな服をイメージしているのだろう。

真剣に考えはじめた凜花を横目でみながら玲は話をつづける。

「とりあえず今夜は街のパトロールからいひつか」

「バトロール？」

「そつ。ケンカの仲裁、酔っ払いの保護、悪者の取り締まり、それって警察の仕事じやん」

ぽつりと突っ込んだが弱かつたのか無視された。

「じゃ、アーケードの端から端まで二つてみよー。」

玲が早足で歩きだす。

あわてて凛花はその後ろに付き従つたのだった。

はじめに彼を見つけたのは玲だった。

「あれ、あの子って凛花のお仲間じゃない？」

「そういわれて人気の少ないアーケード内を見回したが、ヤクザらしい男の姿は無い。」

説明が足りなかつたことに気がついた玲が、言葉を付け足す。

「仕事仲間じゃなくつて、女装仲間よ」

おもわずぎょっとしてあわててもう一度前を見ると、100メートルほど先を、少しうつむきかげんに後ろ手を組んでこじりこ歩いてくるメイドの姿がみえた。

「あつ、あの子こないだの……」

「え、こないだのつて？」

「あたしが初めて会つた女装っ子」

間違いないと思った。

現在は女装のおかげで記憶力・知性ともにメルトダウンしている洋一、凛花だが、あの女装っ子と出会つた時はまだまどだつたのだ。それにヤクザ稼業の基本は『人の顔、そして街の地理を覚える』なので、記憶は正確と思われた。

凛花＝洋一にとつて『運命の人』とでも言つべき彼は、二人には気がつかない様子で、ゆつくりと小柄な身体をこぢらこむけて歩いてくる。

「へえ～あれが凜花の女装癖の師匠なんだあ」  
妙に感心した風に玲がいつた時、とつぜん若い男の声がアーケード中に響いた。

「あーっ、マキマキみつけ！」

その大声に、あざ笑つような他の男たちの声がかぶさる。

そして、急に前を歩いていたメイドの彼が、つんのめつて石置の上に転んだ。

その後ろから姿を見せたのは、大学生かと思われる数人の男たちだつた。

顔をしかめて起き上がるつとある女装っ子の肩を、一人の男が突き飛ばしてまた転ばせた。

そいつがニヤニヤと笑つて話しかける。

「マキマキまだ女装してお出かけしてんのかよ。ほんと好きだね」  
口調はゆつくりとしているが、あきらかに転がつている彼をバカにしている。

どうもこの男に突き飛ばされて転んでしまつたらしい。

怒つているよつた怯えているよつた表情で、横座りのままマキマキと呼ばれた彼は、自分を突き飛ばした男を見上げていたが、「ほーんとマキマキは変態だよなあ、毎日こんななかつこいつでお散歩してゐんだからよ」  
その一言でうつむいてしまう。

男たちはそんな彼を取り囲んで、中腰になつて肩や顔を小突き始めた。

「ちょっと、あれ・・・」

玲が言い終わるより早く、凛花が前へと走り出た。駆け去る瞬間にその横顔を見た玲が身をこわばらせる。

初めて見る、真剣な怒りの表情。

ヤクザ顔にも驚かなかつた彼女が、その表情におびえた。

恐ろしいスピードで凛花は男たちに駆け寄ると、一番そばでかがんで女装つ子を小突いていた男の身体を、ローキックで吹っ飛ばした。

「うわあ！」

後頭部を狙つた容赦の無い蹴りに、男は一声叫んで床にのびる。もうそれにかまわず、彼女は次の男にむかつていた。

凛花の行動にあやうさを感じた玲が叫ぶ。

「凛花！ やりすぎちゃダメッ！」

だがそういうた時にはすでに、あと一人を残して全員石畳に転がつていた。

彼女の左手に光る物が出現したのを見て、玲が走つた。

「斬り刻んであげよつか、僕？」

ひどく冷たい声が唇からすべり出で、凛花 洋一はおどろいた。

「俺はなんでこんなに怒ってるんだ！？ たかがガキのじやれあいなのに

だがそのとまどいとは裏腹に身体は勝手に動いて、顔をゆがめて逃げ出そうとした男を足払い転がすと、咽喉にブーツをめり込ませて締め上げていた。

怯える男を見下ろしている内に、またあの熱いものが恥骨の奥に宿

り、身震いするほど の快感と共に急速に成長してゆく。

だが今夜はその成長に比例して、今までに無かつた、強烈な暴力への欲求が高まつてくるのを感じた。

「凛花ッ、ストップ！ そこまで！」

玲が自分の目の前でそう叫んで手を広げたので、ハッと我にかえつた。

ゆつくりとブーツをどけると、転がっていた男は悲鳴をあげて逃げ出した。

「もお、やりすぎだつて！ あんたが悪役になつたら記事になんないじゃんっ」

ふりふりと玲は怒つたが、すぐに座り込んでいた女装っ子に声をかけた。

「大丈夫？ なにあいつら、知り合い？」

肩に手をかけて優しくそつたずねる玲に、恥ずかしそうに彼は顔をそむけた。

「とつあえずまたあいつらきたらいけないから、送つていつてあげる。さつ、立つて」

手を貸して彼を立ち上がらせた玲が、凛花を見た。

彼女は呆然とした顔で、小柄をしまつのも忘れて突つ立つてゐる。

「ちよつと凛花、どうしたの？」

その声にはつと身を震わせると、玲の方を見た。

「なんでもない……」

だがその表情と声に、玲は凛花の異変を感じた。

鋭いこの娘にしてはうかつだったが、これが明確に出た女装時の洋一の異変だったのだが、まだ若い玲には、その異変の意味を理解することはできなかつた。

だが後ろ隠れて見ていたシンだけは、その異変を正確に察知していた。

凛花が男たちにむかって走り出した瞬間から、その姿に恐るべき殺氣を感じていたのだ。

それはヤクザとしての洋一の時にも無い殺氣。理由まではわからなかつたが、シンは危険を感じて、いつでも止められるように構えていたのだ。

----- 凜花さんになつてゐる時の兄貴には、なにか負の変化がある

玲に止められてすぐに攻撃をやめたことにほつとしながら、変化の意味を解こうとしたがわからなかつた。しかし胸に刻んで忘れないことにした。

その変化が、洋一の身に何か良くないことを起こしそうな予感がしたからだつた。

シンが物陰でそつやつて考え込んでいた、女装子らしき少年を先頭にして、凛花と玲が動き出すのが見えた。

思考をそこで中断して、ふたたび追跡を開始する。

三人はアーケードをそれで裏通りへと入つてゆく。

どうやら少年を保護して家まで送り届けてやるよつと見えた。

とりあえず急な出来事は起こりそうにない、そう判断して、ほつと

緊張をといた。

彼らの後を追いながら、今のうちにもう一度さつきの洋一、凛花の異変のこと考えてみることにする。

あの時の凛花から放たれていた殺氣は、「半ば本氣だった」そうシンは思う。

洋一の付き人になつてから、ずっと彼のことを観察しているが、さつきみたいな危険なものは、まだ一度たりとも感じたことはない。組長代行という立場の人間なので、直接自分で手を下すことなどありはしないが、やはりヤクザであるから、怒氣を発することはよくある。

シンはその執事的な洞察力で、他人のあらゆる感情を察知し、そして見分けることができたが、そのカンをもつてしても、今までの洋一からあるように剥き出しに近い殺氣など感じたことはなかつた。しかもそれを発した対象は、別に恨み重なる奴とかでもない。

殺氣も気になつていたが、シンはこちらの方がもつと問題だと思った。

どう表現したらいいのかわからないが、それは制御の効かないとも危ういものに思えてしかたがなかつたのだ。

……どうも気になつてしかたがない……後で玲に

あの時の凛花さんの様子を詳しく聞いてみよ

そう考えて、前を行く三人にまた意識を向け直した。

アーケードのある繁華街より少し北の方角。小高い丘を越えて下つた辺り。

大学や大きな病院が立ち並ぶ区画の中に少年のアパートはあった。その一階にある彼の部屋に玲と凛花はいた。

別に招かれたわけではなく、女装子という者に興味をもつた玲の記者スキルがまた発動して、半ば押しかけ気味に乗り込んでしまったのである。

しかしそこは彼女の期待していた、ズラリと女物の服が並ぶ魅惑の部屋ではなく、男にしてはきれいに整頓された普通の一人暮らしの部屋で、少しがっかりとしてしまう。

まあ落胆の理由は、凛花の女装ルームを初めに見てしまっている、というのが大きかったのだが。

女装子さんは自分のことを、みやびの 雅野まさき 真紀と名乗った。

「名前まで女の子みたいね」

玲の口から率直な言葉が音速で飛び出し、となりに座っていた凛花が彼女のわき腹を肘でつつつく。

「はい。 そうなんですけど、それ以外でも僕は小さい時から女子っぽくて…… それでよくいじめられてました」  
丸いガラステーブルをはさんで座る二人の前で、正座して話し始めた真紀は、そういうて少しうつむいた。

「女の子の服や持ち物が気になつたりと、僕も前からヘンだなつて自分で感じてたんです。それが大学に入つて一人暮らしをするようになつて、その思いが段々と我慢できなくなつてきて」

「で、ついにやつちやつたと」

真紀の言葉を引き取つて玲はそつこつと、ふーんとあらためて田の前の男をながめた。

身長ギリギリ160cmの自分と、同じくらいの、小柄で細い体型をしている。

メイクで本当の顔はよくわからないが、キリッとしているとか男らしいとかではなく、優しいユニセックスな顔立ちなのだろうと思う。着ている服やかぶつているウイッグは、凛花が身に付けている物と比べたら、全然お話にならないくらい安物に見えた。

・・・・・ まつ、凛花は特別なヘンタイだもん、比べちゃこの子がかわいそうだわ

じろつと横目で玲が自分を見たので、凛花は居心地悪そうにモジモジとする。

「はじめは部屋の中で一人で楽しんでいただけだつたんですが、そのうちにどうしてもこの姿で外を歩いてみたくなつて・・・・・ それで思い切つて外出したときにはこつらに見られてしまつて・・・ それから余つたびにいじめられるよつになつたんです」

とつとつと語る真紀の話を聞きながら玲は、ほぼ同じ経過をたゞりて女装化した凛花の方にまた田をむける。

・・・・・ いの真紀つて子には同情するけど、なんで凛花には

そういう感情がまったく湧かないのかな、あたし  
それは凛花に変化していない時、すなわち元の洋一に、「可愛げ」  
とか「か弱さ」とかがまったく無いのがそう思つ理由だったが、ヤ  
クザの一代目を一時的に支配下に置いていいるこの女子高生は気づく  
はずが無い。

「でもさつときは助けてくれてありがと「さこました。最近あいつらのやつてくることが段々ひどくなつてきてたんで……ほんとはさつさもすじく慰かつたんです」

真紀はわざわざテープルから離れると、深々と一人に頭を下げた。

「段々とつて、どんな風に?」

「あの……ちよつと女の子の前では言えなによつな……」

「言つてよどんでまたうつむく。

恥ずかしがつているのかと思つていたら、肩が震えてこる」と、気がついて近寄つてみると、真紀は泣いていた。

「見つからつたらひどい」とわれるのはわかつたんです。でも、どうしてこの格好で出歩くのをやめられなくつて。もう最近はこのままどつかに飛び込んじゃおうかつて……」

「ちよつと待つたつ！ そんなにひどい」とわれてるわけ?」

辛さなのか羞恥心なのかわからなつが、真紀は、ボトボトと涙をこぼすだけで、いじめの内容はこいつてくれない。

玲はさつと凜花のそばにすべると、耳にさわやいた。

「凜花、あんた聞いたげなさい。ほり、あんたおとい……

「ぱつと凜花が玲の口をふさぐ。

そして彼女の身体を抱え込んで玄関まで連れてゆくと、田を吊つ上げて怒つた。

「バツカー！おまえ口軽すぎだつて。いま言つてどうこなつたる？」  
口調がすっかり元に戻っている。

「つるさい！ てか今のあんたのしゃべり方でモロバレじやん  
つい正体を明かしそうになつたことは棚に上げて、玲は逆ギレして  
ブンツと横をむく。

「…………こ、こいつ…… 身内ならエンロの一本も飛ばし  
てるこじだぞつ。 絶対にこいつは俺の味方じやない！  
ワナワナしながらこつちを睨んでいる姿を見て、少しバツが悪くな  
つたのか、玲はあわてて話を元に戻した。

「それよつちやんと話聞いてあげなきやかわいそうでしょ？あたし  
じや言えないつていうんだから、あんたしかいないじやん  
「聞く必要ないつて。だいたいわかつから」

「えつ」  
おどろいた玲から顔をそむけると、嫌そつて言葉を吐き出した。

「ほら、あれだよ。性的ないやがらせつての？服を脱がすとかそん  
なの・・・・・・」

「・・・・・・」

「いるんだよ、そういう性根の腐つたガキがさ

本当はもっと酷いことをされているんだうつと見当がついたが、玲  
に遠慮してソフトに作り変えて話したのだ。

それでも彼女はショックを受けたようで、畠を見開いて固まつてしまつた。

やがて見ていいる畠の前で、玲の頬に涙が伝つた。

「ひどい・・・・・それはひどいわ

それを見て凛花 洋一は舌打ちすると、「だから言いたくなかったんだよ」と苦い顔でつぶやく。

だがいつまでもやつして涙を流している玲の姿を見て、いつものHセフュミーンがよみがえつたらしく、ガリガリとウイッグを黒い爪先でかき回しながら奇怪な声をあげた。

「わかったよ！ なんとかしてやりやいいんだだ？ やるよ、やりますわよ、オホホホホッ！」

やけくそで甲高くわめく言葉を聞いて、玲の瞳に力が戻る。そして凛花の腕をつかんで揺さぶつた。

「ほんと？」

「うん。まあ他人事とも思えないし」

「さすが凛花！」

そう叫んで笑顔でハグしてきた玲を引き剥がしながら、ふと嫌な考えが頭をよぎる。

………… 実はさつきの涙も仕掛け………… ことはないよね！？

しかしこの娘ならやりかねない罠だとも思ってしまう。

その戸惑いこそ、玲のことをイマイチ信用しきれていない証であつた。

少々早まつたかなとも思ったが、大学生の一人ぐらいにバレても、いざとなればなんどもできると考え直して、玲と一人でまだ泣いている真紀のところへ戻つた。

「少年。ほら、泣くなよつ。俺がなんとかしてやつから」

突然聞こえてきた男の声におどろいて、真紀が泣くのをやめてきよ

とんとした顔で見上げる。

「え・・・男の・・・人?」

「ぐりとうなづいたのを見て、ポカンと口を開けた。

「気がつかなかつたです・・・きれいな女人の人だと思つてました」

「そう? ありがとう」

今度はちゃんと洋一 凜花に戻つて、妖艶な笑みを浮かべて笑つてやる。

まだ田を白黒させている真紀の前で、仁王立ちになつて腰に手を当てた玲が叫ぶ。

「真紀くん、あたしたちにまかせといて! 世のため地のため人のため、街の悪党はこの戦闘天女が許しておかぬつ。さあ凛花、あんたの出番よ!」

「・・・・・だから時代劇入り過ぎだつて、それ」

だが今回も凛花=洋一のぼやきは、やはり玲の耳には届かなかつたのであつた。

結局その夜は、真紀の部屋で女装お散歩・・・・いや、玲の言う天女活動は終わつた。

詳しい話は次の夜に凛花の女装ルームで聞くことにして、三人は解散すると、それぞれの場所に帰つて眠りについた。

翌日。

いつものように夕方に事務所へと行き、一時間ほどヒマをつぶしてからそこを出た洋一は、夕日に照らされたビルの前で大きく伸びをした。

「おつかれさんしたッ、一一代目！」 「お疲れさんッス！」

男臭さMAXの声に見送られながら、煙草を口にくわえて「ああ、女装ルームへいくか」と微笑んでいたら、

「りーんーかあああああああつ！」

といつ明るくでつかい声がして、ブツと煙草を吹き出した。

声がした方にさつと目をむけると、女子高の制服である紺のブレザーワンピースの玲が、満面の笑顔で手を振つてこちらに駆け寄つてくるのが見えた。

洋一はすばやく背を向けたが、むこうの足の方が早かつた。

「代田の手をとり、子犬のようにまとわりつく女子高生を見た見送りの組員たちは、その光景に度肝を抜かれて、それぞれの表情で固まつた。

とりあえず逃げるしかないと判断した洋一は、自分にじやれつている玲を引きずりながら、早足で組事務所を後にした。

唖然としていた男たちの一人、中堅組員の狂介は思った。

「代田ってなんでもアリなんだな……いいな別な意味でそれは的中していたのだが、狂介にわかるはずもなく、仲間といっしょに夕田の中で立ち廻くのであつた。

事務所が見えなくなつた時点で、洋一は玲の頭をわきの下に抱え込むと、小声で叫んだ。

「てめエ、絶対わざとせつてんだろ、あア？ 秘密守る氣なんか全然ないんだろ？ 俺を破滅さす氣かこのやうつ！」

楽しくまとわりついていた玲は、手を放すとパンツと横をむく。

「だーいじょうぶだつて！ ちゃんと凜花つて呼んだし。わからないつてばあ」

「おまえが俺に引つついてきた時点でおかしいんだよつ。 てかなんで組まで追つかけてきてんだ！」

「ああ、真紀くんいっしょに迎えにいこうかと思つて」

この娘の妙にズレたフレンチコ―感覚につこひゆけず、洋一は頭を抱え込んだ。

そんな一代田の姿を、玲は不思議そうな顔をして見てくる。

「…………あのなあ。ちつとは俺の立場つての考えてくれよ。  
…………」

力なくつぶやいたが、やがてあきらめた。

…………こいつは悪氣なく人をドツボに落としてしまう天然小悪魔だ。…………おまけにちょっとマッドも入ってる。へたにいりねえこと言えば、ますますこいつの隕にはまるだけだ

己の超弩級の変態ぶりを、成層圏の彼方まで吹っ飛ばしてのあまり評価だったが、あながち間違つていないので恐ろしい。

当の玲はといえば、もう先ほどのことなどすっかり忘れて、にこやかに笑いながら歩いている。

なるべく離れてその後ろをついてゆきながら、洋一はどうすればこの娘が持つてくる厄災から逃れることができるのかを真剣に考えるのだった。

同時刻。

真渦 雄五郎は紅椿一家会長の屋敷にいた。

おそらく広い、四十畳はあるつかとおもわれる座敷の隅に端坐して、彼は背筋を伸ばして目を瞑っている。

開け放たれたふすまからは、見事に生い茂った松と大きな池が見えた。

街中にあるといふのに車の音ひとつ聞こえてこないのが、この屋敷の広さを物語つている。

ただ、無音という訳ではない。

かすかだが、この端正なたずまいの空間に不似合いな、荒い女の嬌声がしていた。

それが聞こえているはずなのに、雄五郎は顔色も変えずじつといふ。

やがてひとりわ高く甲高い声があがつたかとおもうと途絶え、しばらくたつてから、髪の薄い色白で小太りの男が座敷の中へと入ってきた。

趣味の悪いベージュのガウンを着込んだ男は、上座までゆくと、遠慮に置の上にごろりと身体を横たえた。

雄五郎は、ガウンからむき出しになつた毛脛をがりがりと搔くその男のそばににじり寄ると、野太い声で話し始めた。

「会長のお言葉を若に伝えてきましたが、納得していない様子でした。それにここ最近の若を見ておりますと、どうも稼業のことを嫌つているように思えてなりません。今はまだ大丈夫ですが、いずれ二代目となられるお方があのよつに腰が据わっておられぬのでは、少々心もとなく感じます」

言ひ終えた後、じばらくは静寂が座敷の中を支配していた。

やがて紅椿一家会長・義隆は、煙草を取り出すると、口にくわえて火をつけた。

ふーっと煙を空へと吹き上げ、その口から、妙にねばりつゝような声をだした。

「ヤクザ辞めたそつなんか?」

一拍おいてから雄五郎が答える。

「はい会長。この日にはそつみえました」

眠そうな日が雄五郎の顔を見た。

ある種の両生類をおもわせる、ぬめりとした眼だった。

「墨、入れたれ」

口の端に煙草をくわえたまま、畳に灰を撒き散らしながら言葉をつづける。

「カタギなんぞになれんよつて、立派な彫りもん背中にじゅわせた

れ

「・・・・・」

「そしたらちつとは腰も据わるや。 それでしまじゅわせた

「や」

義隆はそうじつて、鼻から煙を吹いた。

「わかりました。腕のいい彫り師をすぐ手配します」  
その場で一礼すると、雄五郎は一度も表情を変えずに座敷を去つて  
いった。

ひとつそこに残つた義隆は、ゆつくりと煙草をふかし続ける。

薄く細められた田は、丹精に手入れされた樹木に向けられていた。

深沈とした一時の後・・・・・

ペキッ

虫のやれやせやえ聞こえぬ無音の間に、何かを握りつぶす音がした。

無表情な義隆の手の中で、折れた煙草が白い煙をあげている。

次の瞬間に、それを庭にむかって投げ捨てるといづぶやく。

「・・・・・わしこなつかん可愛げの無いガキやが、まあやるこ  
たやつてもらわんとのオ」

灰を散らして立ち上がるが、また妻の下へとこぐために廊下に歩み  
出た。

義隆の背後で、庭に投げ捨てられた煙草がくすぶり、揺れる白い煙  
を立ち上らせている。

すぐそばを、大きな蛾がよたよたと横切るのが見えた。



洋一と玲が待ち合わせの場所であるアーケード西口に着くと、もつと真紀がそこにきて立っていた。

少し短めの黒髪をして、チェックのシャツにデニムとこ、普通の男の子の姿だ。

「真紀くーん！」

うれしそうに手を振つて駆け寄つてくる彼女に、真紀は自分も笑顔をみせたが、すぐ後ろにいる洋一の姿を見つけて顔をこわばらせる。玲はその変化にすばやく気づくと、短く耳打ちした。

「これ凛花だから。ヤクザだけど大丈夫、あたしがちゃんと管理してるからね」

うふふと笑うその顔をみながら、真紀は「ヤクザ」とこいつ葉に口をゆがめた。

「ほんとに平氣だつてば。ほら、こわくないし、これヤクザを物扱いして腕を組んでくる玲をあわてて振り払う洋一の姿をじつと見つめながら、『本当にこれが昨夜の綺麗なお姉さんなんか！？』と疑つたが、自分を助けてくれた彼女を信用して、歩きはじめた一人についていく。

ただその足取りはまだビクビクとしていたが。

だがマンショングリーンに着いて女装ルームへと足を踏み入れた途端に、真紀の心配は吹き飛んでしまった。

「わあーっ、すごい……」

感想が言葉にならない。

自分の持つている物とは数も種類も質もまるで違う、「凜コレクション」を田の当たりにしてしまったのだから無理はない。

見ていくつひに段々と田と仕草が女性化してきた真紀を見て、玲がおかしそうに笑う。

今は己の所有物となつていてコレクションを誉められ、洋一も満更でもなさそうな顔になると、ソファに腰を下ろして煙草を取り出そうとした。

その時、緋色の絹織りに菖蒲柄という、ド派手な和服を着込んだ玲乃が部屋に飛び込んできた。

彼女は場違いな若い男がいたので一瞬、おやつという田をしたが、すぐにきつととした表情になつて洋一の方へ駆け寄る。

「洋ちゃん。ちゃんと新しいコンセプトを考えきました。わたし

が思つて、やっぱりちゃんととした豪華なドレスを仕立ててヨーロッパの世紀末風でいきましょ。ほら、こんな感じで」

そういうつて玲乃がバッグから取り出して見せたのは、どう見ても「ベル薔薇」の漫畫本だった。

「・・・・・玲乃。宝塚じやねえんだぞ」

「いいじゃないの。天女なんかよりよほどちゃんとした設定よ」

そのセリフを耳にした玲の目が、コブラを前にしたマングースのように戦闘的な光を帯びる。

「じめーん綾乃さん。もつ天女活動はきのうから始まつちやつてるのー。ちょっとおそかつたね、あははっ」

あははとか言いながら、まったく目は笑つてなどいない。

しかもビリの聽いても、その口調には嘲りの要素が多分に含まれていた。

しばらく綾乃是玲を睨んでいたが、やがてその目が洋一に移される。

「ちよつと洋ちゃん。」これはどういふことかしら?「

『あれだけ釘を刺しておいたのに、それを破つてどうなるかわかつてるんでしょうね?』

と、その怒りの瞳は語つていた。

正確にそれを読み取つた洋一が、答えに窮して田を泳がせる。

突然勃発した争いに巻き込まれた真紀は、おどおどしながら三人を交互に見ていたが、危険を感じてきたので逃げ出そうとした。

「あのぉ・・・・お忙しそうなんで、また今度にします」

少しづつ玄関の方へと移動しながらそつそつと言葉に、綾乃が反応した。

「あら、あたしがいないうちになんか悪だくみでもしてたのかしらねえ」

「ちがうつてば! 真紀くんはあたしたちの仲間になつたのつ。それにこの子はこのおじさんの女装の師匠なのよー」

考へつく限り最悪の紹介をされた真紀が固まり、「おいおい、いつからチームになつたんだよ」と洋一は突つ込んだが、目の前の二人は聞いていない。

やがて綾乃のトゲを含んだ薔薇の目が真紀の方をむいた。

おもわずビクッと震えてうつむく姿を彼女は見ていたが、尖つてい

たその田が急に緩んだ。

そしてするすると彼の田の前までいくと、品定めをするよつと上から今まで遠慮の無い視線を這わせる。

真紀が身体をまさぐられるような居心地の悪さに耐えていると、突然ふわりと抱き寄せられて、よつとした。

「それじゃあ、あたしはこの子をいただきます。そして洋ちゃんなんかに負けない立派な女子にしてみせるわー！」

あまりな展開にさすがの玲もつこてゆけず、睡然とした顔をする。 - - - - い、こいつ。別に俺にこだわってたんじゃなくて、自分で好きなように女装させる奴がほしかつただけかっ！ さすがに付き合っての長い洋一は、すぐに彼女の真意を悟つて慄然とした表情になる。

いきなり凛花をも軽く越える無敵の美貌を誇る女人に抱きしめられ、あまつさえそのふくよかな胸に身体を埋められて、真紀はむせ返るいい香りにクラクラしながらもわけがわからずには混乱した。

「よく見ると可愛い顔立ちだし、洋ちゃんより素質ありそうねえ」 綾乃は艶然と微笑むと、しなやかな指でつるつと捕まえている少年の顔を撫でた。

「あ・・・・・」

いけない喘ぎが真紀の口から漏れて、洋一と玲がぎょっとする。 その声に、綾乃がちゅうと赤い舌を出して唇を舐めた。

「あらあらまあまあ、可愛い声で鳴くのねえ、ボーヤ。 そつだわ！ お化粧が終わったら別の事も教えてあげましょうね」 彼女の言葉に己のプライドをいたく刺激された一田が立ちあがつて呟える。

「てめえ綾乃！ 僕の田の前でよくもそんなことを」  
だが、彼は最後まで言い終えることができない。壯絶な色香をまと  
つた女帝の眼が自分を射抜いたのだ。

そのある種の欲望をはらむ捕食獣の瞳を見て、ぞくりと背筋に寒気  
が走る。

…………え、もしかしてこいつ、ちょいヤバい趣味！？

どうやらこの綾乃、両刀使いの氣があるらしい。

今や彼女に捕獲されてしまつた真紀が、子羊のように震えている。

もう何がなんだかわからないまま、緊張の水位がひたひたと高まる。  
その最中、とつぜん玲のケータイが大音量で鳴りはじめた。

ダッダダダダダッ ダダダッ ダダダダダダダダダ  
いらくありや くう もあるさあ

予告なく流れ始めた特徴のありすぎる歌と声に、空へ昇る龍のよう  
に高まつていた険悪な気が一気に落ちて地を突き抜け、リオデジヤ  
ネイロまで到達したと言う。

しかもその着うたは、北島三郎ヴァージョンであった。

別な意味でフリーーズしてしまつた三人を睨み

「なによ！水戸黄門の、さぶちゃんのどこが悪いってのよ  
と玲はぶつぶつ言つていたが、やがてパチンといい音を鳴らしてケ  
ータイを開くとボタンを押してでた。

それが合図だつたように、三人はそれぞれの位置で座り込んでしま  
つた。

「水戸黄門つて……しかもさぶつけんつて……おまえ俺より  
ヘンだぞ、それ」

ヤンキー座りでガリガリとボーズ頭を搔きまわしてぼやく洋一の耳  
に、はしゃいだ玲の声が入つてくる。

「わあ、レイラさんおひさ！なんか病気つてきいてたけど大丈夫な  
の？・・・え、そなの？へえ、いろいろ大変だつたんだね」

玲を睨んでいた目をふと綾乃の方へむけると、彼女はまだ真紀の身  
体を抱えたまま、はんなりと横座りしている。  
もがくこともできないあわれな少年の、首筋あたりを無意識にそつ  
と撫でている仕草が、恐ろしいほど倒錯的だった。

「ええ！？ こつちに来るのレイラさん！ エ、なんで？ エ、マジ  
で？ エッえつ、それでそれで？」

洋一はやたらと「え」と「？」が混じる会話を聞きながら、ぶつち  
ょう面で煙草をくわえると火をつけた。

ふうーっと紫煙を天井へと吹き上げながら、「さて、これからどう  
しようか」と考える。

綾乃のことはなんだか気にさわるが、別れる切れるという話ではな  
いのでこのまま成り行きにまかせることにして、今日ほりで解散  
しよう。

・・・・・とみせかけて後で戻つて、今度こそ一人で思う存分女  
装を楽しもうと決める、三人にバレないようほくそ笑んだ。  
その時、耳が痛くなるほど元気のいい叫びが鼓膜を刺し、おもわず  
煙草の煙を飲み込んでしまつた。

「わかったレイラさん！」のあたしにまかせといてよつ。  
「ううと、

迷惑だなんてぜんぜん思つてないよ。・・・・・たまりにたまつたそのうつぶんを、晴らしてやるのがあたしらの商売ー・さあ泣くのはよしにして、ビーンとまかせてー！」

玲の仕事人口調を聞いた洋一の口が、イーッと横に大きく伸びた。  
- - - - - まずい！ 一いつがこのしゃべりをしたつてことは、  
とんでもない事が起きるー！

まだ火のついていた煙草を灰皿に投げ捨てる、脱兎の「」とく逃げ出そうとした。

だがそれより早く、高そうなダークスーツの襟元がしつかと掴まる。

引き離さうとしても、藻のよつに絡み付いて放れない。

「うんうんー、じゃあ詳細決まつたらまた電話するね。レイラさんもそれまでおとなしくして、じゃー！」

ピッと切つたケータイを片手に、女子高生は一ヤッと氣味悪い笑みを口の端に浮かべた。

「送つてもいいの？ 神戸に・・・・・」

その言葉で、あの女形役者に三味線の弦を弾かれた悪人のように、がくじと一代田の首が落ちる。

泣くのがいやなら さあーあーるーけーえええ

でかい鼻の穴から抜ける歌声が、耳に聞こえてきた気がした。



少し時間が戻つて、ここは紅椿一家の組事務所。

まさか玲が待ちうけているとは知らない洋一が、ウキウキとビルの階段を降りるのをみて、シンがすぐに追いかけるべく動き出そうとした時、おもわぬ人物から呼び止められてしまった。

「おう沢島。ちょっとこっち来てくれ」

やたらと重圧感にあふれる野太い声を背中に投げかけられて、胆の据わっているはずのシンが、斬りつけられたようにビクッとする。振り返るまでもなく、声をかけてきたのは相談役の雄五郎であった。早く追いかけなければと、内心あせる気持ちをモロモロ見せず、懇懃に礼をして近づいてゆく。

「一一代田の部屋までつきあつてくれや」  
そういうて歩き出した背中に付いてゆきながらも、彼はその執事的カンを働かせて、何か嫌な気配を感じ取つた。

「お前、最近一人でよく動いてるみたいだが、いつたい何やつてんだ？」

応接用ソファにどかりと腰をすえた雄五郎はそう尋ねると、首を傾げてシンの顔を見上げた。

直立不動でその三白眼の圧力に耐えながらこたえる。

「一一代田の言つたで、フロントにできそな商売と物件をあたつてます」

嘘ではなかつた。

洋一はヤクザとしてはとても使えないシンのことをあんじて、せめて組員籍から名前を消して、資金を自分が出してまつとうな会社をやらせる - - - フロント・つまり企業舎弟 - - - つもりで、彼に準備するように叫いていた。

もちろんこの話は組内にも流しており、相談役である雄五郎も耳にしているはずだった。

- - - - カマをかけられている。何かを疑つてゐる、この男は瞬時で兄貴の忠実な番犬モードに入ったシンは、雄五郎のことをするに上司とは見ていない。

こうなるとこの男は、普段の慎み深い遠慮といつものが嘘のように消えてしまい、表面上はおだやかだが内面では極めて好戦的で疑り深い人物に変身してしまつ。

そり、シンは己が兄貴のことでのみ、ヤクザになるのだ。

「何かそのことで支障でもおありですか、相談役」「いや、別にねエよ。ここんとこ二代目動きが妙につかめなくつてな。それでなんかやつてんじやねえかとおもつて聞いとこいつて腹よ。仮にも俺は目付けだからな。で、汎島。他には何も言いつかつてねえんだな?」

「いえ、ございません。失礼ですが二代目はまだ組長修行中ですで、これといった仕事もございませんし。ですから女のところを渡り歩いておられると思います」

洋一の悪口を口にして、ズキリと胸が痛んだが、ここでこの面倒な男に目をつけられるのをさけるために、しかたなくそつこつて雄五郎を見た。

わざかだが、目の前の男が息を吐きだしたのを見逃さなかつた。

そして表情と照らし合わせて出た答えは、落胆と決意。

「ま、今のところはそれもしかたねえだろ。お前もお守りは大変だろ  
うが、気入れてやつてくれや。なんか困つたことがあつたら俺に言  
つてくれ」

表面上は自分をいたわっているようなその言葉に、シンも儀礼的に  
礼を言ひ。

「話はそれだけだ。引き止めて悪かつたな」

そういうて雄五郎は立ち上がると、大股な足取りで扉へとむかつた。  
ドアを開ける前に一度立ち止ると、振り向かずに背後で見送るシン  
いった。

「冴島。　おめエが俺を見る眼・・・・・まるで仇みてえだぜ。  
気をつけな」

びくつとしたシンを見もせず、雄五郎は部屋を出て行つた。

絶対に気づかれていないと思つてた自信が音をたてて崩れてゆき、  
洋一のデスクに手をついてうつむく。

無意識に手をやつた額に、汗が浮き出でてこむを感じておどろく。  
「・・・・・もつと気をつけて対応しないといけない、あの男には。  
しかし「今のところは」とはどういう意味なんだ?正式に組長に  
就任するまでは、とこうじじやなかつた気がする。何があるのだ  
らうか?」

見破られた驚きを上回る不安が胸中に生まれ、考え込んでしまつ。  
しかし情報量の少ない今、その答えは見つかるはずもない。

「・・・・・　兄貴の女装に気を取られているつちこ、何か組内で  
事が始まつてゐるのかもしれない。もつと俺が気をつけなくては

次に打つ手を考えながら、シンは女装ルームへとむかつた洋一の元へ行くために、部屋を出ていった。

## イレギュラーズ

またまた舞台は女装ルームへと戻る。

そこでは、着うたによつて争いを防ぐといつ荒業を披露した玲が、あらぬ方向に燃える視線を投げながら演説をおこなつていた。

「いい？次の天女活動はすごいわよー。なんとライブの開催…」

三人の頭の上に？が浮かぶ。

綾乃にぬいぐるみのように抱えられたまま、真紀がおずおずとたずねた。

「あのお・・・・・・まつたく意味がわかんないんですけど  
そうだそつだと残る一人もうなづく。」

つい先ほどまでの争いなどけりと忘れて、素直に話を聴き始めている洋一と綾乃を、真紀がヘンなものを見つけてしまつた顔で見ている。

「えつとですねー。さつきあたしの友だちのレイラさんからテルきて・・・あ、彼女プロの歌手なんだけどね。それで・・・・・」  
「ちよつと待て！おまえ今さらつと大事なこと言わなかつたか？プロの歌手つてなんだよ」

話の腰を折られた玲が、ものすごく嫌な顔をする。

だがヤクザは人の言葉尻を捉えてイチャモンをつけるのが仕事なのだ。

わからないことはそのままにしておけない。

しかしこの変わった女子高生に、そんなことは通じなかつた。

「チツ、はじめは黙つて聞きなさいよねーまあいいわ。レイラさんはあたしがタウン誌の手伝い始めてすぐの頃に取材で知り合つた人でね。そのときにファンになつてずっと追つかけてたんだけど、一年前くらいかなあ、プロデビューして東京にいつちやつたの。そつからは電話でたまに話すくらいだつたんだけど・・・・・すんごく歌うまくつてね、マキシやアルバムでたらすぐ買つて、みんなにも推してさあ・・・・・」

「待てコラッ！話がずれてきてつざ。てかレイラってあのソウルのなんとかつて言われてるねーちゃん？ ぐわつ！？」

おどりいて疑問をぶつけっていたといひに玲の蹴りが腹部にはいり、洋一は悶絶した。

どつも一度目の待つたはNGらしい。平然とヤクザに蹴りを入れた彼女を、真紀が目を丸くして見つめている。

「聞けよ、まずはぜんぶ！ そうよ、デイーバつて言われてるのよ。そのレイラさんがこっちに帰つて来てライブやりたいんだつて」「あらあら、でもそれつておかしいわ。だつてあの子ならこの街のホールでも足りないくらいの大物じゃない。それが玲ちゃんにライブやりたいなんて、なにか事情があるんじゃない？」

綾乃にまで突つ込まれて、玲は一瞬クワツと目を剥いたが、さすがに女帝に暴力を振るうわけにもゆかず、ダルそうな口調ではなじだす。

「それをいまから言おうとしてたんですよ。彼女が一ヶ月前から休養宣言してるのは知つてゐるわよね？ 病気つてことになつてるけど、

「そうじゃないの。レイラさんほんとはロックやりたいらしいのね。こっちにいたときもロックバンドのボーカルだったの。でも彼女の声に耳をつけた事務所はソウルでデビューさせた。そしてこのままその路線で売りたい。それで『ざいざい』になって精神的にまいっちゃってダウンしたのが真相」

皆が聞き入るモードに入ったのを確認してまた語りだす。

「で、なんとか立ち直つたんだけど、まだ心は迷つてるらしいの。それで再スタートをきるためにこの街に戻つて、もう一度だけロックでステージをやりたいって。でも事務所を通してそんなの実現できるわけがないから、自力で会場とか探してシークレットライブとしてやりたいんだって。それであたしのとこに連絡してきたみたい」

語り終えたあと、この部屋に不似合いな静寂が漂う。

みんなそれぞれの表情で考え込んでいる風だったが、やがてカリカリと首筋を搔きながら洋一が口を開いた。

「大体わかつたけどよ。おまえ簡単に請け負つたみたいだけど、これって大ごとだぜ」

「なんですよ？ あたし街の人々に頗効くし、あんたもヤクザなんだからライブハウスの一つや二つ、すぐ話つけるでしょ？」

「…………あんな。それやつちまつと会場を引き受けた方が迷惑すつだろ？ が。絶対に事務所側から圧力かかつくつぞ。そうなつちまつたらヘタすりや経営難だぜ？ それがわかつてつから、そのレイラって子も悩んでたんだろ？ が」

玲が言葉に詰まるのを、洋一は初めて見た。

心の中で『やつた！』という快感が泡のように浮かんだが、困つてしまつた顔を見てすぐに萎んでしまう。

「そりゃ俺がす」めば会場はビリでも押えれるぜ。……でもや  
れはやりたくねえ」

シンが聞けば「さすがです兄貴！」と、ナイアガラ瀑布のように涙  
するであらうセリフだ。

さつき洋一を脅したことは忘れて、玲は自分もそれはしたくないと  
思ひ。

これからも取材で御世話になるし、またいつ別の職業の者と仕事を  
するようになるかわからないのに、街の人々に迷惑はかけられない。  
妙に真剣な空気が流れ始めた時、かわいい小さな声がした。

「あのあ・・・・・・ストリートで、ゲリラライブでやればいいん  
じゃ・・・・・・」

おどおどと真紀がそういつた瞬間、三人の変わり者の目が一度に自  
分の方をむいたので、ヒックと悲鳴をあげてしまった。

「それ一ついいアイデア！ 真紀くんさっすがあ

「おお少年、頭いいなおまえ」

「すごいわ真紀ちゃん。後でご褒美あげましょうね」

綾乃に額にキスされた真紀が「あわわ」といつて目を回す。  
それをムツとした顔でながめる一人。

「よしつーじゃそれでいいこー！ライブのくわしい段取りはあたしが  
するね。で、凛花は機材の調達と場所のセッティング」

「あのお・・・・・・場所とかは決めないで、トレーラーかなんか  
あつたらどうでもできて逃げやすいんじや」

「やっぱ真紀くん頭いいわ！ ジャ凛花、そのトレーラーも用意し  
てつ」

「ちょい待て！ それってほとんど俺一人でやることになつてねーか、

なんか？」

「あら、あたしもお手伝いするわよ。なんといっても玲ひやんより  
顔が効きますから、おほほほ」

「・・・・・綾乃さん、あ

1

「あらあら、ここまで聞かせといでまだそんなこといつてるの？」  
またにらみ合いを始めた二人のあいだに、真紀が割つてはいる。

「どうあえずここは臨時チームってことでどうですか？」僕もレイラのファンなんです。だからできたら手助けしてあげたい。ここは一時、手を組んでもらえませんか？うふっ！？」

話の途中で、いきなり今度は正面から胸に抱え込まれて、窒息しそうになる。

「気に入つたわこの子！ わかりました。貴方の為ならこの綾乃、  
目をつぶつて手を貸します」

「…………皿をつぶるのは」うちの方だつてのつ

承諾する。

「わかりました！ ここにいる四人が臨時チームであることを認めます！ とにかく急いだ方がいいみたいだから、各人すぐ準備に入つて。あたしは今からレイラさんにこのこと伝えて話を煮詰めるね」うなづく綾乃と真紀に微笑むと、玲はケータイを開いて電話しはじめた。

「おい！俺の話はどうなんだよ！？」  
てか女装全然関係ねえじゃん  
それ！」

洋一は一人ワナワナと震えるのであつた。



イレギュラーズが結成されてしばらく経つたある夜、一軒の場末のバーにシンの姿があった。密は彼ひとりである。

「田泊まで他県で行なわれる会合に出席する洋一に、シンがついてゆこうとする」

「おまえここんとこ休んでないだろ？ たまにはゆっくり遊んでこい。組にも顔ださなくていい」

そう言われて、無造作に万札の束を渡されて置いていかれた。

放心して空港で一代目を見送りながら『そういえば兄貴が女装をはじめてから休んだことがなかつたな』とぼんやりとおもつた。

けれども、急にできた休日にシンはとまどつた。

洋一の世話以外、やりたいことがないのだ。

ほぼ無趣味のシンが、わずかに気を惹かれるのが甘い物だったが、それも店まで出かけてといふほどではない。

なので休めといわれても、やることがなかつた。

はじめに考えたのが、この機会に雄五郎の周りを探つてみるとつたが、組に顔を出すなどいわれているので断念した。

しかたなく部屋にもどつて念入りに掃除・洗濯などしてみたが、それも午前中に終わつてしまい、後はすることもなく本を読んだり映画を観たりして時間をつぶす。

しかしそれもすぐ飽きてしまい、ソファとベッドに横になると田を閉じた。

すると、すうーっとまぶたの裏側に凛花の顔が浮かんできて、あわてて目を開く。

だが一度浮かんでしまったその顔は、もう消えてくれなくなつた。

「なんだ？ なんで俺はあの人のことなんか思い出しているんだ？」

焦りながら寝返りをうつうちに、右手がシャツの胸ポケットに伸びそうになつて、あやうく手を止める。

このまま部屋にいては危ない、そうおもつて、シンは急いで起き上がり、ネクタイを締めずにスースを羽織つて外へと出た。

所在無く、行くあてもないまま、街を彷徨つてゐるあいだも、凛花の顔が脳裏をよぎり続け、彼を悩ませる。

あるときはナース。そしてネコ耳。

そしてチャイナにレディバイレーツと、凛花は次々とその姿を変えては、シンの頭と心を翻弄する。

『シンー!』

凛花が自分を呼ぶ声が聞こえてきて、シンは路上で固まつた。

彼女が自分の名を呼ぶはずがない。これは己が造り出した幻の声・・・

そう気づいたときシンは、自分は気が狂つてしまつたのかと愕然とした。

凛花さんは兄貴なんだ。そして兄貴は男なんだ！  
ありえない、それだけはありえないッ

きつく目を閉じて耐えた。

だが身体が震え、額には汗が浮かぶ。

一度大きく傾き始めた心は、彼をどこかへと連れて行こうとしていた。

それを止めるために、シンは田の前にあつたバーの扉を押し開けたのだった。

「お兄さん・・・・・・ かなり飲んでるけど、ぜんぜん酔えないみたいだね」

かすれた声が聞こえてきて、シンの意識が現実に戻った。

声がした方へ目をむけると、いつの間にか隣に女がひとり座っていた。カウンターの上に頬をあずけ、バーには不似合いな猪口を手にこちらを見ている。

「憂さ晴らし・・・・・・ってわけでもなさそうだし、普通に悩んでる感じでもなさそう」

頭の中を覗かれた気がして、シンがおどろいて田を開く。

女は德利をつまんで酒をつゝいたが、中が空なのに気がつき、舌打ちしてそれを高く掲げて振った。

カウンターの内側にいた、見事な白髪をオールバックに撫で上げた口ひげのマスターが無言で徳利を受け取ると、足元から一升瓶を取り出して詰めようとする。

それを見て、女がぼそりとつぶやく。

「コップにして。このお兄さんの分も」

やがて、何の変哲もないガラスコップに波々とつがれた日本酒が、受け皿にのせられて一人の前に置かれた。

「飲んでよ」

いつもなら他人からの酒など丁重に断るのだが、今夜のシンはやはり少しおかしかつた。

何も言わずに黙礼すると、コップを掴んで、縁から酒がこぼれるのも気に留めずに、一息で飲み干してしまった。

酷く甘つたるい安酒だった。

となりでは女が組んだ腕の上にあごをのせて、ちびちびとコップの中身をすすっている。

シンが音を立ててコップを受け皿に戻すと、マスターの手が伸びて、また酒が満たされた。

三人とも一言も口を利かず、ただ酒と時間だけがなくなつてゆく。その静寂に包まれて、うちにシンは、自分がほんの少しだが落ち着き始めたことに気がついた。

ふと視線を感じてとなりを見ると、つぶせで顔をこりひらに向けていた女と目が合つた。

にやりと彼女は笑つと、そのままの姿勢でいった。

「マスター。 そろそろ出してもらひよ」

ロマンスグレイのマスターが、今度は足元にあつたアイスボックスの中から一升瓶を取り出す。

栓を抜いた瞬間、シャンパンやダーニジリンのファーストリーに似た、みずみずしい芳香が立ちのぼり、おどろくシンの鼻をくすぐった。

慎重な手つきで、マスターはその酒を新しく出してきたコップに注ぐと、指で静かにカウンターの方へと押し出した。出された酒を口に含んで絶句する。

濃い米の旨味が口中を満たし、次に得も知れぬ華麗な香りが鼻へと抜けたのだ。

さきほどの大吟醸……これは一気に飲まれちゃ嫌だからとつといったの

『また読まれていた!』

シンの心臓がびくりと大きく波打つた。

自分より少し年上。二十代のどこかだろう。

ゆるいウェーブのかかった赤茶けた髪を、そつけなく垂らしている。きつそうな眼が印象的だった。

その眼を見た時、なぜかシンはテジヤ、ヴを感じた。

彼女は見られていることなど気にも留めず、無表情で浦霞を舐めて

いる。

その姿に気後れして、声をかけそびれてしまった。  
シンがまた前をむくと、ふたたび静寂が訪れた。

顔を少しうつむけて、薄明るい照明の中、揺れるコップの中身を見つめながら味わって酒を飲んでいると、マスターがパイプを取り出して火を入れた。

浦霞とは違つた芳香と煙がコップの上をゆづくりとよぎり、二人のあいだを漂う。

それを嗅ぐうちにシンは、普段は吸わない煙草が欲しくなつてきた。すると、さーつとテーブルの上を滑つて、ジタンの箱が田の前で止まつた。

しばらくそれを見つめていたが、また女に黙礼すると、一本取り出して口にくわえる。

ボウっと隣でマッチの火が点り、少し間を空けてから近づいてきた。身体を寄せてそれを受けると、ゆっくりとジタンを吸い込んだ。

硫黄の香りがきれいに飛ぶまで待つてから、自分のところへと持つて来た女の仕草をみて、シンはさつき感じた擬似感の訳がわかつた。人の考えることを先読みして動く。そこが自分と似ているのだ。そう感じてしまつと、めつたに他人に興味を示さないのに、つい口が動いていた。

「冴島 心と言います。失礼ですがお名前は？」

「あたし？ あたしは、ひめ」

「姫・・・・・」

「燃える火の女と書いて、火女」

おやおしく古風な名を口にして、火女は燃え切ったマッチの軸を灰皿に投げ入れた。

話はそれで終わりとでもいうよつて、またカウンターの上に身体をあずけて、ちびちびと酒を飲み始める。その素つ氣無さが今はありがたい、セツシンはおもこ、前をむくとジタンをふかした。

マスターの吐き出す濃い煙のカーネルに、自分の煙が絡み合つて見ながら、コップに手をやり、一口飲んだ。飲むほどに香りと皿味が強くなつてゆく、やう感じる。

この人はどんな仕事をしているのだらう。少し崩れた空気をまとつてるので、はじめは「ひかりサイドかともつたが、立ち振る舞いを見ると品がある。かといって普通の〇〇とか水商売のように、女っぽいものは感じない。

「あたしは娼婦・・・・・」

またシンの心を読んだ火女がつぶやいた。

絶句してしまつた氣配を気にせず、口調も声を変えずに、彼女は言う。

「男の望みを身体でかなえてやるのが仕事・・・・・ 最近は援交だのなんだのつてきれいな言葉で飾つてゐるけど、やつてることは昔と同じ・・・・・ だからあたしは娼婦、いつもそういうてる」

素直のか投げやりなのかわからない台詞に、めずらしくシンがとまどつていると、急に火女がこちらに顔を向けた。その姿を見て息がとまつた。

さっきまでの男っぽいスレた空気はかき消されたようになくなり、  
息苦しいほど美しい女がそこにいた。

酔つて幻覚を見ている、そんな気さえするほど妖しく変化した火女  
が、溶けるような優しい声を出した。

「今は必要ないみたいだけど、もしあたしがいるならまたここに来てよ」

火女はそうこうと、怠惰な猫のようだった身体に力をみなぎらせて立ち上がると、するりとシンの後ろを抜けて、出口へと歩き始める。ドアの前で、一度片手を上にあげてヒラヒラと舞わせてから、彼女はバーから出て行つた。

あっけにとられるシンの目の前で、マスターが同じ姿勢でパイプを燃らせていた。

シンが不思議な女、火女と出会つてから一週間ほどたつたある日の夜。洋一の姿が女装ルームにあった。めずらしく一人である。

玲はタウン誌の仕事、綾乃と真紀からは連絡がない。つまり待ちに待つた「自分だけナイト」なのだ。

洋一はソファの横にちんまりと正座して、さきほどから床の上に並べてある物をじーっと見つめている。

それは人肌の色をした、こんもりと柔らかそうな物体だった。

その半月状の物を見ながら、頭の中ではエンドレスで女帝の妖しい声が響きつづけていた。

「洋ちゃんにいい物あげるわ・・・・・・これ。つけ方はここに書いてあるから。特注だからね、うふふ・・・・・・まあ、ゆつくりと愉しんでちょうだい。おほほほほ」

そう、いま洋一が熱心に見つめている物。それこそは究極の女装アイテム、シリコンパット。

通称「偽パイ」であった。

神か悪魔か。

綾乃是臨時チーム結成で湧くドサクサにまぎれて洋一に近寄つてくると、そつと彼をさらに深いカオスの海に沈めてしまう危険物を渡したのだった。

眼をラシンランと輝かせ、ありえないほど荒く呼吸しながらパットを

見つめている洋一の姿は、混じりつ氣なし・純度100%のデンジヤラスパーソンだった。

さつきから手は、パットの手前で「行つたり来たりを繰り返していた。かるうじて残つてゐる、紙のようになくなつた理性が警告を発して、それを手にすることを止めると言つてゐるのだ。

これを装着するだけならいだら。

しかしそうすることによつて、更に大胆な衣装をまとつて外に出てしまうのは一目瞭然。

それこそは、一度と戻れぬ航海 - - - すでに戻る意志は無いのだろうが - - - への旅立ちを意味していた。なので、最終防衛ラインを死守しようと、最後の理性が発動しているのだ。

だがもうお分かりの通り、こういう場合はすでに秒読み段階である。きつかりタイムを計ること10分後。

洋一は万引きする子供のように、さつとパットをひつたくると、寝室に駆け込んでドアを閉めた。

「わっ、ほんものみたいにやわらか~い！ うおっ、たふたふ揺れるのか！？ すっづーっ！」

これ以上は見るに耐えないので目をつぶるが、一時間ほどの試行錯誤の結果、この道二十年の歴史を誇る業界の老舗、「ジユバリデ・デオン」社謹製のシリコンパットは、一代目の胸に収まつた。

それからまた一時間が経過して、やつと寝室のドアがカチャリと音を立てて開いて、凜花にチエンジした彼が廊下にすべつと立つた。

道行く人のド肝を抜くこと間違いなしの、大きなウサ耳。片方は当然、ペコッとかわいく垂れている。

黒い粗めの網ストッキングに包まれて伸びる脚線。

そしてなんと言つても「隠す氣ないだろー」と突つ込まずにはいられない、バニーの衣装。

上から羽織つている、燕尾服風の黒い上着がかぶつじて露出度を下げてはいるが、後は目も当たられないモロダシ振りである。

バニーになつた瞬間から、どんどんと高まる恥骨の奥のうずき、すでに凛花の目は大きく開き、イッてしまつていた。  
小脇に抱えた黒いステッキをぐるりと空中で回すと、熱い声を漏らした。

「ああ、いつてみよつか」

そして凛花＝洋一は、奈落より深く、沼のように魂を絡め獲る、妖しい夜間飛行へ旅立つてしまつた。

バニー姿の凛花を車の中から見た時、もうシンはおどろかなかつた。  
ただ「ああ・・・・・・」と、かぼそい声をもらしただけだ。

だが、口を開けて、泣き笑いの表情で、彼は静かに涙を流していた。

到底、言いあらわすことなどできぬ喜びと感動と幸せが、心の中の

とまどいと想いに混じつて、彼から言葉を奪つてしまつていた。

好きなんだ。 そう今ならはつきりとわかる。

認めるとか認めない、男とか兄貴とかは、どこかへ消し飛んでしまつていた。

シンは夢遊病者のよつて車から降つると、凛花の後について歩き出す。

もつこつものよつて物陰に隠れることはしなかつた。

凛花も違つていた。

見られることへの喜びのみ感じ、破滅とか恐怖はみじんも心の中に無い。

瞳孔が開きっぱなしの眼を辺りに向けながら、颯爽と繁華街へむかつて足を進めて行く。

・・・・・ もつと高めなくつちや・・・・・ もつと気持ちよ

くならなきやダメ・・・・・

それだけを求めていた。

やがて街に出た彼女の姿は、人田を惹くビビの騒ぎではなかつた。密の送り出しで店の外に出ていたクラブのお姉さんまで、あんぐりと口を開けて、田の前を悠々と通り過ぎてゆくバーを見送つてしまつ。

「どこの店の子、あれ？」

「いあ、どつかの店に来てるショーカーの人じやない？」

丸くてふわふわの尻尾が揺れるのを、老若男女問わず、おもわず振り返つて見つめてしまう。

凛花の胸のドキドキと恥骨の甘い痛みは留まるところを知らず、人々の視線を受けるたびに、彼女をめぐるめく恍惚の世界へといざなつて行く。

飲み屋街を抜けてアーケードに足を踏みいれた凛花は、見覚えのある男たちを見つけた。

横に大きく広がつて、大声で話しながらじつちへむかつてきているのは、地下街でやりあつたあの若者たちだった。

あの夜の喧嘩を思い出した途端、一段と強いうずきが奥を駆け抜け、声を漏らしそうになる。

躊躇うことなく凛花は足を前に進めると、彼らに気づかれるより先に「はあーい」と声をかけた。

急にあらわれて微笑むバーに、男たちはよきよきとした顔をした。だがすぐにあの時のメイドだと気づいて、ぐるりと背を向けると逃げ出した。

「あらあ、つまんないの・・・」

快感を得られる機会を失つて、がっかりとしてまた歩き始める。暴力を求めている自分への驚きとか疑問すらなくなつてしまつていった。

気持ちよさにとろりとしていた瞳が、肉食獣のそれに変わつていることにも気がついていない。

凛花の後ろをふらふらとついて行つているシンも、彼女の変化に気づかず、放心気味に足を運んでいる。

はっきりと自分の想いを知ってしまったシンは、もつぱりしていいかわからなくなつて、心のままに行動していた。

…………　凛花さん、綺麗だ・・・・　この世のものとはおもえない・・・・

光りに集まる虫のような、人々からの好奇の視線を浴びて歩く凛花

だつたが、その華麗な行進が終わるときが来た。

彼女の目の前に、バラバラと20人以上の男があらわれ、行く手をふさぐ。その中にさつき見た顔があつた。

男たちは逃げたのではなく、仲間を呼びにいっただけだったのだ。

あの夜の凛花の膝蹴りで、まだ鼻が微妙に曲がっている男が、こつちを指差して朗らかな口調でいう。

「おねーさん。しかえしにきたよーっ！」

笑っているが、眼がいびつな暗い光を放つている。

凛花の望んでいたものがついにやつてきてしまつた。

凛花は、不敵な笑みを口の端に浮かべて、ゆっくりと左手に持つて、いたステッキを刀のように構えた。

さつと男たちが輪を作つて取り囲んでくる。

いつもなら出鼻に2・3人倒してから逃げて少人数に分けるのに、凛花はそうせずにいた。

この場で全員を徹底的に痛めつけるつもりだ。

一時にらみ合いの後、左右から木刀が襲ってきた。

腕の動きが見えないくらいの早さでステッキがそれを跳ね上げ、間髪をいれず、その先端が一人の男のみぞおちに埋まる。

だがそのときにはもう、前後から金属バットが唸りをあげて落ちてきた。

おそらく重いはずの一撃が、ガキッという金属同士が擦れる音と共に止まる。

素早くステッキを手放した凛花が、両手首に仕込んである小柄で受けたのだ。

力任せに押し切ろうとするバットをなんなく弾きかえした彼女の両手の指のあいだに、ギラリと光る小柄が二本づつ握られた。

途切れずにまた襲つてくる前後左右の4人に向かつて、それが一斉に放たれた。

飛んできた小柄の動きを見切つた男が、首を傾けてかわそうとする。その時、矢のようにまっすぐに走つていた刃が急に下に向きを変え、男の股間辺りで跳ねて、峰の部分で急所を強打した。

他の三人に飛んだ小柄も、それぞれ鞭のように不規則な変化をして、

腹・腕・顔を峰で薙ぐ。

一瞬生まれた空白の間に、凛花の手首が閃いて、放たれた小柄が、指に結わえた細引き紐に手繰り寄せられ、また元の位置に收まる。

予測できない動きをする小柄を紐で操る - - - それが母・凛が洋一に残していくてくれたものの一つ、菊池流小柄術だった。

8人の攻撃を退けたバーーに、男たちが怯む。

そんな彼らを見つめながら、余裕の笑みを浮かべて凛花は、平べつたく横幅のある奇妙な造りの小柄をちょいちょいと爪のようになに動かして挑発した。

「ほら！ まだまだこれからだよつ、ぼくたち

天女ではなくディアブロ - - - 悪魔と化したバーーが叫んだ。

ふたたび襲い掛かってきた男たちを軽く弄びながら、凛花はそう感じて、段々と息を荒げる。  
・・・・・

小柄の峰や自分の手足が、男たちの身体のどこかに埋まるたびに、

電流のような心地よさが全身を貫き、そしてその快感は、消えないでどんどん溜まっていくのだ。

しだいに手足が震えてきたのに気がついたが、その時にはもう快感の波は止まらなかつた。

四本の小柄すべてが、一斉に殴りかかってきた男たちの顔面を叩いた時、それは頂点に達して、弾けた。

「ああああああーっ！…！」

甲高い絶叫と共に、びくんと凛花の身体が魚のように跳ね、目の前が真っ白になつて崩れ落ちた。

仲間を倒したバーーが、なぜか自分で道にのびてしまつたのを見て、一瞬男たちは顔をみあわせたが、恍惚の表情でピクピク痙攣している姿を見て、今がチャンスとまた近寄ってきた。

いつものシンならもつと早く助けに入つただろう。しかし一時的に心神喪失状態だった彼が、目の前で倒れた凛花を見て、はつと我に帰つた時には、もう何人かの男がバットや木刀を振り上げて、倒れていの彼女に打ち下ろそうとしていた。

-----間に合わない！

それでも駆け出そうとしたシンの視界に、大きな影がさつと脇道から走り出たのが見えた。

ドム、ボン・ドンー

硬い物が肉を打つ音に、失神していた凛花が目を覚ました。

ポタッ。

生あたたかいものが、上から彼女の白い頬に滴り落ちる。

「だ、だいじょうぶですか？ チャイナの人・・・・」  
そういうて、血を流しながら微笑みかけてきたのは、あの牛島の『  
つい顔』だった。

実らぬ恋と知りながら、牛島はあの夜からずっと、凛花の姿を探して夜の街を彷徨つた。

そして凛花の危機を見て走つたのだった。

「うおおおお！」

きれいにバットや木刀が決まつたのに倒れず、牛島は雄たけびをあげると、その場にいた男をかたっぱしから掴んで投げ、殴り飛ばしはじめた。

「てめえらー！」人に手え出しあがつて、半殺しじやすまねえぞ、  
『ララア！』

狂つたブルドーザーのような大男の乱入に、周りを囲んだ男たちがぎよつとしているあいだにも、暴風と化した牛島はめちゃくちゃに暴れまわる。

エクスターの余韻でふらつきながら立ち上がつた凛花に、コンバットナイフを持ち出した男が、腰を落として突つ込んできた。

その殺氣に、凛花の危険な部分がまた反応する。

回し蹴りでナイフを弾き落とすと、ジンジンとする奥のものに突き動かされるまま、手にした小柄の刃を男に向ける。

今度は峰打ちではなく、白刃を突き立てる気だ。

また高まってきた快感に押されて、必殺の一撃を放とうと構えた時、

田の前を黒いものがふさいだ。

「どけっ！」

錯乱した凛花が、刃を横に薙ぎ払おうとした腕を、強い力が押えつける。

ぐいっと前に引き寄せられ、踏ん張った時、身体が熱く大きなものに包まれた。

「凛花さん、だめだ。それだけはやっけやいけない」

刃の先を自分の心臓に向けて、シンは言つた。

信じられない声を耳元で聞いて、はつと身をこわばらせる凛花の身体をもう一度強く抱きしめて、シンがさわやく。

「ずっと知つてたんです、見てました……だまつていてすみません」

凛花の全身から力が抜け、手から滑り落ちた小柄が、カラッとも虚しい音をたてて道に転がる。

「……ずっと知つてた……見てたついでにこいつ」と？

「あなたを守れるのならなんでもします。だから一線を越えてしまつのだけはやめてください。俺は、おれはあなたを……」

「

ピココイイイイイ！

笛の音がして、シンの言葉が途中で止まる。

音のした方を見ると、数人の警官がこっちはと走つてくるのがわかつた。

「そこのおまえっ。 その人つれて逃げる！」

牛島はそう叫ぶと、駆けてくる警官たちへと突っ込んでゆく。

足止めする気だ。だが遅かつた。

その時には、アーケードに突っ込んできたパートカー三台と、凛花とシンは囮まれていた。

一斉にドアが開き、そこからまた警官がはきだされる。

凶暴さを失つて、彼らに小柄を振るうともできず、唇を噛み締める凛花を優しく離すと、シンは彼女を背中にかばつていった。

「俺が逃がします。 これ、かけといてください」

肩越しに顔を隠す黒い大きなサングラスを手渡す。

凛花がそれをかけるのを確認して、シンはすばやく前に走ると、目前まできていた三人の警官にむかって目の醒めるような連續突きを腹に食らわせると、うめく彼らのあいだをぬつて、凛花の手を引いて駆け出す。

「まで、おまえ！」

すかさず追つてきた警官にかまわず、疾走してシンは脇道にはいると、Hンジンをかけたまま路上駐車していた配達の軽トラック見つけて凛花をその中に押しこみ、自分も素早く飛び乗つて急発進した。間をおかずにつつてきたパートカーのサイレンとまぶしい回転灯が背後から迫つてくる。

…………この軽トラじゃ逃げ切れないつ

あせる彼のとなりで凛花は、異常だつたそつと今までの自分と、すぐそばにシンがいるということこまだ混乱していた。

そんな凛花を、透き通つた目でシンはちらりと見た。ほんの少しの時間ためらい、そして口を噛み締めて何かに耐えたあと、いった。

「凛花さん…………」

「え？」

話しかけられて、おもわずシンの方を向いた凛花の腰が、彼の腕に引き寄せられる。

唇が一度、額をさわつた気がした。

「凛花さん…………俺は」

つづく言葉をサイレンが搔き消した。

抱かれたことなどいながら、「え、なに？」と聞き返したが、もうシンは微笑むだけでこたえてくれない。

「次の交差点で車とめます。すぐに外へでて走つてください」

「シンは、シンはどうするの？」

「逃がします。大丈夫です」

ちゃんとした答えを聞く間もなく、すぐに交差点に軽トラックはさしかかり、シンがサイドブレーキを強く引く。タイヤが悲鳴と軋む音をあげ、車が横滑りして道をふさいで止まる。

「さあ、こつて！」

シンの手にドンと突き飛ばされた凛花が、外へと飛び出してすぐに

駆け出す。

それを追いかかけようとした警官の前にシンが素早く回りこむと、足払いをかけて転倒させた。

「あっ、おまえ紅椿の！」

一人の刑事らしい男が自分を見て叫んだのに笑みでこたえると、シンはちらりとうしろを見た。

暗闇の中へと白く丸い尻尾が消えたのをみてから、シンはどこかじと道に座り込むと、両手を上げた。

その腕に、鈍く光る手錠がかけられた。

『シン。 知つてたつてどうこういふことへ。』

出るはずの無い問いを続けながら、走つて凛花は逃げる。  
やがてサイレンの音も、追つてくる足音もないことに気がつき、もつれそうな足をとめた。

荒く呼吸しながら、サングラスをむしりとつて路上に投げ出す。  
顔を上にあげて、路地裏のほこりっぽいビルの壁にもたれかかった。  
左手が持ち上げられて、自分の額を触る。

「あれは、あれはなんだったの？」

そうつぶやくと、強く抱きしめられた感覚までよみがえってきた。  
凛花はその場に崩れ落ちると、頭を抱え込んだ。

翌日。朝早く事務所にいった洋一は、シンが警察に拘束されたのを知り、すぐに弁護士の手配をすると、身柄引き受けのために組員を署へと向かわせた。

本当なら自分で飛んで行くはずなのにできなかつた。いまシンと顔を合わせるのが恐かつたのだ。

デスクの前で手を組んでじりじりと待つてゐるあいだにも、きのうから頭を離れない疑問がずっと洋一を痛め続けた。

いつもと違つて、殺氣立つた一代目に恐れをなしたのか、誰も入つてこない部屋の中で、おびえながら洋一はシンを待つた。

夕日が窓から差し込む頃、デスクの上の電話が鳴りだした。受話器をひつたくて息を詰めてたずねた。

「シン、か？」

「いえ、狂介です。一代目。シンの奴をなんとかガラ受けしてきましたが、あいつ、少し頭を離したらいなくなつちまつて。もうそつちに帰つてますか？」

「え・・・・・・」

言葉を失ってしまった洋一の耳に、まだ狂介が何か話しかけていたが、もうその声は届いていなかった。

そしてシンは、洋一の前から姿を消してしまった。

シンが失踪してしまった日の夜。

仕事にむかう綾乃のそばに、本格英國風メイドの姿があった。

「ごきげんで小唄などを口ずさみながら、彼女はしつかりとメイドの手を握つて歩いている。

輝きはじめたネオンに浮かび上がつた顔をよく見てみれば、それは女装した真紀だった。そして着てこるメイド服は、いつかの洋一が着ていたものと同じだ。

どうやら綾乃が女装ルームから勝手に凜コレクションを持ち出して、真紀に着せてあれからずつと連れまわしているらし。

古風なメロディを奏でていた綾乃が急に唄をとめ、となりの真紀を見つめながらしゃべりだす。

「真紀ちゃん、どうしてもあたしの部屋にくるのいや？」

「あ、いえ・・・・・いやとかそういうんじゃなくつて、同棲つてこうのはちよつと・・・・・・」

「じゃ、真紀ちゃんの今の部屋、遠いし中も狭いから、あたしのマンションの近くに引越ししましょーお金はだしてあげるから、あした不動産屋さんにいきましょうね、うふふ」

「ちょ、ちょとそれはーそれってヒモですよね？」

真紀の抗議は届いていない。

そうしましょそうしましょ、などと妙な節をつけて歌いながら綾乃是歩いていたが、ちょうど前からきた二人連れの男たちを見て、「あら、雄五郎さん」とつぶやいた。

真紀が彼女の視線をたどつて、うつとうつめぐ。

まともに雄五郎の二白眼と目が合ひてしまつたのだ。

「雄五郎さんご無沙汰します」

丁寧にお辞儀して挨拶した綾乃是、仕事のくせですばやく連れの男の人体を確かめた。

四角い顔に小柄で痩せた身体。そして細い目をしている。

「お仲間…………じゃないわね。それにしては怖い  
テじやないし。頑固な職人つて感じね

そう判断してから、また嫣然と目の前の一人に微笑みかけた。

「飲みにいらっしゃったの？」

「ああ、そうだ」

「じゃわたし今からお店だから、同伴してくださいよ？」

ほんの少しの間だったが、雄五郎の目ととまどいが走ったのを綾乃是見逃さなかつた。

「おほほ。でもお姫さまの都合もありますから、無理は言えません  
ものね」

「また後で顔だすよ」

「そうしてくださいな。では失礼します」

頭をさげた綾乃につられて真紀もひょいと会釈したが、一人の男はそれを見すにまた歩き出す。

「だれですか？あのこわそなうなおじさんたち」

「ああ、洋ちゃんとこのえらい人よ。お連れさんは初めて見る人ね

「や、ヤクザですか？、やつぱり！」

怯える真紀を無視して綾乃是何か考えていたが、やがて彼の方をみいた。

「真紀ちゃん。ちょっとあのおじさんたちつけて、どの店に入ったか見てきて教えてくれる?」

「ええっ、マジですか!?」

「くくくとうなづく綾乃に、真紀はものすくくいやそつな顔をして見せたが、彼女には通じない。

強引に背中を押されてしまった。

勘弁してもらおうとしたが、にこにこしながらも拒否を許さない目をみてあきらめると、おどおどした足取りで雄五郎たちの後を追つてネオンの海に入つていった。

同時刻。組事務所を出た洋一は、女装ルームにいた。

じつとシンを待つことに耐えられなくなつて、逃げるよひに事務所を出で、ふらふらとここにやつてしまつたのだ。

酒も煙草も口にせず、放心してソファに沈んでいると、玲の元気な足音が聞こえてきた。

リビングに飛び込んできた彼女は、洋一の姿を見て、大声でしゃべりながら近寄つてくる。

「凛花! あんた昨日なんかやつたしょ? アーケードでバーが大あはれしたつて・・・・・・・」

心ここにあらすとでもこつよつと、自分に目も向けずじつとして

いる洋一に異変を感じて、途中で口をつぐむ。

「…………なによ、なんかあつたの？」

「いなくなつちまつた…………」

「だれが？」

「シンが…………」

「うわ！」とのよくな声でつぶやいた洋一の口から兄の名前がでて、玲は眉を吊つ上げた。

「ちよつと。それじうじうとか聞かせなさいー。」

語らせるの「手」すりながらも、昨日おじつたことのあらましをだいたい聞き終えると、玲はケータイで兄を呼び出す。だがコールして流れ出したのは、電源が入つてしませんといつ不吉なアナウンスだった。

キッとした顔で玲が洋一に食つて掛かる。

「あんた兄ちやんになにしたのよー。」

「…………にいちゃん？」

「やうよ。あんたの部下の冴島心はあたしの兄ちやんよー。そんなことはどうでもいいの。なんであんた逃がした兄ちやんがいなくなんのよー。」

玲とシンの関係を聞いておどろいたのだが、それもすぐにしほんでき、「わからねえ、俺にもわけがわからんないんだよ…………と力なくつぶやく。

ふぬけになつている洋一にこれ以上聞いてもなにも得られない。

そう判断した玲は、いそいで部屋から駆け出した。

「…………とりあえず兄ちやんがいなくなつた警察署までいけばもつとくわしこことがわかるかもしれない」

そう考へて、玲は勢いよく道を走り出した。

だが甘かつた。

署まで行つたはいいが、事は暴力事件でシンはその主犯にされてしまつてゐる。

女子高生がいくら食つてかかつても、どの警官も相手になどしてくれない。

あきらめきれずに、ロビーの待合いに座つて考え込んでいた玲の前を、どこかで見たことのある男が通り過ぎた。

反射的に立ち上ると、大きなガラス扉を抜け門の方へと歩いてゆく、頭に包帯を巻いた男の背中を呼び止めた。

「ちょっとまつて！ あんたあのときの大男よね？ ・・・・た

しか、牛島！」

「あア？」

剣呑な声で振り返つた牛島は、呼び止めたのが女子高生だったので妙な顔をした。

だがすぐに、あの夜カメラを構えていたこの娘のことを思い出して、こたえるより早く、彼女の肩をつかんで揺さぶる。

「あのチャイナの人、いや、バーの人は？」

「え、いるけど」

「じゃ、うまく逃げれたんだな？」

「あ、うん・・・・たぶん」

すゞい剣幕で質問されたのでついたえてしまつと、「よかつた・・・

・・・」 そう万感の思いで牛島はつぶやくと、男泣きに泣きはじめ

た。

「ちよ、ちょっといいからひつきなきなことよ。」ひつきまで変な目で見られてるじゃないの！」

玄関に立っていた警棒を持ったおまわりさんに睨まれて、玲はあわてて大男の手を引くと、重いその身体に舌打ちしながらも彼を引きずつて警察署を後にした。

雄五郎たちの後をつけて入った店を確かめた真紀は、すぐに綾乃に連絡して教えたが、彼女にとりあえず自分のところへ帰つてくるようといわれてため息をついた。

「これで解放されるとおもつたのに……」  
そう一人ぶつくさつぶやいたが、しかたなく綾乃の勤めるセブンシーズへむかつた。

そこで真紀を待ち受けていたのは、人間ぬいぐるみとしての歓迎だった。

「わあ、かつわいー！ この子が姉さんの新しい彼女？」 「そうよ」  
「えつ男の子！？ うわあ～うまく化けてるぅ！」「でしょ？  
あたしがやつたんだもの」  
「いいなあ姉さん。 あたしもこの子ほしいー」 「あら残念。  
それはあげられないわねえ」

控え室にいた、色とりどりの夜の蝶たちに、抱かれ撫でられ頬ずりされて、あげくの果てには物扱いである。  
いくら元が男の子で周りが綺麗なお姉さんたちでも、さすがにげつ

そりした。

やがて店が始まってみんなが出て行ってしまったので、ほっとしたのも束の間。すぐに誰かが帰つて来て、根掘り葉掘り聽かれたあげくに、テディベアのように弄ばれてしまつ。すでにお気づきの方もおられるだらうが」の真紀。どうも女性の保護欲を刺激するタイプらしい。

彼の目の前のテーブルには、入れ替わり立ち代りやつてくる彼女たちからの差し入れのオードブルや酒のグラスがまさに酒池肉林といつた風に並んでいた。

実はこの状態は、現在店内の一一番高いブースに座り、綾乃たちトップレベルの美女たちをそばに侍らせている某社長よりも豪華なのだ。しかも真紀への差し入れの御代は、ちゃっかりとこの社長の勘定につけられていた。

今 のセブンシリーズで一番のVIPは、この女装子メイドなのだ。

店で適当に社長をあしらつていた綾乃は、化粧直しという名目で彼の手からのがれると、カウンターの奥から店の裏に入り、雄五郎が入店したオンラインディーナというクラブへ電話をかけた。出た黒服にある名を告げると、すぐにその人物の声が聞こえだした。

「ミキちゃん元気?」

「あ、綾乃ねえさん、ごぶさたしてまーす」

「ちょっと聴きたいんだけど、紅椿の相談役、そっちにいってないかしら?」

ミキといつ子の声が、あつと気まずいトーンに変わる。

雄五郎が綾乃の上客であることは、この街の夜に働く者なら誰でも知つて いる。

「すみません。ちょうどあたしがつこちやつて……で  
もなにもしませんから」

「あらあらちがうのよ。ちうじやなくて……ちゅうじよか  
つたわ。実は雄五郎さんのお連れさんなんだけど、同じ同業の人かし  
ら?」

綾乃が優しい声を出したのでミキはほつとした声になり、うーんと  
彼女の質問を考えていたが、やがて元気よくこたえる。

「いや、ちがうとおもいます。でもなんかヤバ筋っぽかつたから、  
仕事とかきかなかつたんですけど、チラッと話に彌漫つて出たんで、  
そつちだとおもいますよ」

もつと詳しく探ろうかとたずねてきたミキに、できればお願ひとた  
のんで綾乃は電話を切つた。

キャリアの長い彼女だが、さすがにタトゥ系には詳しくない。  
とりあえず休憩で入つてくる子にたずねようと控え室にいた  
ちょうどそこで真紀と遊んでいた麗菜という子に聞いてみたが、彼  
女もよく知らないらしく、首を横に振つた。  
そのとき、ソファに横にされて撫で回されていた真紀が、顔をあげ  
ていった。

「パソコンあるならすぐ調べれますけど」

彼の言葉に一人の美女はああと手を打つと、すぐに黒服に店のノー  
トパソコンをもつてこさせ、真紀に与える。

少し時間がかかるというので、そのあいだに雄五郎が行きそうな店  
に次々と綾乃は電話すると、あの老極道の連れのことを探るようにな  
った。

どの店にもかならず数人はいる彼女の崇拜者たちは、一一りゆくそ  
れを引き受けた。

ヤクザとはまた違つ夜の情報網を、この女帝は完全に握つてゐるのだ。

そうしてこりひつひ、真紀が彌玄の情報を探し当てた。

「えつと彌玄…………いまは十一代目！？ 江戸時代から続く関西の老舗彫り師で、おもに某広域暴力団の幹部を相手に腕を振るひ、その筋では有名な名人である、ですって」

それを聞いて、綾乃は何か嫌な予感をおぼえた。

紅椿一家の二代目以下の幹部連は、全員中年から初老の男たちばかりで、ほとんどの者が背中にガマンを背負つていた。なのでいまさら新たに刺青など入れようなどといつ者に心当たりがないのだ。

胸騒ぎがして、綾乃はケータイを取り上げて洋一に電話したが、長いコール音のあとに留守番電話サービスにつながつてしまい、そのまま切つた。

「まあ急ぐ話でもないでしようからね  
また明日にでも連絡してみよ」と決めて、まだパソコンをいじつている真紀を弄ぶべく、彼の手を取つた。

「祖先の血筋の一代、ひび顯れて来たのである」

やうやうと耳やわりな声が、薄暗い応接室に響く。

義隆が身体を前に倒して、長くなつていった煙草の灰を大きなクリスマスの灰皿に落とすと、革張りのソファが猫が鳴くような音を立て軋んだ。

耳に当たっている受話器から流れ出す、優雅たか酷薄な若い男の声を、ふんふんとうなづきながら聞いている。

「はア～歌手ね～。そんな有名人がこっちにおつたんですか。え、じつね出身？　ははア～、ほんで帰つてきどるかもしれんて？　はは、しかし鬼小島さんとこも手広おやつりますな。もちろん手伝いますわ、うちのもんにも声かけとります」

ジジッと煙草の赤い穂先をもみ消したところで、聞こえてくる男の声が低くなつた。

見せはじめる。

「これを機会につねが本家の直系に?そらええ話やけど、まつた錢  
がよおけいるんでつしゃる。あはは、まあそれはなんとかできます  
けんどなア」

組織の本家 - - - 本部に上がれば、もう田舎の地方大名ではなく、全国に力を及ぼす事も可能だ。

ただそうなれば、今まで以上に上納 - - - 金がかかる。

その打算と慾。ギラギラとした眼の奥では、それらがない混ざつて、るつぼの中のようじドロドロと煮えたぎつていて。義隆は半ば楽しみながら、ゆっくりとそれをかき混ぜていた。

富とある程度の名声が手に入れば、次に権勢が欲しくなるのは当たり前。

極めて通俗だが義隆はそう考へ、またそれを恥じる心などカケラもない。

腹を空かせた赤子のように、欲しいものをひたすら貪欲に求める。そして手に入る手段に対する善惡の基準もない。

「無い」という単語が似合つ男はヤクザにじょまんといふが、空っぽの大きな虚無の空洞を内面に待つ義隆は、その慾の質量で他の極道たちを抑え、出し抜き、ここまで来たのだ。

「いやしかし、鬼小島の一一代目は頭が切れますなア。うひのボンクラと大違ひですわ。え?いやいや、あれはあんたと違ひおて性根が座つどりませんのや」

義隆は新たな煙草を口にくわえたまま、組内の者には聞かせぬ愛想のよじ口調で相手にしゃべりつづけている。

だが、闇のどこかを見据えたまま動かない眼は、何か次の獲物を見つけた猛禽のように、まばたき一つしない。

黒渦に似た、慾の闇に吸い込まれたように、カーテンがゆらりと揺れて、義隆の背中に張り付いた。

義隆が電話を終えた頃、彌玄をホテルに送つた雄五郎は客の絶えたロビーにいた。

背後に付き人の組員を立たせ、ソファに深く腰を下ろして雄五郎は、トレーデマークの二白眼を細めてどこかを見つめている。

「おい、煙草買つてきてくれや

はいとこたえた付き人がガラス扉の外へと駆け出していくのを待つていたように、テーブルに投げ出していた携帯が震えだす。ゆっくりと身体を起こすと、節くれだつた手で掴み、耳に当てるた。

表情を変えず、雄五郎は受話器の向こうで相手がしゃべる話を聞いている。

一分ほどして、一言も口をきかずに切つた。

そして元の位置に携帯を置くと、また初めの姿勢に戻つて、目を閉じて考えはじめた。

微動だにしない身体の中で、右手の指だけがじれるように動いている。

しばらくして、なんとも言えぬ唸りを一つあげると、またテーブルの上の携帯を手に取り、誰かに電話をはじめた。

長い呼び出し音の後、相手がでたところで、背筋を伸ばす。

「（）無沙汰しております。・・・・・ そちらはお変わりありませんか？ は、いえ、若のこともありますが、実は・・・・・」

野太い雄五郎の声が、めずらしく人をばかる小声に変わった。まるで無声映画の役者のように、口だけが動いている、そう感じられるほど低く聞き取りにくい声だ。

口調には普段の傲岸さがなく、逆に恐縮するようなものが混じっていた。

そうやつて10分ほど会話の内容が聞こえぬ状態がつづいていたが、やがて話がついたのか、雄五郎の鋭いまなこに奇妙な明るい光が走つた。

その後すぐにいつもの胸間声に戻つていう。

「申し訳ありません。組内のことでお手を煩わせしまいます。は？ いえ、こちらこそ痛み入ります。はい、では失礼します」

見えぬ電話の相手が目の前にいるかのように、雄五郎はきつかりと頭を下げる。電話を切つた。

携帯をスースのサイドポケットに落とし込むと、腕を組んで目を閉じる。

表でハイライトを買つてきた付き人の組員が、走つて雄五郎のところへつて、渡そうとして目を見開いて動きを止める。

自分は極道です、といつもいっているような雄五郎の顔が、穏やかに微笑んでいたのだ。

彼は一年ほどこの老極道に付いているが、そんな表情は今夜はじめて見た。

気配で帰ってきたのを察して、田を開じたまま口を開く。

「一本くれや」

「は、はいー」

あわててフィルムをはずすと、封を切つて一本取り出し、口にくわえさせて火をつける。

くるくると唇を器用に動かして、ハイライトを口の端に持つていくと、穂先を下にたらして両手をスラッシュに突つ込み、足を開いて煙を吐き出す。

ふかす紫煙と共に、つぶやきが漏れた。

「つめえ・・・・・・」

楽しげに口元が歪んだ。

シンがいなくつて三日が過ぎた。  
少し気を持ち直した洋一と玲は、あらゆる手とルートを使って彼の居場所を探したが、痕跡ひとつ見つけることができない。  
だが、執念深さでは共通している一人は、諦めずに、今も女装ルームでお互いの情報を交換していた。

「で、あんたのアンテナにも兄ちゃんのいそうな場所はかかってこないわけね」  
「ああ」  
「てかほんとにそれでもヤクザなの？ 人ひとり見つけらんないな  
んで」  
「…………すまん」

すっかり大人しくなつてイジメ甲斐がなくなつた洋一に拍子抜けして、玲はふうーっとため息をついた。  
両手を上に突き上げて大きく伸びをすると、どかっと背中をソファにあずけて考える。

なんとなくだが、玲は兄が姿を消してしまつた理由に見当がついていた。  
そして、それに関することで、洋一が自分に話していない事があることにも。

今まではどうしてもそのことに触れたくなかったし、またそうしなくても見つけ出せると考えていた。  
しかし今になつても手がかりすらわからないとなつては、もうこの

問題を棚上げにしてはおけない。

玲はためらしながら、洋一に話しかけた。

「あのね、兄ちゃんといつしょにあんたを尾行しだしたときね、あたしなんかおかしいつておもったの。兄ちゃんの様子が「目の前のソファに座る洋一の肩が、わずかに揺れた気がした。静かにそれを見つめながら話をつづける。

「本人は気がついてないみたいだつたけど。そうやつてつけてるうちにね、兄ちゃんはあんたを・・・・・いや凛花のことを男つて見てない気がどんどんしてきたの。本当の女の子として凛花をみはじめてくるんじや・・・・・・そつおもつた」

洋一の目が大きくなり、動きが固まる。  
弱い者を虐めるよつて氣が進まなかつたがいつた。

「あんたが暴れたあの夜。それに気がつくよつなことがあつたんじやないの?」

一番いいこくことをたずねた。

洋一はまだ固まつている。いや、動けなかつたのだ。

それを見て玲は、自分の予想以上のことがあつたのだと悟り、そこから先の言葉を失つた。

頭が次を考えることを拒否している。

無敵なはずの玲も、うつむいて目を閉じてしまった。

玲の質問を受けて、洋一の身体から頭だけが独立してしまつたかのように、意思に反してあの夜の出来事を再現しはじめる。

やはり錯覚とかではなく、あの時のシンの行動はそういう意味だったのだ。

玲の話で、あらためてそれを認識せられ、洋一の混乱は頂点に達した。

もう何をどうしたらいいのかすらわからない。

ただわかったことは一つ。自分のせいでシンは姿を消してしまつたのだといつゝこと。

それに対しても一つ行動してやれないばかりか、考えることすら頭は拒否している。

シンが嫌になつたわけではなく、その先を思うことが恐かつたのだ。

「どうすりやいいんだ、おれは・・・・・・」

初めて迷つた子供のように、おぼつかない声が口から漏れる。

それを聞いて玲が目を開けて洋一を見た。

しかし彼女も同じで、言つべき言葉が見つからない。

重く苦しい沈黙が支配するこの部屋の中で、一人はそれぞれ黒い陰となつて黙り込むしかなかつた。

その翌日の昼間。この街の空港に雄五郎の姿があった。

彼は運転手も付き人も連れず、自らの運転で年代物のロールスロイスファントムで乗り付けると、ロビー出口の脇に立った。

到着を告げるアナウンスが流れ、多くの観光客やビジネスマンが横を通り過ぎる中、雄五郎だけが直立不動で動かないでいる。なにげなくその姿にちらつと目を向けた者も、スカーフェイスを見てあわてて目を背けると、足早に離れてゆく。薄く目を開けて、雄五郎はじつとガラス越しに中に視線を注いでいた。

着便が到着してから30分がたち、機内から出てきた客はほとんどいなくなつた。

地方都市の空港なので、迎えの人もまばらになつたロビーは閑散としはじめている。

そこに突然、白い彫像が立つた。

そんな錯覚をしてしまうほど、田に突き刺さる美しさをもつた - - - -ひとりの女性だった。

つばの広い純白の帽子を小粋に頭に乗せ、同色のシルクサテンで出来た、ボディラインにフィットした足首まであるドレスの裾が、優雅になびいている。

彼女はヒールの音も高く、出口に向かって歩みだした。

その姿はまさに西洋の類稀な彫像か絵画のモデル。

「だれあれ？ 女優さん？」

「いや、海外のモデルじゃないか？」

そうささやきながら自分を見つめるロビー全ての人々の視線などど

「吹く風で、彼女は平均台の上を行くよりまづすぐな足取りで進む。

綺麗な曲線を描く口元が、わずかに微笑んでいた。

その白い天女がロビーのガラス扉をくぐつた時、雄五郎は、この愛想のない男のどこにこんな声が隠れていたのかと怪しむほど優しい声音で彼女に呼びかけた。

「おかえりなさいやし、姉さん。」「足労いただき恐縮です」

自分に向かつて深々と腰を割る老極道を、彼女は輝く瞳で見おろした。その目には恐怖も疑問も浮かんではない。

頭を下げるままの雄五郎の頭上に、教会の鐘のように澄んだ笑い声が降りかかった。

やつと姿勢を元に戻したその傷顔を、穴が空くほど彼女は見つめる。何者にも動じない雄五郎が、薦色の眼を見て逸らしてしまつ。その仕草を見て、彼女は形の良い口元を開いてまた笑うと、雄五郎に話しかけた。

躍動するフルートの声であった。

「ひをしぶりね、雄さん。でも「あねさん」はないんじゃない? もう組とはなんの関係もないんだし」

「失礼しました。ですが俺にとって、生涯「姉さん」と呼ぶお方はあなたひとりなのでつい・・・・・・」

虎が照れるような顔をして雄五郎がそいつた。

その答えを聞いて、彼女はとても可笑しそうに口に手を当てて上品に笑つていたが、やがてガラリと口調を伝法に変えると、久しぶり

の日本の空を眺めながらつぶやいた。

「まあ、せっかくこうして帰ってきたんだ。ここにいるあいだくらことは、あなたにあねさとつて呼ばれるのも悪かないね」

青空を見る眼が細められ、瞳が女神のそれから、日本刀の冷たく冴えた輝きになる。

そう彼女こそ、旧姓・幽姫。名は凜。

湿った空気を吹き飛ばす、爽やかな風をその身にまとい、洋一の母・凜が帰国したのだった。

雄五郎の運転するファントムで自分のマンションに帰ってきた凛は、中に入るなり、迷わず寝室に向かつた。  
確かめるように室内を見回してから、ワードローブを勢いよく開いて中を確かめる。

念入りに引き出しまで調べてから、次にドレッサーにいくと、そこにある物を眼でさっと追つた。

付き従う雄五郎に背を向けた彼女の表情はよくわからない。

次にキッチンに足を向けると、右手のバークウンターを一瞥した。  
そしてリビングに歩き、西向きの窓のカーテンを一つと開いて外に目を向けながら、綺麗にとがったおどがいに細い指を当てて、うーんと声をあげた。

何かを考えているらしい。

その後ろに、背筋を棒のようにぴしりと伸ばして、雄五郎がたたずんでいる。

考え込んでいた凛の表情が、雲の隙間から急に太陽が顔を出したようになるに明るいものになつた。

そしてすぐ、いたずらっ子の笑みに変わる。

かかとで綺麗なターンを決めて、雄五郎の方へと向き直ると、素敵な笑顔のままこうつた。

「なんかおもしろいことになつてるじゃないつ  
「は？」

意味がわからず、不審な顔をする雄五郎にかまわずまたいう。

「雄さん。どつか別の部屋とつてくれる?」

「え、」<sup>レジ</sup>やなにか都合でも悪いんで?」

「ま・・・・そんなどこかなア。なんならあんたんとこで毎晩飲み明かしてもいいんだよ。まアイロが家にいなきやだけどねエ・・・・

・・・ふふふ」

「ふふふ」

優雅から急にまた伝法と、くるくると猫の目のように口調を変えて、凛はからかうように雄五郎の顔をのぞきこむ。

「冗談を、と頬の傷をゆがめて彼は顔をそむけた。

ふふーんと困る雄五郎を眺めていたが、凛はまた外へと目をやると、青空に負けない透き通った声で笑いだした。

凛が帰国して一日たつたある日。

急な連絡を受けて、玲はあわてて待ち合わせの中央公園へ向かっていた。

落ちる陽のかげりで、芝生や道を行く人々がモノクロ写真に見える中、走っている玲の影だけが気ぜわしそうに動いている。広い公園の西側に並ぶベンチの前まできて息をついた。

等間隔に横一列になつたベンチの中央にある席で、ほつそりとしたシルエットがこつちに手を振つてゐるのが見え、また駆け出す。

薄暗かつたその姿が段々とはつきりとして、日本人には少ない、彫りの深いインディオのような若い女性が姿をあらわした。

浅黒く精悍な顔立ちで、流れる墨色の髪をそつけなくうなじのあたりでまとめていた。

目の前まできた玲が、肩を波打たせながら、両手を膝について彼女を見上げる。

洗いざらしたワークシャツとふくらはざの下でカットしたデニム姿の彼女は、スニーカー履きなのにやたらと大きく見える。

玲にはその訳がわかつていた。あの頃とはもう、身にまとつパワーオの大きさが違つてゐるのだ。

「ひさしひぶりー、レイ・・・・あ、清水さんー。」

「あはは、気つかわなくていいつて玲ちゃん。ここならレイラつていつても大丈夫だよ。ひさしひぶり。ありがとね、きてくれて」

笑うと凜々しいものが消えて、人懐っこい顔に変わる。

このアンバランスさと恐るべき声量の歌声で、ミユージックシーンに現れるや否や話題をさらつた彼女こそ、REI R Aの名で呼ばれる歌手の清水麗羅だつた。

じろじろと遠慮のない視線でレイラの姿をもつ一度みてから、玲は少し声をひそめる。

「でもレイラさん。変装とかしてなくつていいの？ ほら、サングラスとかさ」

「大丈夫よ。夜だし。それにアイドルじゃないんだから見つかつ

ても他人の空似でOK！」

ハスキーな声でこたえてから、レイラと玲は田を合わせると、同時に笑った。

その声と立ち姿のせいで、とても玲には見えず、もつと年上の大人的女性に玲には思えた。

「やつぱかつこいなあ……レイラさんつて  
ほやーつと呆けた顔で感じたままを素直に玲が口にするし、レイラ  
はなにも言わずに微笑んだ。

背後で燃え落ちる夕日を背負い笑うレイラの顔を見て、また玲はうつとりとした表情になる。

レイラがうながして二人は後ろのベンチに座った。

玲がまた顔を向けて話し出す。

「でもびっくりしたよー、もうこいつに来てるって聞いて。ライ  
ブは来月の頭の予定だから、てっきり直前に帰つてくるつておもつ  
てたし」

「あつちにいると雑音多くってね……それで早めにこつ  
ちきりやつた。メンバーには言つてきたけど、事務所にはナイシ  
ヨ」

レイラが少しうつむく。

その横顔を見つめながら玲は、いろいろと葛藤があるんだな、と感じた。

「じゃ、実家とかには？」

「うん、帰つてない。ホテルを転々と……かな。これ以上

迷惑かけらんないし」

「あたしん家泊まればいいよつ。それならバレないっしょー」

「ありがと。でもね、まだ不安定だから、もう少し一人でいたいかなあー、って…………」めんね

あわてて「ううん、いいって」とこたえながら、いろいろなことを言ったと後悔した。

「……」この人はもう大人なんだ。自分のやりたいことを貫ひつとしているけど、最低限の迷惑で済まさうってちゃんと考えてる。見た目と回り、力強いレイラの心を感じて、なぜだか玲の胸は震えた。自分みたいな子供が心配する必要などない。そうおもつたが、ついつぶやいてしまった。

「やっぱ思い通りに……つてわけにはいかないんだね……」

スニーカーのつま先で地面を蹴る。レイラが、うんとうなづく声が、ジャリッといつ十の音に混じって聞こえた。

「なんだかんだいっても、事務所は売る方だからね。冒険はでき

ないみたい」

「レイラさんならロックでもいけるとおもうけどなー」

見えないなにかに抗うように、玲は大きく地面を蹴り飛ばした。そんな子供っぽい仕草を見つめながら、「ありがと」そうぽつりとレイラがつぶやく。

けれどすぐ弱気な表情を消すと、暗くなつた夜空に顔をあげて、はつきりとした声でいった。

「でも自分で決めなくっちゃ。そうじゃないと歌 자체嫌いになりそつだから。それだけはしたくないの。だから今回のライブははつきりとした区切りになると想つ」

迷いながらも決めようとするレイラの気持ちを感じて、玲は胸を突かれた気がした。

クールな表面とはまつたく逆の、熱くまつすぐな内面を持つこの歌手のことをもつと好きになつた。

自分ができることをしてあげたい。

そう強く決意して、玲はライブプランを話しだした。

動き出したなにかを感じたようこ、きらめきはじめた星空こ、一筋の流れ星が瞬いて飛んだ。

関西から客人が来ているので挨拶を、と雄五郎から連絡を受けて、洋一は義隆の屋敷にやつてきた。

こんな用でもなければ絶対にくぐることのない門を抜け、迎えに出ていた雄五郎といつしょに広い庭を横切つて歩く。

洋一はここで育つていない。

この屋敷は彼が幼い頃に建てられた、ほぼ義隆と妾たちのための屋敷だった。

中庭に面した座敷間の開け放たれた障子の奥で、大きな紫檀の卓を挟んで向かい合う二人の男の姿が目に入り、洋一は雄五郎の後ろで顔をしかめた。

正面に座る義隆の脂ぎった顔を見てしまったのだ。

こちらに背を向けている男が客なのだろう。

明るい色の長い茶髪が、肩先で少し跳ねている。細身の身体を濃い鼠色のスーツで包んでいた。

めずらしくきちんとチャコールグレイの背広を着込んだ義隆が、庭先から歩んでくる一人に気がついた。

入り口に回ろうとする雄五郎に手で縁側から上がれと示してから、また目の前の男に向き直る。

座敷にあがつた洋一は、雄五郎が義隆の左に座るのを見てから、彼の左側に腰を下ろした。

あらためて男に目を向ける。

整った顔をした、色白で細面の野前だった。 ねそらへ自分と変わらぬ年だと思つ。

にこやかに田を細めて愛想よく微笑むその顔からは、同業の匂いはこれっぽっちもしない。

だが洋一は、この男に剣呑なものを感じた。

そしてまだ言葉も交わしていないのに、気に入らない奴だと思つ。

いつもならすぐ理由を探るのだが、今の洋一は、全てに対し受身になっていた。

言つなれば、心がくすぐついていたのだ。

「若、紹介しますわ。 これがわしの息子の洋一です」  
男がこちらを見た。 何も言わず、そのまま同じ笑みをつづける。

「ひからが本家の直若・鬼小島組の一一代目、氷室雄也やんじや」  
義隆が顔を自分に向けてきたのを無視して、洋一はじつと男を見つめる。

「はじめまして、どうぞよろしく」

そう挨拶して、雄也という男は頭を下げた。 張りのあるはつきりとした声だった。

「鬼小島の若は仕事でこひこいらしての。 そんでその手伝いを頼まれたんで、お前らを面通しさしこあもおて呼び出したんじや。 その手伝いゆうんがの・・・」

義隆の話を洋一は半分も聞いていなかった。

ようやく田の前の雄也とかいう男に対する不快感の訳に気がついた

からだ。

笑顔で義隆の方を見ながら雄也は話を聞いているが、その目の動きが読めない。

初めて正面から見た時と変わらず、瞼同士がくつつきそつなくらい細められたままだ。

穏やかな表情に騙されていたが、その細められた目の意味が洋一にもやつとわかったのだ。

「…」いつ・・・・目の色や動きを読ませない「」ように、わざと細めてやがる

己の心中を悟らせず、また相手に警戒されない「」。 そうしながらじつくりとその人物を確かめているのだ。

ヤクザでは老練な大親分クラスがよく使う目だつた。

自分以外の者には決して気を許さない。

ヤクザには多いタイプだが、雄也の目は徹底してそれを意識している事を物語っていた。

気がついてしまうと、ますます気に入らない気分が高まってくる。知らずに相手を睨んでいた洋一の耳に、聞き覚えのある単語が飛び込んできた。

「・・・・・での。そのレイラ・ちゅう歌手を探しにこられたわけじや、鬼小島の若は」

無表情で端座している雄五郎越しに、洋一が義隆を見た。

横顔に、金儲けとは違う欲の色が浮かんでいるようにおもえた。

「相手は大物らしいけん、大事にならんしだ」 そり連れ戻して

くれつちゅう音楽事務所からの依頼なわけじゃ。 洋一、雄五郎。組のもんに探すの手伝つようにゆうとけ」

仮死状態だった洋一の頭が、軋む音を立てながらも動き出した。

「…………めんどうな雰囲気になつてきただじやねえか  
そう思つた時、めらつと胸に炎が揺らぎ、その赤い火が恥骨の奥に  
点火されたのを感じた。

女装もしていないのに疼きはじめたそれは、危険な匂いを嗅ぎ当りて喜びながら、チクリチクリと甘い棘で洋一を刺しあはじめる。

「…………ここは敵だ。 あ、やつちやねつよ。 やつすれ  
ばもつと…………」

表情に出さないよつに苦心しながらも、段々と囁つきが妖しくなつてくるのがわかる。

その時、雄也の目が自分を見た気がした。  
だが、顔は義隆の方を向いたままだった。

「…………それからの。 今度この若の口ぞえでうちらが本部  
入りできるかもしけんのじや。 まあそれにはよオケ玉がいるんじや  
けどな。 それでシノギをまた見直さないかん…………」

義隆がさりげなく言つた言葉は、疼きに耐える洋一の耳を素通りしてしまつた。

しばしの静寂の後、雄也は胡坐から正座に姿勢を改めると、わずかに後ろに下がつて三つ指をついた。

「やつこつひつて、ようじゅつねたのみもつしまわ」

頭を下げる時、右目だけが大きく開き、自分を射抜いたのを洋一は

はつかりと見た。

義隆の屋敷を出た洋一は、雄五郎のファンタムに乗せられて、車中の人となっていた。

ふと横顔を照らしていた陽光に冷たさを感じて窓に手をやると、もう日が落ちかかっていた。てっきり組事務所に戻るとおもっていたのだが、車は別方向。繁華街の外に向かっている。

「おい。どこいってんだ？」

「会長に言いつかつた用事がありまして、若にも同行してもらいます」

横目で睨む洋一を見ずに、雄五郎はまっすぐに前を向いたまま、わずかに口を動かした。

それ以上たずねる気を失つて、また外をながめる。

環状線の高架橋から下に見える家々の向こう、海の彼方に日が沈んでゆく。

どこか物悲しさを感じさせる、その燃える落日を見ているうちに、思い出せないよにしていたシンの顔がよみがえってしまった。

仕事もほつたらかしで今も探しているが、それもどことなくうわべだけで、必死になれないことに早くから気がついていた。理由もわかっている。だがそれは誰にも言えぬ想いだつた。

本当はシンがまた自分の前に姿をあらわすのが恐かった。

あの夜、あきらかに舍弟としての絆を越えてしまったシンに、やがて  
いつ顔をして会えればいいかわからない。

『凛花のことを男として見てない気がしてた……』  
玲の言葉が深く胸に刺さったままだ。

凛花と自分は別だと考えていた。  
女装は楽しみであつて、それ以上でも以下でもない。

『凛花のこと、本当の女の子っておもつてんじゃないの?』

快樂のために見失っていたことが、玲の言葉で明確にその姿を見せ、  
いやでも気づかせてしまう。

そり、いつの間にか凛花と洋一は同化していた。  
今の自分は男でりながら女の心を持っている。

なぜならシンに抱かれた時、嫌悪感もなく拒みもせず、力が抜けて  
しまった。

わからないが、これ以上進めば、もう本当に引き返せない場所まで  
いつてしまう。

それは死より恐ろしことのように洋一には思えた。

男と女の境すらあやしくなつてこる自分。

……またシンに会つて、もう一度、触れられてしまつたら・  
・・・・・

ついで言葉を洋一は殺した。

音が聞こえてこないファンタムの中で、頬づえをついたまま、そつと田を閉じた。

半時間ほど走つて着いた場所は、古い町並みが続いている、閑静な屋敷町だった。

唐破風の大きな門構えの前に止まって二人が降り立つと、ファンタムはすっと走り去つてゆく。

すっかり暮れてしまつた薄暮夜の中、長屋門をくぐつて、飛び石の敷かれた小道を歩いて玄関へと立つた。

雄五郎が明かりが奥に点る引き戸をからりと開ける。もの言わず、二人は中に上がつて歩き出した。

しーんと静まり返つた渡り廊下を歩む足の下で、檜板がぎしりと軋む音を立てた。

義隆の家ほどではないが、かなり広い屋敷らしい。

いくつもの間を通り過ぎ、三度ほど角を曲がつた先が行き止まりで、雄五郎はそこで足を止めると、右手の障子を開けた。

暗く沈んでいた間が、つけられた明かりの薄い光に照らされて中の様子を映し出す。

二十畳ほどの畳座敷で、そこには誰もいない。

よつやくこの状況に不審をいだいた洋一が立ち止まつた。そしてゆきとくと部屋の奥へと進む雄五郎を呼び止める。

「おい。 ここに誰が来るつてんだ」

答えない雄五郎の体が床の間の前で止まり、しゃがんで正座すると、刀架に掛けられていた白木鞘の太刀を手にする。

膝立ちで、きよつとする洋一の方を向くと、それを左脇に置いた。

「もうきてまか

「あア？」

三白眼が洋一を見た。力を込めてそれを睨み返す。

「会長の言つてますで、若の背中に墨を入れさせてもらひます」

ヤクザ者としての永遠の烙印を意味するその言葉に絶句する洋一は、畳み掛けるように雄五郎の声が覆いかぶさる。

「極道として生きてゆく覚悟を固めてもうたまです」

その一言で、前ならすぐには背中を見せて逃げ出していくだろう。だが今はそうする気は起こらなかつた。

それどころか、治まつていた甘い疼きが火を噴くように燃え上がるのを感じる。

「素直に俺が言つておいたとでも思つてんのか？」

「いいえ」

「刀に賭けても……そういう意味か？」

「そうです」

話し合いもなにもない。

同時に二人は刀と小柄を抜いた。

両手の指に一本の刃を握った瞬間、女装もしていないのに、洋一は凛花に変化していた。

この身体を、この肌を傷つけるなんて許せない。

腰を落とし、片ひざをついて、鳥が翼に力を溜めるように、両腕を後ろに引いて構える。

そんな凛花を見て、雄五郎がいぶかしげな眼をした。

「 - - - - 若が何かに変わった。なんだこいつは?  
さすがの老極道も、この変化は見抜けぬらしい。」

声をあげればバレてしまう。

理性ではなく冷静な保身が、凛花の口元を引き締めた。

『 まあ、やつちやおつ・・・・・・ 』  
切り裂いても大丈夫

あの夜と同じ、危険な部分がそつとやさき、そして雄五郎の殺気に反応して高まる。

止める者は誰もいない中、間合いに入られる前に、凛花の両腕が交差するように前に動いた。

左手の小柄が上、右手が下を狙つて飛び、雄五郎の全身に集まる。見切つてわずかな足さばきでかわそうとした時、飛んでいた小柄が上下の位置を急に変えた。

「…………」

辛うじて一本を峰で弾いたが、残りに肩と足を切り裂かれ、雄五郎は口元をゆがめる。

その隙に、凛花が引き戻した小柄に向かつて、中腰のまま前に駆け出す。

走りながら指の間に納めた刃を、雄五郎目掛けて真横に振った。その腕を狙つて上から落ちてきた刀を、左手の小柄ですりあげてかわし、その手で下段から斜めに薙ぎ上げ、後ろに駆け抜けた。

すばやく向き直った凛花の眼に、斜めに切り裂かれた雄五郎の背中が飛び込む。

切れて垂れ下がる、背広と白いシャツの隙間から刺青が覗いていた。描かれた唐獅子の目玉が、凛花を睨みつける。

背を向けたまま、雄五郎は左手でネクタイを巻り取ると、ボタンごと引き千切つて背広とシャツを脱ぎ捨てた。

ありふれた唐獅子牡丹の鮮やかな絵柄が目に沁みる。

だが何かが違う。濃く赤い花弁が牡丹ではない。

それは真紅に乱れ咲く紅椿。

刀をだらりと下げたまま、ゆっくりと雄五郎が凛花の方を向く。老侠客が、口の端を吊り上げ、にやつと笑つたのがわかつた。

「俺ア、先代に十九の時に拾われてすぐこの墨を背中にいれた。牡丹の代わりにこの紅椿しょつて、白れエもんも黒く飲んで、組に弓引く奴アこの手でぜんぶ叩つ斬つてきたんだ。

大恩背負つたこの背中。斬れるもんなら斬つてみなせえ……！」

雄五郎の身に獅子が宿つた。

無造作に間合いを詰めると、防御もなにもなく、雷のような一撃を上から凛花曰掛けて叩き込む。

『受けても押し切られる！』

とつさに右に転がつて避けた。

だがそれを狙つて、槍のように切つ先が襲つてきて、凛花が転がる畠に穴を開ける。

必死で間合いを切つた凛花は、ハアハアと荒い息を吐きながら、立ち上がつた。

あの夜など比ではないくらい、物凄い速さで快感が押し寄せてくるのがわかつた。

肩でつく大きな息遣いの中に熱い吐息が混ざる。

同じ歩幅で、滑るようにまた雄五郎の巖の身体が凛花へと向かつてきた。

その手足を狙つて小柄を飛ばす。

揺らぎもせず、切り裂かれながら、まっすぐに雄五郎は刀を振り下ろした。

手を突いて、右後ろに飛んでかわした凛花の目の前で、畠みに深く突き刺さつた刃が明かりを受けて鈍く輝く。

激しい攻防をつづけながら、高まる快感の波に浸る凛花の胸のうちで、煙のように消えかかっていた理性が、懐かしいものを呼び覚ました。

大きく駆けて距離をかせぐと、凛花はまた始めの態勢に戻つて腰を落とした。

幼い頃、いつもこの男に庭で打ち据えられた。

苦く辛い思い出だつたはずなのに、それが今、ひびくあたたかく感じられるのはなぜだらう。

こうして戦いながらも、自分に真剣に向かつてきた者は、この男とあと一人だけ……

想いはそこでふつりと途絶え、エクスターへと昇る高い波がやつてくるのがわかつた。

小柄を挟んだ指から力が抜けそうになり、ぐつと脇を締めた。だが全身は総毛立ち、小刻みに震えだす。

肩ひざをついたまま、うずくまつて凛花はやってくる快感に耐えるしかなくなつた。

その変化に気づいた雄五郎の目が、わずかにひるんだが、それもつかの間。

「おう！」

裂帛の氣合と共に、刀が上段へと振りかぶられた。その時……

・

「ちよいと待ちねエ！」

開け放つてあつた入り口から、しわがれた男の斬るよつな声が響いた。

振り返つた雄五郎と、その肩越しに視線を向けた凛花の目に、小柄な老人の立ち姿が飛び込んできた。

両腕を胸前で組んで、足を踏ん張り自分たちを睨んでいた男がまた口を開く。

「仕事だつてエからきてみりや、なんでえこのやまアよ。斬つた張つたで入れなきやならねえ彫りもんなんぞ、この世にねえぞ。いいかげんにしろイ！」

吐き捨てるように吠え立てる男の背後に、すう一つ立った人影を見て凜花が洋一に戻った。

かあさん！」

前に自分が着てしまつた真紅のチャイナを身に付けた凛が、晩香玉の花のように艶やかに微笑んでいた。

「うむ」と雄介は。そのへんにやめとねな。鬱久のねじねつのことおづだよ。わつ田代が変わつたまつてんだら、それじや」

パタパタと扇子で顔を扇ぎながら、凛乃の目が雄五郎を見、そして

刀を下ろすと、雄五郎は恥じるよう斜めを向いてうつむいた。

周玄は、一か一かどその脇を通じ過ぎると、置に軽かごでした鞆をつかんで、雄五郎の足元にほおつた。

すると、田も覚める鮮やかさで手を閃かせて中に納めた。  
そして刀の柄頭で、トンと軽く雄五郎の胸を突いておさげ。

「まあ、あんたの想いもわかるけどさ。せつかくいいして帰ってきて

たんだ  
後にはあたしにまかせておくわよ

菩薩の笑みを浮かべた。

「ひさしぶりだね洋一。 ちよいと見ない間におもしろい面になつ

ちまつてんじやないかい

かわん……ト、たんじゅ

「ああ、あつちは籍があるってだけでね。ほんぢじゅぜといつし

よに世界中を転々としてんのよ。あゅうビ今はバンコクにいたから、顔見せにこつち寄つたつてわけ」

伝法な口調を突然あらためてまた微笑むと、ポンと洋一の肩を叩いてから、肩越しに振り返る。

「彌玄のおじさん。名人をこつち呼んぢて悪いんだけど、そういうことなんだよ。すまなかつたね。この埋め合わせはきちつとするから、今夜のとこはあたしの顔に免じて許しておくれな」

凛の言葉に、傲岸だつた彌玄の顔が、皺の多い笑みに変わる。

「へへへつ。凛ちゃんにそういうわれちやこつちも何も返すお題がねエや。あいよ。このままひつこましてもらうわ」

ちらつと雄五郎の方を見て、田配せしてから、凛は放心氣味の息子の身体を抱えて立ち上がつた。

その胸元から立ちこめる、夜来香の匂いをかいで、洋一の瞳が懐かしさと安心で潤む。

屋敷を出て門前に立つと、凛は止めてあつたメツキグリルの古い英國車 - - - MG - Bの助手席に洋一を放り込むと、屋根のない車内を照らす月明かりの下を走り出した。



時間を凜が帰国する前に戻そう。

警察から解放されたシンは、兄貴分の狂介がマル暴の刑事に挨拶している間に署を出て、駅へと向かっていた。

偶然がさせたこととはいえ、ああして自分の想いを凜花にぶつけてしまった以上、この街にはもういられない。  
そう考へての行動だった。

言えてよかつたと荷物を下ろしたような安堵感と、口にしてしまったことで空いた胸の穴の空虚さが、足を早めながらも身体を重くさせていた。

他にも様々なことが頭の中で渦巻き、いつもは姿勢よく歩くシンの背中を丸めさせ、顔をうつむかせてもらいた。

所詮は届くはずのない想いだったのだ。  
だが後悔はしていなかつた。

兄貴を慕う気持ちが、凜花の美しさですり替わってしまったのかもしれない。

留置所の中でそう考へたりもしたが、そんなに単純なものでもないだろう。

積み重ねられた一つ一つが綾なしてできた想いなのだから。

先のことなど何も考へられなかつたが、自分一人の始末などいつでもつけられる。

今はこの街を離れて、あの夜を抱いて、どこかでゆつくつと過ぐたかった。

「凜花さん・・・・・・」  
小さくせつづぶやいた時、やわらかいものに右手を掴まれて振り返つた。

穏やかなフェルメールの絵の中の光に似た夕日に染められて、火女がシンを見つめていた。

音楽も客もないあのバーへと連れてゆかれ、夜が更けるまで二人は何も語らず、  
ただグラスを空にしつづけた。

そしてバーを出ると、誘いの言葉もないまま火女に手を引かれ、入り組んだ路地のどんづまりにある古びた建物の一室へ入つた。

旅館なのかアパートなのかよくわからない、殺風景な部屋だった。その中にシンは倒れこむと、湿りを感じるカーペットの上に身体を丸めて横になつた。

火女はその後ろにあるベッドの縁に腰掛けて、外を見ながらジタンを煙に変えはじめる。

小さな窓越しから差しこむ、輝くネオンの明かりが、そんな二人を

様々な色に染めていた。

数本のジタンが灰になり、乾いた牧草の香りがする白い煙が部屋に満ちた頃。

落ちそうで落ちない、酔いに浮かぶ眠りの岸にいたシンは、背中から火女の身体に包まれるのを感じた。

すぐにその上から白いシーツが膜のようにかぶさる。

乾燥した布と人肌の匂いが漂ってきた。そして、熱い血のぬくもりが伝わってくる。

それがシンの瞼を閉じさせた。

火女は一言も口をきかず、ただ男の身体をその胸にかかえ、あたためつづけた。

頬に日の光りを感じてシンが目を覚ますと、それまで蓋っていた火女の身体が離れて立ち上がった。

寝転がつたまま見送った彼女の背中が、音もなく開かれたドアの隙間に滑り込んだかとおもつと、閉じられて消えた。

- - - - - ずっと・・・・・ おきて、いたのか・・・・・

それだけおもつた。

南向きの小窓から差し込む太陽は、シンを照らしながら少しづつ動

いてゆくが、思い出の中に埋没する彼の身体は、わずかにみじろぎだけだ。

白黄だつた陽光が、やがてオレンジの黄昏に変わる頃、大きな買い物袋を両手にさげて火女が戻ってきた。

彼女は部屋の隅にあつた小さなテーブルを出してくると、雑多なオードブルとアルコールをその上に並べた。

火女はシンにすすめるでもなく、自分一人でいるように、少しづつ肉や野菜の煮物を口にしてはビール、やがて赤ワインを飲んだ。

夕日が月にとつて代わり、昨夜と同じネオンの火がともる中、街のざわめきから切り離された部屋の中で、火女はまたシンを抱き眠つた。

そんな、物音しかしない日々が、三日で渡つて続いた。

四日目の夜。脂じみて髭が伸び、前の面影がすっかりなくなつてしまつたシンが、干からびた口を動かした。

「・・・・・なんでこんなことをする？」

長く出さなかつた声は、ひび割れて聞こえた。

「お客だからね」

赤ワインを口にしていた火女は、そつけない物言いで、シンの方を見もせずにこたえる。

意味がわからなかつた。

「娼婦じやなかつたのか？」

膝を抱えて座つていた火女が、クスッと笑う。

「そうよ、娼婦。 でもあたしはちょっと変わッててね。 気に入つた男の相手しかしないの。だからあんたは自分で決めたあたしのお客」

明かりをつけていない部屋は、原色のネオンのせいで、水槽のよつに感じる。

その水の空間の中、火女のグラスを持った手が揺れていた。

彼女の華奢な肩を、意外に思いながら、シンはぼんやりと見ていた。

そんな夢とうつつの区別がつかない時の中で、濁んでいた空気が消え、すり一つと何かが流れはじめたのをシンは感じた。

『なんだろう、この感覚は』

そう考えた時、横になっていた自分の唇に冷たいものが押し当たられて、びくつと身体が動く。

ゆっくりとなぞる火女の指につけられていたワインが、干からびた唇を潤すのがわかつた。

苦く渋い酸味が、乾いた口中に少しづつ浸みて、ほんのりとした甘さに変わる。

甘味を感じた口が、別の生き物のように濡りを帶びて、生き返り始めた。

目を閉じじてされるがままになつていると、口がよみがえったのを悟つたかのように指が離れた。

数秒の間の後、目の前に火女がきた気配がしたかとおもふと、頬を手のひらで挟まれ、口づけされた。

彼女の中で、とろりと暖かなものに変わつていたワインが、静かにシンの中に注がれる。

受け入れて喉を滑り落ちた赤い液体は、空っぽの胃を熱く照らした。それから火女は、三田田と同じように、シンの背中を抱いて眠らせた。

田がすっかり高くなつて田を覚ましたシンが、まだぼーっとしている間に火女はすばやく立ち上がりて視界から消えると、すぐに湯気の立つ白いマグカップを手に戻ってきた。

横になつた世界の中、それが自分の前に置かれるのを、じつとシンは見ていた。

コーンとミルクの甘く優しい香りを鼻先に感じた時、パタンとドアが閉じる音が聞こえ、火女が出て行つたのがわかつた。

ようめきながら起き上がり、震える手でカップを包み込んで口をつける。

おだやかに揺れるポタージュの中に、一滴しづくが落ち、すぐに包みこまれて消えた。

そして時は凛と洋一が親子対面を果たした夜に戻る。

女装ルームを勝手に占拠して、玲・真紀・綾乃たちが、レイラのシークレットライブ開催のためのミーティングが行なつていた。

そしてなぜかその輪の中に牛島の姿があつた。

シンの足どりを求めて行つた警察署での大男に出会い、いきなり泣かれてから、玲は近くの喫茶店に飛び込んで、凛花のバー騒動に牛島が絡んでいたことを知つた。

凛花が無事だつたことに感涙、そして混乱している牛島を、なだめたりすかしたりしながらも、玲はこの男が持つてゐる情報をすべて引き出した。

その上で『こいつ使えるかも』というカンが働き、牛島をチームに誘つたのだ。

ちよろつと凛花の存在をほのめかすと、イチコロであった。洋一と出合つてから、彼女のその手のテクニックは冴えを増していった。

玲の司会の元、会議は進んでゆく。

「音響とかPA機材なんだけど・・・・」

「はいはーい。大学の連れでバンドやつてる子がいるから、僕がそれやります」

手をあげてこたえた真紀の今夜の姿は、なんと紅白でおめでたい巫

女さんだ。

凛コレの中にもなかつた衣装を、綾乃がどこからか調達してきたら  
しい。たぶん本職からだろ？。

そのバチ当たりな女帝が、真紀の姿にとろりとした目を向けながら  
いつ。

「あと、衣装とかはあたしが手配します。玲ちゃん。レイラさん  
にどんなのがいいか聞いておいてちょうだい」

「わかつた聞いとく。ん～あと問題なのは舞台になるトレーラー  
よね」

うなる玲に真紀が不思議そうな顔をする。

「あれっ。それは凛花さんが用意してくれるんじや？」

一人だけ事情を知つてゐる玲は口をつぐんだ。

ほぼ抜け殻に近い姿をしてゐるので、今のあの男に何かをまか  
せるのは無理な気がしたのだ。

巫女服姿の真紀のことをジロジロと見て『ビッチなんだ？』と考え  
ていた牛島が、おつと口を開けて玲の方を向いた。

「トレーラーなら用意できるぜ。ただ舞台とかに改造つてのはムリ  
だけどよ」

三人に一斉に視線を向けられて、特に綾乃の妖艶な目に牛島がしど  
ろもじろになる。

「あ、いや、仕事で大型運転してつから、知り合いとかもいるんで  
なんとかできるかと・・・・」

尻すぼみに声が小さくなり、いつむきながらチラシと横田で綾乃の  
顔を盗むようにうかがう。

「うもこの男、お姉系の美人に弱いらしく。

まあ男なら誰でも振り返つてしまつのが綾乃なので、しかたがないことだつたが。

そこで唯一、彼女の美人度をよく理解していない真紀が声をあげた。

「とりあえず話しすすめるために、牛島さんトレーラーおさえてもらうのがいいんじや？」

そうね、同時に玲と綾乃がうなづき田を合わせたが、お互にすぐ横を向いてしまう。

「でもなんで凛花さん今夜いないんですか？」

真紀がなにげなく口にした疑問に、玲が目を泳がせたのを綾乃が見咎めた。

「なに玲ちゃん。 洋ちゃんになにがあつたの？」

「洋ちゃん？」

凛花の名が出て、瞳を輝かせて反応した牛島が、つづく『洋ちゃん』とこう単語を聞いて、片目をゆがめてたずねてきた。あつという顔になつた玲を、三人がじーっと見つめる。しかたなく玲は牛島の疑問からこたえだした。

「あ～えつとね。がつかりしないで聞いてよ。 凜花はね、男なの」なんとも言えない奇怪な表情で動きを止めてしまつた牛島を、真紀と綾乃はおもしろそうに見た。

タイムストップな大男はほつておいて、残る二人に話し出す。

「んとね。 凜花、洋ちゃんはちょっとといろいろあつて……。  
今はそつとしておいてあげた方がいいつていうか、近寄らない方  
がいいつていうか……」

歯切れの悪い玲の口調を聞いて、ああ、つと綾乃はすっかり忘れていた彌玄のことを思い出した。

「ひょっとして、入れ墨のことかしら？」

「イレーズミー？」

意外な単語を聞いて、オウム返しにたずねかえす玲に、綾乃は真紀と調べたことを話した。

「…………でね。洋ちゃんが無理やり入れ墨させられるんじゃないかって、ちらつと思つたのあたし」

普通に物騒なことをいつた綾乃に、玲と真紀がぎょっとする。

「ちよっとー」「ちらつと思つたのあたし」「じゃないでしょうがっ。それあいつにいつてあんの？」

あわててそういうた後、桜吹雪の入れ墨を見せつけながら「おうおう、てめえら！」と啖呵を切る、チヨンマゲ姿の洋一を想像してしまって、玲は頭を強く振つてそれを追い出した。

「ううん。でも大丈夫よ。シンちゃんついてるから

「そのシンちゃんが行方不明なのよ！」

今度は綾乃が、えつとおどろいた。

真紀はさつきからびつくりしつぱなしで、声もなくキヨロキヨロと二人に交互に顔を向けている。

牛島は、ついに魂が冥界へと旅立つたらしく、微動だにしない石像と化していた。

しかたなく玲は、シンが兄であることや、洋一の異変を一人に話した。

「ちよっとまざいんじゃないですか、それって」

心配げな表情で真紀がつぶやく。

「雄さんがいるから大丈夫だとはおもうけど…………」

綾乃も綺麗な眉をひそめて、自信なげな顔だ。

まさかその雄さんが先頭切つて刀を振り回して洋一を追い掛け回したとは、夢にもおもっていない。

ほつと一つため息を吐くと、伏し目がちに綾乃は言い出した。

「まあ洋ちゃんって前から思つてたんだけど、ちょっと中性的なところがあるから、あたしは女装とかそんなことになるんじやないかって気がしてたのよねえ」

「ちょっと待つた！ それってあいつが兄ちゃんのこと好きつて意味？」

玲の目がギラギラと不穏な光りを帯びる。

「冗談じやない、そんなことは許せなかつた。

実はシンの方がそつかもしれない、などといつことは頭から飛んでしまつっていた。

興奮する玲を綾乃是大人の笑みで抑えると、自分の意見を語りはじめた。

「うん、あたしもそれはないとおもうわ。 だつて洋ちゃんはいいかげんだから、そんな真剣できりきりした恋愛するわけないもの。もしもあるとしたら、それはシンちゃんも洋ちゃんのことが好きだつた場合だけよ」

綾乃の言葉を聞いて、玲はますます不機嫌になる。

「…………その場合つてのがもうおきてんのよー。  
そう叫びたかつたが、それだけはできなかつた。

力が抜けた拍子に、喫茶店で牛島から聞いたことが頭に浮かんでしまつ。

シンが凜花を抱擁の上にいつしょに逃亡したことを聞いた時は、うつと息を詰まらせてしまったが、話を聞いた後、洋一に問いただした時、なんであんな態度をとっていたか、そのわけがわかつた。

「……やっぱりそんなことがあつたんだ。

事実がわかつてつながつても、気分は晴れず、むしろ重くなつた。自分が見た兄の変化を話した時の、洋一の表情を思い出す。

「……あの時のあいつは、嫌がつてゐるようには見えなかつた。ただとまどつてゐるつてかんじだつた……」

どんどん自分が想像したくない方向へと兄と洋一は進んでいく。そんな風に思えてならなかつた。

めずらしく内面へと落ちていた玲は、妙にキレ氣味の妖しい声が聞こえて、はつと顔をあげた。

「まああたしもバイみたいなものだから、人のこと言えないけどね。おっほほほほほほ！」

「え！？」

さらりとものすじごとを言つて笑う綾乃に、玲と真紀の食い入るような視線が刺さる。

『うわあ……やつぱそつたんだ……』

真紀が口を半開きにして、半ば呆然として思つ。

『い、この人。実は一番のヘンタイだつたんだ！』  
夜中のキッチンで、ゴキブリを見つけてしまつた氣分になつた玲が、目と口をおもいつきり横に引っ張つてそう考える。

そんな一人の視線など気にも留めず、またカミングアウトした風でなく、『当然よ』とでもいったけりとした顔で、綾乃は真紀の手をとった。

さつと引こうとしたが指を絡められてしまい、どうすることもできず、真紀はそのまま撫でられてしまう。

そんな一人に、さつきと同じ表情のまま、玲がたずねた。

「…………まさか綾乃さん。 真紀くんともう？」

「おほほ。さてどうかしらア」

低いオクターブでいう玲に向かって、ちがうちがうと真紀が手を横に振る。

まるでそのポジションは、洋一と同じいじられ役だった。

と、その時、牛島が突如覚醒した。

ふんむうと、ヒゲが揺れるほど強く鼻息を噴出すると、叫んだ。

「男でもいい！」

「わあ～ここにも一人へんなのいるーっ！」

玲と真紀の合唱が女装ルームいっぱいに響いた。

天空に架かる輝く大きな』。

そんな新月の淡い月明かりの下、濃緑のMG-Bが、古風な排気音を奏でながら走っている。

ハンドルを握る凛の、うなじで留められた髪が、夜風にサラサラとなびいてシートの背面で踊っていた。

さつき洋一の前に姿を見せたときは、肩口でぱさりと切りそろえた髪だった。

そのウイッグが、ナビシートに座る息子の膝の上で、同じように入ってくる風になぶられたい。

おやりく今の髪型が本来の凛のものなのだろう。

月のせいで蒼白く光る青磁器にみえる母の横顔を見つめながら、懐かしく洋一はおもつ。

・・・・・ そういうえばかあさんは、いつも役者みたいに髪や格好が変わつてたよな

その趣味が自分に影響しているとは、考えてもみないようだ。どんなに姿形が変わつていても、一本通つた筋を感じさせる凛を、憧れの想いで見上げてしまう。

そんな母だから、不思議におもつていた。

「ちょっと近くまできたから」

そんな理由にもならないことで、わざわざ帰つてくる人ではないのだ。

口の端にほんのわずかに笑みを浮かべた凜の横顔に、訳をたずねてみたくて口をひらくけれど、声は喉の奥でとまってしまう。

そんな一人を乗せて、MG-Bはバイパスを抜けて郊外へと出た。ぽつぽつと家の窓に明かりが点る古い街道をゆくうちに、緩い勾配を上がり始めた。

登りきった先に見えたものは広い石段。

その下の玉砂利が敷かれた空き地に凜はMG-Bを停めた。降り立つた二人が見上げると、大きな山門が見える。

そこは洋一でも知っている、全国的にも有名な古刹の寺であった。

凜が石段を登り始めたので、あわててついてゆく。

百段以上あるそれを三つほどあがると、本堂が上にあつた。だが凜はそこを上がらずに、右手の藪を切り開いた小道の方へと入つてゆく。

緩やかにみえて意外ときつい坂道を登りきつたところで、急に平らな場所に出た。

100メートル四方のこんな広い敷地が、山奥にあるとは思えない。まるで桃源郷が突然目の前にあらわれたような錯覚を洋一はおぼえた。

向かつて奥に横に一棟つづいた日本家屋があり、左側の小さい家の方へと凜は歩いてゆく。

右の家は横長い集会所のようだったが、木の雨戸が閉まつていてよくわからない。

古びた引き戸を開けると、凜は自分の家のように三和土の壁にあるスイッチを押して明かりをつけると、パンプスを脱ぎあがつてゆく。

十畳ほどの座敷と台所、そして六畳の寝間があるだけの小さな家だつた。

凛は座敷の方へと洋一をいざなうと、「すわってなさい」そう優しく声をかけて、閉まつていた雨戸を開けてゆく。

濶んでいた空気が入つてくる夜風に散らされ、搔き消えていった。なぜか中央に正座して母の後ろ姿を眺めていた洋一の目に、開け放たれた戸の向こうから、市街地の明かりが飛び込んできた。

三方を海にかこまれた街は、まるで暗い空間に浮かぶ色とりどりの光の花束だつた。

鴨居に両手をかけて、凛も外を見ている。

鮮やかで美しい夜景を、母がその腕を広げて胸に抱いているように、洋一には見えた。

やがて凛は肩越しに振り返ると、洋一に笑みを投げた。

その神秘的な姿と、穏やかで優しい笑顔に、腰が抜けてしまつ。

あひるみたにへたり込んで正座を崩した洋一の横をすり抜けて、凛は台所に消えると、一升瓶と湯呑み、そして小鉢をさげて戻つてきだ。

ちよいちよいと空いている小指を曲げて洋一をまねき寄せると、戸の外側、濡縁へと誘う。

母子はそこに腰かけ、月を見上げ、光る街を見下ろした。

一人の間に置いた二つの湯呑みに、波々と酒を満たすと、凛は両足を前に投げ出した。

そして片足をひきつけ、立てひざになる。

チャイナのスリットが割れ、なめらかな腿が見えて、うつと洋一は

息を詰めた。

だがそんな莫連な姿も、粹な芸者のように美しかった。

しばらく凜は夜景を見つめていたが、やがて洋一の方へと身体を向けて、湯呑みの一つを手にすると、息子の皿をみてにこっと笑った。

「で、どうなつてんの？」

わつきは氣づかなかつたが、凜の声の端に少しだけだが、おつとりとした土地のイントネーションが混じつていて、

洋一は自分の前で、凜が母親に戻つたのを知つた。

涙目になつた洋一に、細い指でもつ一つの湯呑みを指し示して飲むようになながすと、自分も口をつけながらまた前を向いた。満ちてきた安心に押され、シンがいなくなつてからずつと重く閉ざされていた口が動き出した。

やくざの道への疑問、女装のこと。それに伴つてあらわれた危険な魔性のこと。  
そしてシンのこと。

若こときにはできなかつたが、今、生まれてはじめて母にむかつて想う事のすべてをぶちまけた。

凜は一言も口を挟まず、時おり酒を口にしながら、外を見つめて話を聞いている。

重要な部分を話すときだけ、洋一の顔を見た。

そんな姿に向かつて話していくうちに洋一は、なぜか母はもう自分に起きた出来事の大体のところを掴んでいる、そんな気がした。

洋一が語り終えても、凜は何も意見を言わなかつた。

「飲みなよ。雄さんがもつてきてくれた、いい酒よ」  
そうすすめただけだ。

湯呑みを手にしながら、ふと洋一は雄五郎と凜の間をおもつた。  
記憶の中に一人がいっしょにいた光景はなかつたが、あの因業な老  
人と母に何かつながりがあるのだろうか。

そう考へながら口にした酒は、馥郁とした味わいだつた。

すべてを語り終えたのに、まだ心の中に硬い芯が残つてゐる。  
その芯が人の形をとろうとした時、となりで声がした。

洋一、そつ凜が言つていた。

「いいかい？ 人は一つしか心を持てない。いくつに見えても、  
それは一つのおまえ自身なんだよ」

よくわからなかつた。

見つめる洋一の視線を受けて、凜はまた笑顔を浮かべるといづけた。

「迷いは迷いのままでいい。胸に抱えるんじやない、外に出して、  
その腕に下げてこきな。 そうやって歩いていや、いつの間にか別  
のもんに変わつてゐるさ」

まだよくわからなかつたが、なんとなく伝えたいことを受け取つた  
気がした。

目の奥にそれをみたのだろう。凜は洋一を抱き寄せると、軽く背中  
をたたいてから手を放した。

あたたかなぬくもりと、やわらかい肌の香りにほんやりとしてしま  
う。

だから自然と疑問が口から出たのだろう。

「かあさんはなんでまたもびつてきたの？」  
声が半ば凜花、そして幼子の口調になつてゐるのと、洋一は氣づかなかつた。

くつと片方の脣を上に曲げ、凜が笑う。

女神のようだつた笑みが、精悍な笑い顔に変わつた。

「忘れ物をおもいだしてね」

それはなに？とまたたずねよつとした洋一の前で凜が立ち上がつた。

「つづきはまた明日。 今夜はもう寝よつ」

寝間にいくと、押入れの中から布団を引つ張り出して、手早く凜は一つ並べて敷いた。

そして着替えもせずに、そのまま片方に潜り込んだ。  
あつけことじれっていた洋一が、しばらくして膝立ちで枕元ににじり寄ると、もう寝息をたてて凜は眠りの世界へと旅立つていた。

『なんでかあさんはこんなに軽やかに生きれるんだろう』

不思議におもいながらもうらやましくなり、洋一は子供の笑みを浮かべて眠る凜の顔を見つめ続けた。

翌朝、洋一が目覚めると、となりに布団がなかつた。

かわりに木綿の胴着と紺色の袴がきちんとたたんで置かれていた。

いぶかしく思いながらも、起き上がりつて台所へつながる戸を開けると、煮物の香りと温かさがむつと全身を包んだ。

目の前に同じ胴着と袴を着けた母の背中があつた。

トントンと刻む包丁の音が聞こえ、すぐに葱の匂いが鼻をつく。凛がコンロにかけてあつた鍋の蓋を取ると、まな板の上のそれを中に入落としてまた閉める。

そしてぐるりと振り返つた。

「そこに座つてなさい」

洋一がまだぼやつとした顔のまま、小さなちやぶ台の前に座ると、じきに朝食が並べられた。

あじの開きにじじみの味噌汁。そして若布と胡瓜にちりめんじゅうの酢の物、蕪と生菜の香の物。

簡単な物なのに、どれもすばらしく温かつた。何十年も口にしていなかつた味だ。

むさぼり食つ洋一を笑いながら、凛も同じ物を並べると、向かいに座つて口こする。

先に食べ終わった洋一は、母の手早いのに優雅に見える箸使いを、舞でも観る気分で眺めた。

「なんでそんなに立ち振る舞いが綺麗なの？」 そうたずねたりきつと凜は

「舞踊とかやつてゐからかなあ」と軽くこたえるだろ。人の何倍もの物事に手を出し、それを身に付けてきたからこそ美しい母の姿を見て、あらためてその優しさに気づいて信奉してしまう。

凜の食事が終わり、淹れてくれたほうじ茶の香ばしさを楽しんでいると、声がかかった。

「着替えたら庭に出ていらっしゃい」

その言葉に何かを感じて、洋一はそこで湯飲みを置くと、奥の間に戻つて急いで胴着と袴を身に付けた。縁側に出て気がついた。

昨日は夜でわからなかつたが、広くなられた何もない庭の向こう端に、藁を巻きつけた棒が八本、等間隔に並んでいた。

自分の着ている物とその光景を頭の中で合わせた時、今から起きるであろうこの予感に、おもわず身震にしてしまう。

また寝間に引き返すと、いつも肌身離さずに持ち歩いている、小柄を納めた革の腕輪を手にして縁側に行くと、素足のまま藁棒の方へと足を進めた。

洋一は的の前、20メートルほどの位置に立っていた凛のそばに立つた。

母のしなやかで長い指のあいだに八本の小柄が握られているのを見て、背筋が引き締まる。

菊池流の小柄は通常の物と違いやや長く、20㌢ほどあり、刃の部分が平たく、横幅が二倍もあった。

刀身も厚みがあり、尖端から鰐元にかけて段々と厚味が増してゆく、独特の造りだった。

ぱっと見は日本刀を縮めた普通の小柄だが、この工夫が読めない動きを生み出すのだ。

その拳動を柄尻に結んだピアノ線ほどの細引き紐 - - - 苺麻といふ纖維を編んだ強靱な綱 - - - で、さりにあやつる。その技を集成したものが、菊池流だった。

凛の顔が自分に向けられたのを感じて、目を合わせる。

その目が「いいかい?」そうたずねていた。

一度大きく深呼吸してからうなづくと、立っていた凛の身体がビンッと伸びたのがわかつた。

まっすぐにの方を向くと、左足の前に少し右足を出すると、右手を軽く曲げて頭の上に、そして左手を水平に寝かせて胸前で構える。フランメンコダンサーのようなポーズだった。

数分の静寂の後、野鳥のさえずる甲高い鳴き声がして、それが合図のように、うつと凛の頭上にあつた右手が半月の形を描いて閃き降りた。

その瞬間には片ひざ折つて腰が地に落ち、左手が真一文字に横に斬り薙がれ、最後に両手が耳元に上がつて、疾風のごとく前に振られた。

その時、初めて洋一は、両の手の平にも小柄が一本づつ握られていたことに気がついた。

右手から放たれた小柄は、的を大きくはずしてかなり上を飛んでいる。

左手のそれは地を駆ける獸の勢いで、地面すれすれを飛び、最後の一一本はまっすぐに中央の的に向かつていた。

『攻撃の意図が見えない』

そうおもつた時、凛の右指が複雑な律動を見せ、同時に左指が、くんつと小さく跳ねる。

鍵盤を叩くピアニストのアクションに、細引きで繋がれた小柄が反応した。

的の真上にきた小柄が飛ぶのをやめ、飛蝶の動きに変わつて落した。

同じく地上をゆく小柄が、燕のよつに鋭角に飛ぶ角度を変え、斜め上に走る。

的の頭上に落ちる小柄は、花が風に巻かれるよつに、螺旋に舞い乱れた。

「あつ」

意図がわかつて声が出た時、十本の刃は八本の的にそれぞれ突き立ち、朝日にその刀身を鈍く光させていた。

立ち尽くす洋一の耳に、確かな凛の声が響く。

「秘伝、桜花乱舞」

初撃の的外れの小柄は陽動。いや、地上のものも一本も、三つの動きそれぞれが、マジシャンが振る赤いハンカチのように宙へらましのフェイントかもしれない。

相手の動きに合わせ、そのどれかが本当の攻撃に変化するのか？

そこまで考えたとき、構えを切つた凛が立ち上がった。

「直上からくる攻撃が一番避け難い。しかも動きが螺旋だ、まずかわせないよ」

静かにそつ語つた後、急に凛の表情が溶けたように緩み笑顔になつた。

朝日を頬に受けながら、手を細めて声なく笑う。

「これが忘れ物よ」

なんで今になつてこれを？

その疑問を洋一は飲み込んだ。母が意味のないことをするわけがない、そう確信していたからだ。

固い顔をしたままの息子の手をとると、凛は引っ張つて家の方へと戻りはじめる。

「せ、あとは道場で教えてあげるよ」

シンがいなくなつてわだかまつていたものを、洋一は忘れていたことに気がついた。

そして母との再会の喜びを、やつと素直に感じられた。

今、やる事ができたことで、固まつていた心がほぐれ始めたのがわかる。

取られた手を強く握り返すと、洋一は力を込めて、自分の足で歩き出した。

火女とシンが出会ったバー。

夕刻、まだ closed の札が下がっているその扉が開いた。

火女が姿を見せ、白い布で丁寧にカウンターの上を磨いていたマスターの前までくると、すぐそばの席に腰掛けた。

別に気にする風でもなく、マスターは一連の動作のようにカウンターの内側へ入ると、布をたたんでステンレスの流しの横に置き、足元のアイスボックスから緑色のペリエの小瓶をつまみ、火女の前に出した。

ペリエに手を伸ばした彼女の右手が、瓶に届く寸前、マスターの声がした。

「お嬢……」

火女の手の動きが静止画像のように止まる。

いつ見ても眠たげだったマスターの目が薄く開けられ、火女を見つめていた。

火女はいつも、下はデニムで上はカットソーといった、ラフで動きやすい格好だったが、今日は黒のリクルートスーツにタイトなスカートと、会社勤めの身なりだ。

目がきつめで、どちらかといえば派手な顔立ちなので、お世辞にも似合っているとはいえない。

「ああ、ちょっと妙な奴がこっちに入つたって聞いてさ。調べてたんだ」

珍しい自分の姿を見て声をかけてきた、そうおもつた火女が自嘲気

味に白い歯をみせながら笑つていつた。

「やうじやありませんよ」

否定したあと、マスターの能面を思わせる固い無表情が崩れ、顔に笑みが浮かんだ。

きちんと歳をとつてきた男がみせる、いい笑いだ。

けげんな顔をして、ペリエの瓶をつかんで飲む火女を眺めながら、またマスターがしゃべる。

「ひそしぶりに顔が笑つてますよ、お嬢」

うつと息が詰まつた顔で、火女が喉の動きを止めた。その姿にくくくと喉の奥でマスターがこらえきれない笑い声をたてる。カツと火女の顔が赤くなり、拳を握つてなにか言おうとカウンターに身を乗り出すが、笑いつづけるマスターの顔をみると急に力を失くして、またストゥールにトンと腰を落とす。そしてペリエの瓶をひざの上に置き、両手を添えてうつへいた。

「わかる?」

鉄火で蓮つ葉だつた口調が、恥じらいを含んだものに変わつた。

「はー。穏やかで・・・・・・とても綺麗ですよ」

満更お世辞でもなさそうな口ぶりでマスターがこたえる。くるくると手の中で瓶を回している火女を包む、優しい言葉がふわりと投げかけられた。

「惚れましたか?」

さつきとはちがう色合いで染まる火女の顔を見つめるマスターの表情は、娘か孫でも眺めるようにあたたかい。

「ちがうよ。なんか他人事って思えなくつて……それだけ」  
そういつた火女の前でマスターが動き出した。

背面のボトルラックからフォアローゼスの瓶をつかむと、ロックグラスを一つカウンターに並べ、静かに注いで、すっと前にすすめた。  
そして意外と似合つ、いたずらな顔でこういった。

「知つてますか？　こいつは恋の由来を持つバー・ボンなんです。  
帰るときにもつていつてくださいよ」  
鮮やかに咲く、四つの薔薇の花びらを描いたマークを、ピーンと人差し指で弾く。

「いい夜になりそうです。あの男のところに戻る時間まで、お嬢に付き合つてもらいましょうか」

がっしりとした手がグラスをつかむ。

マスターはバー・ボンを口に含むと皿せりに皿を細めて、満足げにもう一度火女に向かつて微笑んだ。

マスターが持たせてくれた、フォアローゼスのLTDボトルが入った紙袋を胸にかかえ、火女はアパートの階段を駆け上がった。

二階の一一番奥。自分の部屋のドアの前で足をとめると、弾む息を整えながらきつく目を閉じ、そつと音を立てないように強く紙袋を抱きしめた。

少しうつむいた顔が袋にあたり、パルプの乾いた懐かしい香りが鼻

をくすぐった。

楽しく遊んで家に戻ってきた、そんな子供のようだった満足げな表情が、息苦しく切ないものに変わっていた。

ほんの数秒そうしてから、はみ出でいたボトルの頭に、まるで愛しい男に捧げるような熱く優しいキスをひとつすると、袋を右手に下げた。

その時にはもう、いつもどいつもいといった風な、ねむたげな顔になっていた。

後ろでまとめていた髪をほどくと、首を一振りしてから左手で搔き揚げて乱す。

がさつな音をたててドアノブにキーを差し込んでまわすと、勢いよく開けて中に入った。

「おかえり」

涼しいアルトの声と、清んだ紅茶の香りが火女を迎えた。

ジタンの残り香がわずかに混じったその芳香は、ハイラングアッサム。

独りじゃないことを感じさせてくれるその声と紅茶の香りに、さつきの表情が戻ってきそうになつて、あわてて火女は声をあげた。

「・・・・・ただいま」

そうぶつちょう面で小さくこたえ、パンプスを脱ぎ捨てて廊下にあがると、その先の左側からひょこつとシンが笑顔を見せた。

廃人だった顔に笑みが戻つたのは、この数日前からだ。

ため息が出そうなほど口を隠して、火女はバサバサとせわしく髪を搔きながら右側、キッチンにつながるリビングに足を向けた。普段は小ぎれいにしていたが、シンを呼び寄せるときに乱雑にした部屋の中が、塵ひとつなく掃き清められ、すべての物がきちんと整

理されていた。

自分がいなないあいだにシンがやつたことを見て、肩越しに振り返ると、紅茶を淹れる後姿を見つめた。

その背中に飛びついて、唇を奪いたい。

身が震えるほど強く思つたが、視線を引き剥がし、顔をまた前に向けてテーブルのそばにどさつと横になつた。  
そばにあつたクッショוןをかき寄せて、あいの下に敷いてうつぶせに寝転がる。

さつき聞かされたマスターの言葉が頭の隅をよぎつた。

「惚れましたか？」

軽く目を閉じて、口までクッショוןの中に埋めて、心の中でさけんだ。

『『惚れただがどうした、悪いの？』』

部屋に男を連れてきたのは初めてだつた。

今でもなんでそうしたのかわからない。

もつとわからないのが、こうやって二人で暮らしていくことだつた。

始めは、偶然に自分の目の前にあらわれた紅椿の男から何か聞きたそう、そうおもつただけだつた。

あの一家の主だった男たちの顔はすべて記憶している。特に次期二代目の周辺にいる者は、どんな人物かまで詳しく調べてあつた。だから一旦見てすぐ、二代目に影のよつに付き従つてゐる冴島心だとわかつた。

だがそれと同時に火女の人感情を察する力が、目の前の男がなにか・・・・おそらく恋愛について悩み、葛藤していることを気づ

かせたのだ。

火女はこの町に古くから続く、テキヤ系の組の娘として生まれた。明治の侠客を地でいく父親と鉄火芸者な母親が率いる灘組は、古風なわずか数人の小さな所帯で、ヤクザとは違い、主に祭りの縁日に出展する出店で生計を立てる番員師である。

そのシマに乗り出してきたのが、義隆の紅椿一家だった。

フロントによる土地の買収で合法的に進出してきた後、屋台を警察に道路交法違反でタレこんだり、客を装い難癖をつけ喧嘩にもつてゆくなどという方法で、一人、また一人と留置所に灘組の者を送り込み、裸になつたところでシマの所有を宣言した。

紅椿による人海戦術で、あっけなく組は潰された。

大阪の兄弟分の所に身を寄せた火女たち家族と、最後までついてきた若頭の緒方 熱だつたが、手伝いで縁口に出ていた父親が喧嘩の仲裁で刺されて死亡するという不幸に見舞われた。

その時、中学三年だつた火女は、兄弟の組長や母親が止めるのも聞かず、地元に戻つた。緒方もついてきた。

組を再興する、などという気ではなかつた。ただ紅椿一家だけは許せなかつたのだ。

義隆は元々灘組のシマが欲しかつたわけではなかつた。

狙いは土地で、まず小さな商店街を乗つ取つて大手ディスカウントスーパーに売り払つと、その会社に付随する企業に周辺の土地も売却した後、シマを放棄した。

土地以外にも裏の収入があつたのはいつまでもない。

紅椿一家によつて、火女の育つた町は跡形もなく消された。自分たちだけなら我慢したが、そうやつて土地を奪われ四散しなければならなかつた人たちの話を聞き、一矢報う為に戻つてきたのだ。

だがすつかり住む人まで様変わりしてしまつた町に、彼女の居場所はなかつた。

香具師とはいえ世間ではヤクザと同類である。周りや学校ではヤクザの娘として見られ、隔てられた。火女は孤立した。

幼く考えが浅かつたと言えばそれまでだが、意氣込んで町のために戻つてきた自分の思いと、周囲との温度差に火女は気落ちした。それがさらに孤独を深めてしまう。

そうやつて避けられ突き放されて暮すうちに、自分を隔てる人の輪を外から眺めるようになつた。

それが相手の考えや思う感じていることを察する力を育てた。しかしその力がさらに火女を人から遠ざけてしまつた。

相手のことがわかるので、たまに自分に近寄つてくる者がいても、怯えや興味本位な感情が見えると、一歩引いてしまうのだ。

それは特に男に対してひどかつた。

その頃から人目を充分に惹く容姿だったので、明かりに誘われる蛾のように、女より男の方が寄つて来てしまつ。それが同性の反感を買ひ、もっと孤立してしまつた。

また大人になる前の男で、同年代の女性より精神的に成熟している者は少ない。

そんな言い寄つてくる男たちの未熟さや欲望のストレートさを、まだ若かつた火女はうまくあしらえず、全て疎ましく思つた。

一人の方が楽だ、そう思い、その通りに生きた。

だがそうやつて成長していくうちに、火女の中にある純粹な憧れ - - - - 本当に身も心もゆだねられる相手が欲しいという気持ちは、胸の奥で意識されないままどんどん大きくなつていった。

今思えば、復讐などという報われない、乾くばかりの行為を行なうとしている自分を止めてくれる者を探していたのかもしれない。

中には優しく思いやりのある男や、力強く引っ張ろうとしてくれる男もいた。

でもどんな男も違つていた。

失つた欠片を探すようにして、火女は大人になつた。  
その間にも人を見抜く能力は培われてゆき、前後の行動まで読めるようになつていた。

しかしそれがなんになつたというのだろう。

まるで幻を追いかけるような心の旅で身に付いてしまつたその力を、そして自分を、火女は無価値だと思った。

そんな中で火女は、一つだけ自分が役立てることを見つけた。  
何かで行き詰まり、くすぶる男を癒すことだった。 そうすること  
で少し、自分の心も楽になるのだ。

娼婦と名乗るのは相手に気づかいさせないためのブラフだったが、  
そういう男を見つけると世話を焼いてきた。

そんな暮らしがシンという存在を引き寄せてしまつたのかもしれない。

はじめは打算で近づいたが、シンが自分を見る目の中にデジャヴを

感じて興味をもつてしまつた。

鏡に向かい合つて、その中に自分の半身を見つけてしまつた、そんな擬似感を火女もおぼえていたのだ。

紅椿一家の弱みを探り出し一矢報いる、そんな建前が、探していた欠片を見つけた予感に取つて代わつた。

それは放心して歩いていたシンを拾い、いつしょに時を過ぐすうちには、確信になつていつた。

素直に相手に飛び込めない自分。相手にとつて重荷になる、そう感じると身を引いてしまう自分。

同じものをシンに見た火女は、過去の寂しかつた自分を救う気持ちで、この男を助けようとした。

失くしたのは欠片ではなく、自分の心の片割れ・・・・・生き別れた双子のようなデジャヴを感じさせる自分の半身。

ずっと相手を好きにならうとしていた。だがそつではなく、好きになるのだ。

何を考え思つてこようと、巻き込まれるよつてくなつてしまつ。シンと出会つてそう気がついた。

片思いといつのは始めからわかつてゐたが、それでもこの気持ちは押しどどめようがなかつた。

わざかでもいい。一日、一時間でもいい。そばにいてあげたい、いてほしい。

そして一夜の幻でいいから、シンとつながりたかつた。

だから自分の想いを隠し、会つた時とかわらぬスレた風をよそおつて、シンの心の負担にならない、娼婦を演じてきたのだ。

しかしシンは自分に触れようとさえしない。

嫌われているのではないことはすぐにわかつた。その逆で、昔の自分のように、惹かれることを恐れている、そう感じた。

『気にしないでいい……あんたがまた好きなその人の元に向かう、それまでの間でいいのに……』

少しづつ心を開きはじめたシンのことを喜ぶ反面、一人の間に引かれた一線の深さを思う。

目もくらむほど、それは越えられない溝だった。でもそれがなんだというのか。報われないくらいで止まるなはじめからそうしている。

辛くないと言えば嘘になるが、火女はそう思い切り、これぞよい心で、短いであるシンとの暮らしつづけていたのだった。

『最初で最後の恋なんだ。しめっぽいものはしまって、心も身体も張つてやるしかない』

抱えているいろんなものをそう精算して、火女はシンを見つめた。自分のこの胸にずっと抱いて暖めた背中だ。

そのひろくあたたかな背中が振り向いた。

一つのカップを手に、笑顔を自分に向けてくれるシンを見て火女は、この一瞬だけ許した笑顔を好きな男に見せた。



洋一と凜が再会してから10日が過ぎたある日。

「機材はほとんどそろつてきます。でも玲さんが最高のヤツつていったからそれで集めちゃつたけど、すんごい金額になつて……大丈夫?」

「だーいじょうぶだつてば。ぜんぶ凜花が払うんだから」

「…………それつて凜花さんの許可ももらつてないですね?」

「うん。でも断られるわけないし」

「…………」

女装ルームでレイラとの打ち合わせを終えケータイを切つた玲に、こちらも音響関係に連絡をつけていた真紀がそう報告してきた。

「あとは綾乃さんに頼んだ衣装がどうなるかよね」

「それも大丈夫でしょ。あの人、凜花さん級にいろんなことに顔が効くみたいだし」

真紀がそう答えたとき、また玲のケータイがあの水戸黄門のメロディを奏で始めた。

「はーい、ウッキー! そつちはど? うん、あつそ。じゃ一台はおさえたわけね? ありがと。え、改造の方? うーん・・・・・それはこれからなんとか考えるわ。そつちもアテがあるならあたつてみてくれる? うん、そう。ウッキーにまかせるから。はいはーい、じゃ、よろしく!」

ピッとは電話を切つた玲に笑いながら真紀が「ウッキーってあの人のこと?」などとたずねるのに笑顔でうなづくと、両手を上に突き上げて伸びをしながら、ソファにどさつともたれかかった。

「改造かあ・・・・・・・・ お金よりできるといがあるかが問題よね  
・・・・・・・・」

ほとんど馴染みのない分野なだけに、じりやつて探せばいこかすら  
思いつかない。

真紀の方を見ると、彼もアテがないらしく顔を横に振った。  
その時、とつぜん声がした、

「それなら心配すんな。俺がなんとかすっから」

「凛花！」

「あ、凛花さん！」

声のした方を見た一人が、同時におどろいて大声をあげた。  
視線の先にいたのは、リビングの入り口の壁にもたれて、笑つてい  
る洋一だった。

その目に以前の光が戻つてゐることに玲が気がつき、もう一度おどり  
く。  
洋一はあっけにとられた表情の一人の前まで歩きながら、続きを話  
した。

「キャンピングカーを作つてる車屋が知り合にいてな。そこに  
頼めばかなり無茶な注文でも聞いてくれる。なんとかしてくれるは  
ずだ」

簡単だとも言つよいにそう洋一は口にすると、玲のそばにこも、  
スーツの中から一枚の折りたたんだ紙を出して彼女に渡した。

「それよつと玲、それ頼むわ。前にいつてた友だちに作つてもうつ  
てくれ。素材は極上で、金は前払い渡す。最高傑作を作るつも  
りで、そつ伝えてくれ」

首をかしげながら、渡された紙を開いてそれに目を落とした玲が、  
ぎょつとして叫んだ。

「ちょっとあんた！ これなんのつもり！？ なんでこんなもんがいるのよ！…」

「今回の依頼用だ。 ヤクザの俺のまま、ライブの手伝いなんかできつこねえだろ？」

「そりじゃなくて！ なんでこんな服がいるってのよ！…」

「深い意味なんかねえよ。 着てみたくなった、それだけだ。 とにかく急ぎで頼むわ」

人の悪い笑みを浮かべて玲にそう答えながら洋一は、あの山中の家から去るときのことを思い浮かべた。

玄関先で靴を履いていると玲が、「あ、そうそう」と忘れていたことを思い出した風に、服の中からこの紙を出して渡してくれた。

「前にあたしがデザインしたものだけど、洋一にあげるわ。 それ着て、生まれ変わった氣でやんなさい」

そういうて玲は妖艶な笑みを見せたのだった。

洋一の答えに納得がいかず、食つてかかるうとした玲だったが、自分を見おろす目に何かを感じてぐつと口を閉ざす。

-----なんかわかんないけど、吹っ切れた目になってる。

兄ちゃんのことこの服は関係ないみたいね

一人のやりとりを見ていた真紀が、興味深々といった顔で玲が握った紙をのぞこうとすると、玄関が開く音がしてあわただしく綾乃が駆け込んできた。

洋一の姿を見て「あら、ひさしごり」などと挨拶したが、すぐにいつものおつとりとした口調ではなく、あわてた声でしゃべりだした。「たいへんだわ。 レイラさんのこと探し回ってる人がいるの。なんか大阪の方の人らしいんだけど」

「ああ、それはあつちの極道だ。それに元の組もからんでる」「え？」

三人が同時に洋一の方を見た。だがそれにかまわず自分の指示を話します。

「それでだ。レイラって子をまず見つからないと心に纏す。場所はまかせてくれ。だからすぐに会わせてほしい」

「ちょ、ちょっと待つてよつ。あんたいきなり帰つてきていつぱい言いすぎだつてば！」

「いや、急ぐ。そろそろその子の居場所も見つかってる頃だ。そういうことでヤクザ舐めんじやない。それにさらわれちまつたら終わりだぞ」

帰つてきたとおもつたら、豹変してテキパキと話す洋一に玲はとまどつたが、妙にいうことに迫力があるのでうなづくと、ケータイでレイラに連絡を入れはじめた。

「真紀つ」

「はい！　・・・・・？」

「場所教えるからトレーラーを車屋に運ばせてくれ。それで綾乃

「

「はい？」

「真紀についていっててくれ。おまえがいれば話も早くなるだろつ」「はいっ。まかせて洋ちゃん！」

そのこたえを聞いて、洋一が満足げにニヤリと笑う。綾乃是少しうつとりとした顔でそんな洋一を見つめた。

『洋ちゃんつてたまにだけどうやつて凛々しくなるよね』

そうおもつて綾乃が頬に手をやつたとき、ケータイを閉じた玲が洋一を見上げた。

「レイラさんのOKもらつた。今から迎えにいくつていつといた

よ

「わかった。用意してくるからちよつと待つてくれ」

そういう残すと、洋一の姿が寝室へと消えた。  
みんなが不審顔になりながら待つこと30分。洋一が女装して出てきた。

ボディラインに沿つた黒のステッパー・スカートと、ビニカの秘書  
といつた風だ。

ひさしひに凛花をみた氣分でその姿を見つめていた玲が、あつと  
いう顔をした。

目の前にいるのは凛花ではなく、ただ女装しただけの洋一だ。  
なぜなら、まとつてゐる空氣が変わつていない。

かけていた尖り氣味の伊達メガネの縁を押し上げながら、洋一が玲  
を見ていう。

「よし。じゃ下に車を用意してあるから。いくぞ玲」

「あ、うん・・・・・」

洋一はバー・カウンターにいくと、隅に置いてあつたメモ用紙に車屋  
の住所と電話番号を書いて真紀に渡すと、「たのむわ」そう声をか  
けて玄関にむかつた。

「もオなんのよ、あいつ！ わけわからんないしつ」

ぶつぶつ言いながらも、玲はその後ろについて歩き出した。



「若。意外にみつからへんもんですね、ちつさい町やの」「せやの。紅椿に渡りつけるついでに、サクッと終わらせよおもてたんやが、なんやめんどい氣イしてきたわ」

昼夜がり。宿泊しているホテルを出て紅椿一家の事務所に向かいながら、鬼小島組の二代目・雄也とお付の若衆は、繁華街周辺を見回しながら話していた。

おやつといった顔で若衆がたずねる。

「めんどこ、でつか?」

「せや。組長の方は本部入りの餌ぶらせばとるやかい、心配ないんやが、あの一代田つちゅう奴の田つきが氣に入らん。あれはこつちを隠」」オとる田Hやつたわ」

「ですけど若。あのオヤジがまだそいつ抑えとるんですから、事あらへんのとちやいますか?」

「・・・・・・いいや。調べてみたらもオ組員はボチボチ一代目の方に付きますらしげ。まああのガメツいオヤジよりか人望があるんやろのや」

そこで雄也は足を止めて言葉を切ると、若衆の肩をかかえこんで耳うちした。

「念のためや。何人かこつち呼んどけ

「え、そないなことしてかましまへんのでつか?」

「ああ。わしのカンやけど、この人探しであんまりこのもんはアテにでけへん氣がするんや」

「ですけど、よそのシマに兵隊連れてきて、妙なことにならしまく

んか？」

「かまへんかまへん。あのオヤジは本部入りつちゅうて舞いあがつとるさけ、なんとでも言いくるめれるわ。アホなやつちやでほんま。本部つちゅうても執行部に入らんとなんの意味もない。名刺に書く肩書きがいつも増えるだけや。まあこれで億は錢引いてこれるさけ、こつちはホクホクやからあんまし悪口も言えへんけどな雄也はフフフツと楽しそうに笑い声をたてた。話を聞いて若衆がびっくりした顔をしてその顔を見た。

「億でつか！？ そないにぎょーさん引けまんのか？」

「ああ、あのオヤジは錢は持つとる。それにの、今度『冷たいヤツ』のルートも渡してやることにしてんねん。・・・・・うちらの地元の大阪も最近はポリや麻取がうるそオてかなわんさけ、こつちで捌かして売り上げをハネたろつちゅうてな」

ひえ！と若衆は小さく奇声をあげて、あわてて周りをうかがう。「シャブもでつか。・・・・・若是頭よオ回りまんなア」

「アホ！ わしをおだてたかて、なーんも出エへんぞ」

そこで二人はクククツと含み笑いをすると、また歩き出した。

紅椿一家の事務所では、雄也たちを迎えて、洋一以外すべての組員が顔をそろえて待っていた。

会議室に皆を集めた義隆は、自分のそばに雄也を立たせると、機嫌のいい声で話し出した。

「今度こちひらの鬼小島の若の口利きで、うちひら紅椿一家が神戸の本部入りできそうなんじや。 もしそうなつたら箔も付いて、この街以外にも睨みが利くよつになる。 そんでも弱いとこを吸収して、ますます一家も大きゅうなるやう。 まつ、本家の直系に入つたら、これまでみたいな上納の金額じや追つつかんよつになるよつて、気持ちええモンでも捌くしかない。 その辺のことも若とこれから話して詳しうに決めるよつて、眞もそのつもりでおつてくれ」

義隆はそう一方的に宣言すると、直立不動で居並ぶ組員達を睨みまわした。

その目が、最前列にいた雄五郎のところで止まつた。

「雄五郎。 洋一はどしたんじや？」

「若はすでに依頼の人探しに出ておりまして、連絡がつきませんでした」

義隆の顔にいぶかしげなものが走る。 が、無表情な雄五郎の顔には、何も浮かんではない。

元々義隆は、この件では久しづりに陣頭指揮をとるつもりだつたので、言う事をあまり聞かない洋一がいなが好都合と思ひなおし、「よし、ほしたら解散！ おまえ等、精出してあの歌手探しよつ」と発破をかけてから、雄也と共に部屋を出て行つた。

その姿が消えてから、雄五郎のところに組員たちが集まつてくる。  
「真渦の伯父貴。 おやつさんの話に出了のつて、ありやクスリじやねえんですか？」

「クスリは本家でも御法度ですよ。 なんでまたそんなもん、うち

らが捌かんといかんのですか？」

そう不安げに口々に言つてくる組員に、雄五郎は薄く口を開けたま

ま何もこたえない。

古参の組員の一人がぼそりとつぶやく。

「クスリはいかん・・・・・・ あれだけはわし、捌きとおない」  
「でも組長直々の指示で、しかも本家の直若から来た話ですよ。断  
れつこねえ」

「なにが本家じゃつ。 あんなとこ入つても、ええ目見んのはオヤ  
ジさんだけじやー。」

「おいっ」

雄五郎のどがつた声と鋭い視線を受けて、男は「すみません」と小  
声で謝つたが、表情は悔しげで苦渋に満ちていた。  
まだやわざわと話をしているみんなを押しのけると、雄五郎は大股  
で歩き出し、部屋を出て行つた。

マンションの外に出た二人は、ロータリーに止まっていたジャガー  
に歩み寄つた。

玲の前にいた洋一が、カチヤと後ろのドアを開けて振り返る。

「玲。 おまえ後ろに乗つてくれ」

「え？ うん・・・・・・」

助手席に乗り込む洋一をいぶかしみながら、玲がバックシートに身  
体を差し入れると、運転席にいた大きなオーバルサングラスの女性  
ドライバーと目が合つてドキッとした。

濃い琥珀色のこのサングラスが似合つ日本人はほとんどない。

芸能人でも似合わないのに、妙に小作りな顔にはまっている。

だがそれ以上にミステリアスな空気を持った大人の女性だった。

洋一と同じようなスーツを着ているその人から、どうしてか視線をはずせない。。

ステップに足をかけたまま自分を見つめて固まる玲に、彼女は艶やかな笑みを浮かべて見せる。

それで魔法が解けたように玲はまた動き出すと、ちょこんと広い後部席に一人座つた。

『どうかの女優さん？ なんか見たことあるんだけど……雑誌？ テレビだけ？』

この娘にしてはめずらしく、遠慮がちに運転席の彼女に視線を走らせていると、洋一がその人の方を向いたのがわかつた。

気づいた玲が「あっ！」と小さく声をあげると、洋一が「かあさん」と言つたのが重なつた。

呼ばれたその人は、ハンドルに手をかけたまま、ゆっくりと顔を洋一に向ける。

一時、ふたりは見つめあつた。

洋一の真剣な表情を、玲は初めて見た。

「これが俺……いや、凛花です」

そういうた声は、男のままだつた。

玲に見せた笑みのまま、凛は洋一を見つめている。

サンゴラスに隠されて目の動きはわからないが、変わり果てた息子の姿をつぶさに観察しているのだ、そう玲はおもつた。

そんな凛を見ながら、玲はなぜか自分の胸がドキドキしてくるのを感じた。

『この人がこいつの母親なんだ。よく似てるのにぜんぜんちがう。こんなに息苦しいほど綺麗な人、みたことない……』

凛の手がハンドルから滑つてはずれた。スーツに包まれた腕が顔の方へと動き、白い海泡石の色をした指がサングラスを額の上に押し上げる。

美しく力強い。

野生動物に似た気高い瞳があらわになり、玲の息がうつと詰まる。グラスをさわった指が前へとのばされた。

スローな手つきで目の前にいる洋一の頬を撫で、親指がわずかに唇に触れた。

「凛花……そうね。息子もいいけど娘もほしかったのよ」普通の親とは思えぬ台詞をするつと口から放つと、いつそ艶やかに凛は微笑んだ。

凛の手が離れてからも、ずっと固い表情のままいる洋一の口が動く。

「俺は……いや、あたしはこの凛花といっしょにこれからいきます」

声が変わった。

意味はわからないが、何か大事なことを宣言したんだ、そう玲が感じ取り、身を固くした。

だからわざわざ凛花になつて、母親の前に姿を見せたのだ。その立会人の役目をなぜか振り当てられた玲は、今までに感じたことのない緊張に襲われた。

それぞれの思いの中、真剣な顔をしている一人の前で、凛は変わら

ぬ表情でいる。

世界から隔離されたジャガーの車内で、凛花と玲が時間の感覚を失うほど時が流れた。

凛花の目はずっと凛から動かず、その目を見つめている。やがて凛の口が別の生き物のように動いた。

「いこよ。好きなように生きなさい」

その言葉と共に、凛が身体を前に投げた。玲にはそう見えた。彼女の身体と凛花の身体が重なり、肩にまわした腕を軸に凛の顔が伸び上がる。

綺麗な顎のラインがあらわになり、唇が凛花のそれと重なるのを、玲は睡然として見た。

とつやに連想してしまったのは、観てはいけない倒錯のワンシーン。

まるで百合・・・・・・ビアンな恋の一幕のような一瞬が過ぎた後、玲の顔がボッと赤く染まる。

そのときには凛の身体は魔法みたいに元の姿勢に戻っていた。やがて何事もなかつたようにキーをひねつてエンジンをかけると、ジャガーをスタートさせた。

うつむいて膝の上で両腕を突つ張り、ギュッと拳を握り締めながら、なぜか玲は一生懸命に自分に言い聞かせていた。

『ちがうちがう、あれは女同士じゃないのよー。れつきのは母親が息子にした挨拶なんだからつ・・・・・ああもオー！ 田の前であんことすんなよな、こっちが恥ずかしいじやん』

高校生にはまだ刺激が強すぎたようだった。



玲のナビで向かつたレイラの潜伏先は、鄙びた空氣と硫黄の香りただよう温泉町のはずれにあるビジネスホテルだつた。地下駐車場につくと凜を残して、洋一と玲の二人が外に出てロビーへとまわる。

エレベーターで五階に上がり、客室フロアをゆくとすぐに、玲が並んでいるドアの一つの前で足を止めた。

コンコンと軽くノックしてから、小さく「レイラさん?」と声をかける。

誰かが前に立つ気配がしたとおもつと、ドアが開いてレイラが顔をみせた。

・・・・・　へえ。どんな小娘かとおもつたら、意外といい空氣まとつてるな。　それに落ち着いてる。さすがにトップシンガーワけか

彼女を生ではじめて見た洋一は、心の中でそう感心した。

車内で打ち合わせた通りに口を利かない洋一の代わりに玲がうながすと、もうすでに出て支度を済ませていたらしく、古ぼけた小型の革トランクケースを一つさげてレイラはすぐ戻ってきた。

玲を先頭に、レイラをはさんで後ろを歩きながら、さりげなく洋一は辺りを探る。

まだ組の搜索はここまでびていないうだ。だがおそらくすぐに探し当ててくるだろ?。

ロビーを出る前に手で二人を制すると、洋一は先に外に出て周辺に不審な人や車がいか確認してからケータイで凜を呼び寄せた。一分もたたずにジャガーが前に止まる、二人に合図して開けてお

いた後部席に乗り込ませて自分も助手席に身を滑り込ませる。すばやく流れるようにジャガーが走り出した。

行き先は自分と母がこの間までいた、寺の裏にあるあの隠れ家のような場所だ。

洋一でも知らなかつたといふので、まことにほんとは見つかる心配はない。

それ以前に、母の元にいるのなら、どんなことが起きても絶対に安心だと、無条件で洋一は信じられた。

玲のプランだと、ライブは一週間後の週末。

本当ならP.A.やバンドとの打ち合わせやリハなどするのだろうが、追われている状況を考えると、できて直前に数回、もしくはふつつけ本番になるだろう。

バックミラーをのぞくと、一人が話している姿が映っていた。主に玲の方が話しかけ、レイラがそれに笑みでこたえている。自分を取り巻いている今の状態を、この娘は知っているのだろうか。そんな疑問がうかんでくるくらい、彼女の顔は屈託の無い穏やかさで満ちていた。

洋一は、着いたら少し厳し目に話しておくかと考えてから、フロントガラス越しに行く先を睨み据えた。

そうすると、再会した日の夜に凛が言つた言葉が、耳によみがえつてくる。

『人は一つしか心をもてない。いくつに見えてもそれはおまえ自身なんだ』

今ならわかる。

女装・・・・・そしてその時に感じるエクスタシーと暴力への欲求。

それまで洋一は、それは隠れていた慾だと考えていた。

だがそうではなく、元々の自分が持っていたもつ一つの属性が顔を見せただけ。

そう気づいた時、洋一はそれを押えてゆく自信がなく、どんどんと制御不能にまで高まってしまう快感に恐れをいだいた。

それを救ってくれたのが、全ての稽古を終えた夜に母が話してくれたことだった。

稽古着のまま向かい合つて凜はいった。

「洋一。あんたが感じてるものはね、本当はほとんどの男に備わっているんだよ。普通ならそれは表に表れる事はない。でも心や身体の女の部分が大きくなると無自覚に感じてしまうことがある。あんたには人並み以上にそういう部分があつたんだろうね。それが女の姿をすることで完全に目覚めてしまった。

ただその快感自体は悪い事じゃない。男と女、一つのものを感じ取る事で、感受性も考え方も幅が広がるんだからね。

あとはおまえの考え方次第だよ、洋一」

そう言われて、おぼろげながらもこうなつた理由がわかつた時、洋一はもう一つの母の言葉を思い出した。

『迷いは迷いのまま、胸に抱えるんじゃない。 外に出してその手に抱えていきな』

女装時の自分 - - - - 凜花にともなう負の属性。

母はあえて言わなかつたのだろうが、女装だけではなく、暴力によつてもそれは開花してしまつたのだとおもう。それを今すぐどうこうなどできないだろう。

だがどちらも自分だ。 封じ込めたり無視したりはできない。

そしてシンへの想いもそつた。

それまでの洋一は、兄貴として自分を慕つてくれていたシンが、凛花としての自分にそれ以上の想いをもつてしまつたこと、ずっと目を背け続けていた。

なかつたことにしたい。 また前のように何も考えずにシンと付き合つていきたい。

女としての己がシンに惹かれてきているということに無意識に気づき、それを否定しようとしてそんな現実を過去に戻すなどという、できないうことを無理に考えていたのだ。

次に洋一が考えたのは、凛花の存在を捨てることだった。しかしそんなことは自分の半身を切り離すことと同じだ。凛花と自分。一つに見えるその人格は根っこでは一つ。優劣もなくどちらかが支配などできはしない。

それに自分の一部を見捨てて楽しく生きていける人間などいない。

先のことなど何もわからない。 けれども母の言つ通り、持つているもの全て - - - - 凛花という存在もその中にあるものも、そしてシンとのこれからも、わからない今までいい。そのまま連れてやつてこう。

やつと出た結論と覚悟を示すため、今日こうして自分の意志で凛花となり、洋一は凛に宣言したのだった。

ジャガーの車内にいるのは、女装したヤクザではなく、女としての自分をその胸のうちに認めた一人の人間。

いま初めてここに、鮮やかに花開く、女装の天女が生まれたのだった。



日が落ちる前に隠れ家に着き、レイラに宿間を明け渡した洋一は、三人を座敷に集めて今の状況を話した。

そこでレイラは洋一が男だと知つて目を丸くしたが、「ぜんぜん気がつきませんでした」と小さく笑つただけだった。話が進むうちに、自分を探しにヤクザが来ていると聞かされ、さすがにそのときは顔を曇らせたが何も言わず、最後まで黙つて聞いていた。

「…………といつわけだ。 本當ならライブなんか諦めて大人しく東京に帰る方がいい。俺はそう思う」すべてを話し終えた後、洋一がいつた言葉に、レイラと並んで座つていた玲が眉を吊り上げた。

『いまさらなに言つてんのよ！ ちゃんと準備も出来てきてるのに』ケンカの前の猫になつて睨みながら、玲がそう叫ぼうとしたとき、洋一に目を向けられて台詞を飲み込んだ。

わかつてるから今は黙つてろ。田はそう告げていた。洋一のとなりにいる凜も、レイラを見たまま少し煙る感じの笑みを浮かべているだけで、洋一の言つたことに口をはさまない。しばしの沈黙の後、三人の視線を受けながら、レイラははつきりと言つた。

「たしかにそうだとおもいます。 でもやめるわけにはいきません」わかつっていた答えを本人の口から聞いて、玲が元の表情に戻つた。

「『』のライブをやることをずっと前から考えてました。でもどんなにうまくやつたとしても、たくさんの人たちに迷惑がかかる。いつ

もそこで諦めました」

そこで言葉を切ると、レイラはほんの一時、目を閉じた。

玲にはその一瞬が、彼女が迷い考えた長い時のよつて感じられた。

「でも私は自分の歌を、ロックをまた歌つてみたい。周りの期待から逃げるんじゃなくって、もつ一度思つて」を全て歌つてからまたみんなに向き合いたいんです。

そうしなければ私のコアな部分・・・・その中にあるものを見失いそうなんです。それが消えてしまえば私はただ与えられた歌をうたう機械になってしまつ。そんなのじゃ、誰の胸にも響かせられない。

これからもずっと私の歌を聴いてくれる誰かに届けるために、どうしてもやらなくつちやいけないライブなんです

熱を込めるでもなく、また激しい口調でもなく、レイラは淡々とう語つた。顔がわずかに赤みがかつていたが、興奮している風でもない。

しかし自分をしっかりと見据えて話すレイラの目を見て洋一は、彼女の真摯な想いを感じた。

「そんなきれい事じゃないってみんな感じると思います。大勢の人に迷惑をかけて、自分のやりたいことを通すんだってわかつてます。でも最小限の迷惑でやれる最後のチャンスだとおもつてるとです。関わってくれているあなたたちに、頭下げて『ごめんなさい』じや済まないけど、起きた事は全て私が引き受けます。ただ付き合つてください、とは言えません。私のこの言葉で判断してください」

言い終えてレイラは深く頭を下げる。その上に洋一の声が降りかかる。

「わかった、もう何も言わない。協力をさせてもらひう」

厳しかった表情を緩めて、洋一はレイラに笑いかけた。

引き受ける気は変わっていなかつたが、一度ちゃんと本人の口から話を聞いて、その気持ちを確かめたかつただけだつたのだ。

洋一の答えを聞いて、ほつとした顔をする玲のとなりで頭を下げていたレイラが身体を起こすと「ありがとう」と小声でつぶやいた。だがすぐ口をきつく結んで、痛みに耐える顔になる。

玲にはわからなかつたが、レイラは今この時にも、人に迷惑をかけてまでライブをやることに苦しんでいるのだろう、そう洋一は気がついた。

それを口にしてしまえばサポートする自分たちの負担になる。そう考えてこの娘は何も言わないのだとおもつた。

人に配慮するが多くを語らないシンの姿が目の前のレイラにかぶさる。

洋一は少し目を閉じて、こみ上げる何かと向き合つた。

そして再び瞼を開くと、目の前の歌姫を勇気付ける笑みを投げかけた。

夜になり、ゆっくりと休んでいなかつたのか、顔に疲れた表情をみ

せたレイラを一人寝かせると、このまま泊まると言い張る玲を無理やりジャガーに押し込み、洋一と凜は家まで送り届けた。

また隠れ家へと戻る車中、洋一はなにげなく助手席のウインドウを下ろした。

勢いよく入つてくる夜風は、少し渴き氣味で頬に冷たい。 気のせいか家々や街並みも、冬を思わせる静けさを含んで見えた。

湿度の無い大気に浮かぶ月と星を洋一はしばらく見上げていたが、振り返つて、ふと思い出した疑問をとなりでハンドルを操る凜にぶつけてみた。

「かあさんはなんでそんなに軽やかに生きれるの？」

「・・・・・なによ、急に？ へんな子ね」

ちらつと横目で息子を見て、母はおかしそうに笑つた。

すっかりまた凜花になつてているのがよほど面白かつたようだ。

はぐらかされたとおもつた凜花が、むつーっとふくれてまた窓の縁に掛けていた

腕に顎をのせて外をながめていると、背中で凜のこたえる声がした。

「女だからよ」

振り返る凜花に、夜風になびく凜の綿糸の髪がきらめいて映つた。

窓越しに見える星空をバックに髪を乱すその横顔は、いつか観たミニシャの絵のように思えてしまう。

「女だから？」

「そうよ」

鸚鵡返しこそいつた凜花に、凜が吐息に似た甘い声でこたえる。 風のはためく音しかしない静かなジャガーの中で、凜はこう語つた。

「女はね。毎月毎月、身体から血を流して、そして時には腹を痛めて子供を産む。

当たり前のことだけど、もうそれだけで女ってのは強いんだ。意識してない子もいるけど、それに気づけばなんだってやれるし、どんな場所にだって翔べる

それだけが母が凄い理由ではない気がしたが、言つた言葉には説得力があった。

あのレイラや玲 - - - そして綾乃にしても、男では持ち得ない、柔らかだけど強い芯を隠し持つてこり、そう思つていたからだ。

『それに比べて元が男のあたしは・・・・・』

凛花と洋一。その狭間で揺れる心がまた言葉を紡ぎだした。

「じゃあたしは、凛花はやつぱりまがい物なんだね・・・・・だから教えてくれた秘伝もできないんだ」

まだうまく折り合いがつかないのか、陽炎のように男女とあわただしく性を入れ替えるながら、ぽつりといつた言葉に、凛の明るい笑い声がふわりとかぶさつた。

「あはは、まだ疑つてるみたいね。心配しなくていいよ。あんたは他に似た奴が少ないから迷うかもしれないけど、まがい物なんかじゃない。それどころか、あたしでももつていらない両方の心があるじゃないの。後はそれがちゃんと結びつけばいいだけよ

「結びつけば・・・・・・」

「そうよ。それに秘伝だつて、あれは魔術じゃないんだから、教えたからすぐ使えるつてわけじゃないの。あんたにはもう技術は備わつてゐる。後は技じゃなくつて心のお話よ。そんなもんなの、秘伝なんていうのは」

伝法な姉御口調ではなく、からつとした声で凛はそういうと、まだよくわかつていらない凛花の首に腕を伸ばし、巻きつけてせばに引き寄せた。

「だいたいあたしの子供がまがい物なわけないじゃない」

そう言いながらさつと凛花の髪をかきあげる。

ウイッグなのになぜか気持ちよくて声が出てしまった。

「かあさん、この格好でそれはちよつと恥ずかしい……

外から見えちゃうよ

夜目にも鮮やかに頬を染めうつむく凛花に、凛の悪戯な声が魔法のように降りかかる。

「ばか……照れんじゃないわよ、女なんだから、今は」  
いやそうだから余計に恥ずかしい。そういうおつとした時、顔をあげて凛が威勢よく笑ったかとおもふと、ジヤガーのアクセルを踏み込んだ。

急加速の衝撃でさらに母の胸の谷間深く押し付けられ、また凛花は甘くため息をついたのだった。

隠れ家に戻ってきた凜花は、そつと寝間をのぞいた。

布団をかぶり、規則正しい寝息をたてながら眠るレイラの姿を確認してからバス・・・・・というか湯殿という表現が当てはまる古風な檜風呂に入つて化粧を落とし、洋一に戻る。

どこか懐かしい、玉砂利を撒き散らしたみたいなタイル張りの床に敷かれた木のすのこの上に座り、格子窓から逃げてゆく白い湯気の行方をぼんやりと追つた。

煙のヴェールの先にある人は、湯気でくすぐられて笑うよつに潤んで見えた。

こうしてほつと気が抜けた時、やつと洋一は身体が緩んでくるのを感じる。

なにかと精神的に緊張を強いられることが多かつた日々を思い出した。

意外にも訪れた母との再会と共に過ぎ去る時間。この時がなかつたとしたら、いつたい自分はどうしていだろつ。

そう考えると全身が総毛立ち、洋一は立ち上がり、ちやぷりと湯船の中に沈んだ。

温かい湯と檜の香に包まれながら、ほつと息をついたとき、忘れていた母への疑問がまたひとつ頭によみがえってきた。

秘伝・桜花乱舞。これを伝えるために帰国した、たしかそう母は言つた。

しかし一時帰国しなければならないほど大事なことだったのなら、なぜ今まで忘れてしまっていたのか。それに以前に日本を離れる前になぜ自分に伝えなかつたのだろう。

母が再婚した時、洋一は二十歳。今とそつたにして変わりはなかつたはず。

やはりどう考へてもおかしかつた。秘伝の内容からして、とても重要な意味があるよつに思えてならない。

段々とたずねてみたい衝動が高まり、洋一は勢いよく湯船から立ち上がると、外に出た。

さつとタオルで身体をぬぐい、頭を拭きながら座敷にいくと、部屋の真ん中で凜が腕を組んで立つていて。そのそばに置かれた、ヴィトンのヴィンテージトラベルケースを見てはつとする。

洋一が何かを言つ前に、凜が腕を解くと、舞台の役者のよつな仕草で何かを投げてきた。

反射的に手を伸ばし受け取つた物が、手のひらでチャララッと清んだ音をたてた。ジャガーのキーだつた。

「そろそろ帰るわ洋一」

予想はしていたがあまりに唐突だつたのでとまどつ洋一に、母は自分の名と同じ声を出して言つた。

「こつからはあんたたち・・・・・いや、あんたで充分よ」

「そんな、まだ教えてもらつ事が、手伝つてほしいことが・・・・・」

・

そこまでいつて絶句する息子の目を見て母は語りかける。

「もう教える事なんてないよ。さつきも言つたでしょ、もう後はあんたの心次第、つてね」

「でも秘伝は、なんで今になつてこれを?」

うまく思いが言葉にならない。

あせる洋一をさとすように、優しい目になつて凜は言つた。

「ほんとはね、忘れ物なんてウソ。あんたに会つ口実よ」

「・・・・・・」

ふふふとチャームに笑う凜を見て、洋一があんぐりと口を開ける。

「秘伝なんか伝える気なかつたの。でもそつしたのは、今のあんたに必要だと思つたから。

本気であれを使いたいなら、あんたの中・・・女の部分に隠れたものと向き合わなきゃいけない。

それは厳しいことかもしれない。でもそつあればまきつとそつを自分の味方にできる。

凛花とあんたは一つになれる。あたしはそれを願つてゐる

氣のせいか、母の声がわずかに潤んで聞こえた。

「まつ、ただのカンだけどね」

そういうながら凛は前に進むと、洋一の横をすり抜けた。玄関へと向かう背中についてゆきながら声をかける。

「でも夜だよ、飛行機ももうないし、せめて朝まで待つて・・・」

「チケットはまつひとつあるの。それに悪いけどまつひとつ忘れ物思い出してね。すぐ取りにいかなきゃいけない」

つられて歩く洋一を凛はちらりと振り返つたが、足を止めずにタタキに置いていたパンプスを履いて立ち上がつた。

「ありがと。たのしかつたよ、洋一」

そうじつて笑つた凛の顔を見て、洋一はそのまま玄関にへたりこんでしまつた。

拒絶ではない。でも母の行動を止める術がないことがわかつてしまつたのだ。

放心する洋一を見て凛は一步戻ると、背をかがめて息子の身体を抱いた。

再会した時と同じ夜来香が匂い、洋一の鼻を打つた。耳元で声がした。

「好きなんよつて」生きなさい

さつと離れた身体と共に、甘く切ない香りが遠ざかってゆく。  
洋一はただじっとそれを見送った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5587y/>

---

女装天女！

2012年1月8日20時53分発行